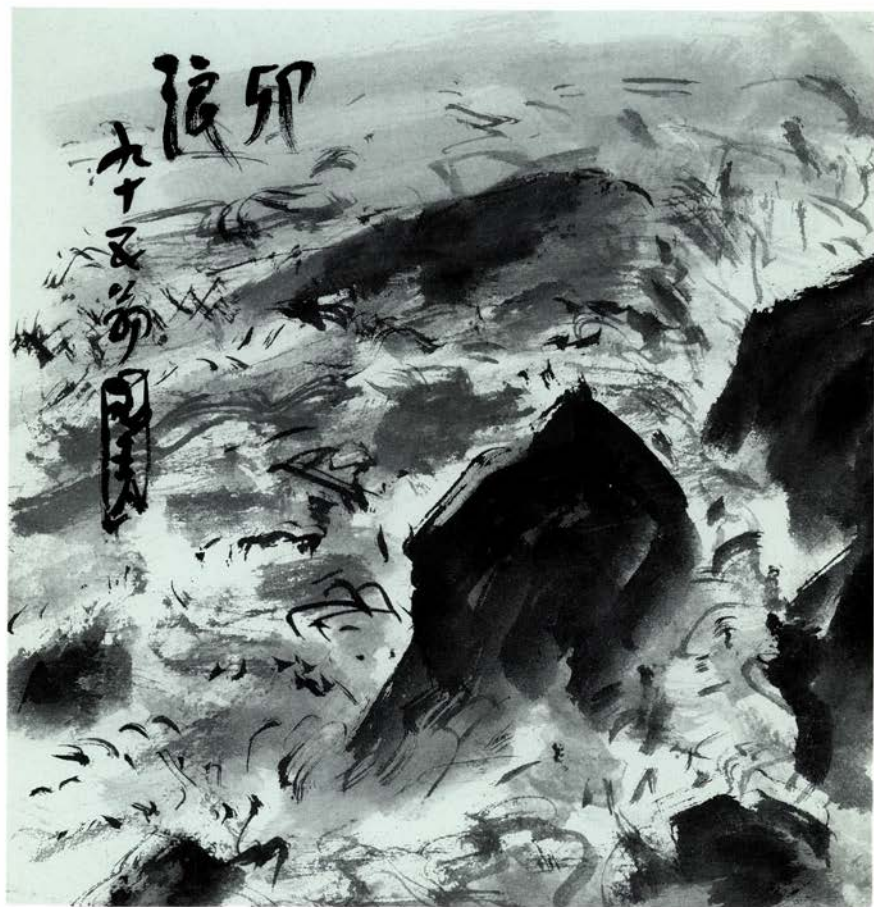


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八五二号
（毎月二日発行）



百川協加盟

No. 852

五月号

会句月5社本忌栗

とき 5月7日(木) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 3階

天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

おはなし

兼題「にっこり」

「声」

「達筆」

「慌てる」

「温泉」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 500円 投句料 400円

◎本年から、毎年、5月本社句会を栗忌とい
たします。

川柳塔社

定本 西尾 栗句集

B6判・248頁・布装上製本
頒価 3000円(〒340円)

発行 川柳塔社

新刊

全日本柳人写真名鑑 平成十年版

A5判・388頁・箱入美装本
頒価 4000円(〒340円)

申込先 〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目

北一ー一ー七〇二号

社団法人 全日本川柳協会

☎(06)35212210

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① $\frac{1}{3}$ 頁六、〇〇〇円 ③ $\frac{3}{4}$ 頁二二、〇〇〇円

②半頁九、〇〇〇円 ④一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月25日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

「道頓堀の雨に……」

を読んで

橘高 薫風

田辺聖子著「道頓堀の雨に別れて以来
なり」の出版記念川柳大会が三月二十九
日、三井アーバンホテル大阪ベイトワ
ーで開催された。六年間に亘り掲載され
た中央公論社の会長兼社長の嶋中雅子氏、
作家の難波利三氏や落語の露乃五郎師匠
をはじめ、柳人四百余人が華やかな雰
囲気の中で聖子先生に祝意と心からの謝
意を表わした。以下は私の読後感である。

聖子先生と私の年の差は二歳、戦前の
住居も福島と堂島、隣り合っていたこと
ことから幼少時の大阪風景への残像は、
人情までをからめて共通する所が多い。

逢引のサーチライトに照らされて

(以下は岸本 水府)

昼過ぎから夕刻、時には夜に入つて私
と母は玉水の金光さんへ散歩がてらのお
参りをした。たそがれどきから朝日ビル
のサーチライトが黄、緑、赤と回転し始
める。豪華船の趣の当時の朝日ビル最上
階はレストラン・アラスカ、一階に千足

屋のティールーム、地下には瀟洒なお寿
司屋があり俳人青木月斗の筆跡で店名が
「かんばやし」と印象的に書かれていた。

母と私は往復に階段のある水晶橋を渡
り、時間によりそれぞれの店のどこかで一
息つくの例としていた。なるほど逢引
のムードの中のサーチライトは一層情緒
が深かろうと、まるでわがごとくように
想像することが出来る。そのような大阪
が随所に出てくるのである。

また人物像、それは剣花坊・久良伎を
はじめ、六大家や高名な柳人であるのだ
が、その姿勢と消息が的確に書かれてい
る。聖子先生はそれらの人たちをご存知
ないのであるが、多くの柳人に会つて故
人の話を聞き、本を集めて得た詳細な資
料の上に、当人の句の理解を深めること
で人物の性格まで把握されたのである。

一読して主役的な岸本水府を第一等に、
井上剣花坊、麻生路郎・葭乃夫妻、食満
南北、小田夢路、鶴彬、小島祝平、林照
子らが際立つて理解出来るのも、例に挙
げられたいくつかの句の功徳による
ものであろう。それに、南北紹介の項で
南北の弟子の長谷川幸延の、南北に対す
る「南北が不遇である」とする感懐とは
別に、聖子先生独自の南北観を披露して

おられる。南北喜寿の際の言葉「私は私
の一代を通じて『苦痛』というものを味
わつていない」とする述懐を、「こうい
えるのこそ大通である。大通には順境も
不遇もないのだ」と仰有る。聖子先生は
柳人一人一人を独自の作家としての慧眼
で見据えて書いておられるのが分かる。
次は句について教えられたことで

母の顔夜中にとす豆ランプ

かんざしをさす時腕が太くみえ

雪に来てさて割箸も悪からず

麻生路郎の句に惚れ、その薫陶によつ
て穿ちのかつた鋭さ、清冽な気韻、ふと
こぼれたような述懐に魅力を感じてい
る私だが、前掲三句のような句の味に心
を注がれるのだった。それは、これからの
選評の上で大きい影響を私に与えるもの
と思われる。

上下二巻、合わせて千三百頁に余る労
作を一人でも多くの柳人に読んで頂きたい。
い。そして先達のためゆめん尽力により確
立した川柳の質的向上の成果を見詰め、
現在蔓延しつつある亜流の川柳に流され
ぬ確固たる見識を養ってほしい。それが
聖子先生の「川柳大好き」の心に報いる
柳人の心意気であり、聖子先生著書出版
の目的でもあると思う。



座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

きびしい時代僕に任せと呱呱の声

(栗)

北岡 波留吉

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言

「道頓堀の雨に……」を読んで

室ノ津

橘 高 薫 風 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

黒川 紫 香 …… (2)

自選集

橘 高 薫 風 選 …… (4)

大空のころ (88)

橘 高 薫 風 …… (50)

川柳の群像 津川紫吻

橘 高 薫 風 …… (53)

古川柳歳時記 『端午の節句』

東 野 大 八 …… (54)

水煙抄

清 博 美 …… (56)

秀句鑑賞

同人吟

西田柳宏子選 …… (60)

水煙抄

田 中 正 坊 …… (58)

水煙抄

時 広 一 路 …… (81)

室ノ津

黒川 紫 香



昨年暮れ、思いついたらま
ま姫路の古川奮水さんを煩
わして播州室ノ津へ出かけ
た。

昔、その美しい景色と人
情、それに史蹟に惚れ何回か足を運んだ地で
ある。近くに綾部山岩見、そして室津の梅林
があり格好な吟行地と思ったのがきっかけだ
ったが、周囲を山と海で囲まれ観光バスは国
道からの細い急坂では無理なのと、適当な食
事場所が見当らなかったで見合わせたが、
さびれた港町となっても美しい風景と史蹟は
好む人にとっては、得難い秘境の一つと私は
思う。

私が訪れ魅力の虜となったのは小学校時代
の友人で、大阪の銀行に勤めたが肺を患って
帰郷した木村清一(清風)君に、呼ばれて水
客君等と共に行ったのが始まりで、戦前、戦中
を通じて何回となく訪れた。その清風君も一
時川柳雑誌の誌友となり投句し、いい句を作
っていたが戦後間もなく亡くなった。惜しい
人である。

室ノ津は室ノ泊とも言われ小さく突き出て
鉤の手になった半島が天然の良港になってい

渺湖抄……………	八木千代選……………	(82)
茴香の花……………	宮西弥生選……………	(86)
「家」……………	酒井輝選……………	(88)
一路集「こだわる」……………	高須賀金太選……………	(88)
「A」……………	春木圭一郎選……………	(89)
初歩教室「張る」……………	吐田公一……………	(90)
四月本社句会……………		(92)
各地柳壇(佳句地十選/白石春嶺)……………		(96)
五月各地句会案内……………		(111)
柳界展望……………		(112)
■編集後記……………		(114)

座右の句
私の句

妻がいる空気みたいになってくれる
子に投資無利子無担保愛燦々

酒井 勇太朗

(柳宏子)

た。江戸幕府時代は参勤交代の西国諸大名が寄港し、ここから道中行列を組んだそうで賑わいは室津千軒とも言われる家並みが細い道にひしめいて日本最初の遊廓も出来た。

戦いに破れた木曾義仲の第三夫人が逃れ来て遊女となり折しも流刑の途中訪れた法然上人に帰依して得度し夫の霊を慰めたという友君の墓と法然上人の像、そして室津が生地と伝えられるお夏清十郎の碑が浄雲寺にある。私の行った頃、その寺の和尚が線香代、花代の謂れを面白可笑しく語ってくれた。

岬の突端に京都加茂大社と同じ加茂別雷神を祭る加茂神社が松林の中にあり天然記念物のソテツが群生する。遠く近くに見える唐荷島、家島群島は一幅の絵となりこの景色は途中の奇勝七曲りからも見られる。

赤線廃止まであった遊廓の女は港の人達に守られ朗らかで親しみがあつた。宿或いは料亭で酌婦として呼び誘われて、町を歩き海岸を散歩し、語り合う事もしてくれた。気が合えば登楼し泊れた。太らかな村の風習だった。

戦時中、魚が余り食べられない頃、職場の人達と行って清風さんの小舟で釣りを楽しみ食べた。大きいのが釣れず、ヒトデばかり釣れたので戦争で人手が足らぬ時に、補充が出来たと笑い合った。室津とはそんな所で関西では近い秘境でもある。またみんなを誘って出かけたところだ。



橘 高 薫 風 選

神戸市 中 村 ゆきをを

鼻の奥くしやみ溜めてや老いの春

風船の逃げた彼方は夢だまり

初夏の丘不意に穴から子供達

乳児洗札タンポ帽子にくつつけて

丘陵見ゆ太古の踊り石に聴く

焦るなよと今夜も時計十二打つ

堺市 桑 原 道 夫

満開の桜のなかの電線や

跼むだけ跼んだ女に見上げられ

金のはほとんど銀は困っているばかり

途中からなさけなくなる汐干狩

佳人薄命蛤のほろ苦さ

銀漢や捨て去りしもの何々ぞ

箕面市 岩 津 ようじ

私なら体が保たん接待費

蛇長すぎる悪い奴多すぎる

わが姿疑う鯛の生けづくり

一炊の夢醒めそうな齢になる

よりによってこんな寒い日ガン検査

最悪の予感が当たる闘病記

西宮市 牧 潤 富喜子

友達の文集にあるわたしF

建国の日の満月がふいと出た

孫の詩に少し触発されている

エリート顔がだぶるよ熱帯魚

接待を知らぬコートがすり切れる

どの顔もさわやか過ぎる金メダル

堺市 山 本 半 銭

パラリンピック命あふれてゲート開く

犬の子に笑いの弾む嫁姑

やりくりをつけて桜に逢いに行く

しみの手をかざして吉野奥千本
染みの手に女のいのち静かなり
盃は一つで足りる陰の膳

岡山県 富坂志重

野菊生け友を待つ間の写真帳
洗っても落ちない老斑ばかり増え
メークする心に芽ぶく春の風
傘寿きてまだ踏み迷う道ばかり
ニコヤカに聞いて帰って皆忘れ
今日の笑み明日へ続けと祈りつつ

鳥取県 土橋はるお

名水で毎日霞む目を洗う
慌てるな卒業だけは俺がする
新風を村に吹き込むお婿さん
斜めから見ても可愛い花嫁だ
番犬が見初めてくれて吠えません
キープまでして無駄酒を呑むのかい

鳥取県 土橋 螢

お爺さんだけ戦争を知っている
石楠花の蕾を鶯が食べている
六時間安眠十八時間安心
天皇陛下萬歳点五十三年命
古稀という大きな息の深呼吸吸
死ぬんなら彼岸のさくら散るときに

富山市 舟渡杏花
追いつめたゴキブリ他人と思えない
かかる世にうかうか穴を出る虫等
七十の我執が実る祝膳

ささやかな年金羨むひとと居て
迷信を掻き出すような耳掃除
丹田に力 追伸二三行

鳥取県 堀江正朗

馴れた闇 妻の動きの音で知る
腹立てた後から見えぬ目が疼く
なにくそと気を張ったとて闇の中
恥多き闇のモグラになって老い
幸せは欲が見えなくなっただけ
春陽射すぬくみに見えた日が生まれ

横浜市 菱田満秋

春の風揺れるピアスに取り替える
満開の下では過去を忘れよう
造花だと思われている胡蝶蘭
一円が足りずに一万円を出す
人生の分かれ目に運つきまとい
どうせ焼く身体煙草で燻しとく

吹田市 古川 喜美子

酒の値の今昔にふれ花菜の黄
つくしんぼゆっくり動く春の雲

もう一つの服につけてる赤い羽根
鯛十匹同じ姿に化粧塩

記者今日は喪章をつけた列にいる
内裏難人の世常にほろにがき

錆の出た大砲一門レイテは雨
さくら散り子は子を連れてまた町へ

老いと老い程よい嘘はやさしさか
どつちかが誘うたのではない仲だ

速達でチケット届く彼奴流
大往生とは言え通夜の賑やかさ

いとこ会葬儀と違う顔で会い
湯泉でおんなばかりとすれ違ふ

リハビリで隣の人は口達者
花粉症とろくろすり効き過ぎる

そら豆の花がやさしい啄木忌
真珠一連おんなごころは喪を飾る

笛が鳴ったら走ろう風も吹いてきた
生きろ生きろと蒲公英がとんだ

五百円一枚戦士のおべんとう
階段で降りエスカレーターで上がる

なぐさめてくださる方は好きでない
苦勞した人から貰うにぎりめし

苦勞した人から貰うにぎりめし

西宮市
秋元てる

宝塚市
嵯峨根保子

藤井寺市
高田美代子

鳥取県
西原艶子
春の日の霞のようなわが涙み
茹で卵ぎゅっと潰した焦燥感

さみしくてさりげなく抱く縫いぐるみ
老人の楽しみ法螺を吹いている

老残の誇りいったい何だろう
水平線と身の上ばなしして帰る

和歌山市
木本朱夏
桜前線北上母の忌があける
脳死論午後のさくらが熟つばい

生と死の境界線の花吹雪
散り際のさくらが一層美しい

崖っ淵のさくらにふつと誘われる
読み返す手紙の余白さくら散る

吹田市
山本希久子
さくら咲く何も競わず羨まず
破るためにあるジंकスも約束も

蕾固し小さな秘密抱いている
あきらめることばかりなり大根煮る

コンピューター相手にジャンケンくり返す
背負った母が少し重たい春の闇

倉吉市
野口節子
愛されて猫の自覚が無いらしい
歪だがそれも我が家のさくらんぼ

百態の恋が素通りして行つた

百態の恋が素通りして行つた

太刀打ちが出来ぬライバルEカップ
松一本植えて大きな風景画

トントントンつくしが春を打診する

鳥取市

坂田 和歌子

ホーホケキョ春一番のコマーシャル

にゆう麵がやつと喉こす激務なり

千代紙に願いを記して鶴を折る

ため息をぼとり落とした門の外

ふわりジュゴンの胸鰭にあるハート

春なのね蟻一匹にお会いする

和歌山市

桜井 千秀

闘病の苦痛残らぬ骨拾う(亡夫偲んで)

今日よりは亡夫一文字増えている

孫自慢閻魔さまにもなさいませ

風ぐ風にくつろぎ貰う二七日

弥陀の掌に委ねて妻の座の空し

慌てるな言いし夫が先に逝く

京都市

山海 友熙

光明がゆれるわたしもゆれている

春風よ旅する亡夫をまだ案じ

一生涯わたしは女坂登る

木の芽和え供えて春を語らんか

花びらが舞うて四月の古都が栄え

古都に住む赤いポストも恋をする

旅立ちの朝から花粉症になり

対岸の霞む人事を聴いている

歯磨きをやめたら苔が生えてきた

ふて寝する姥よ夕日がきれいだよ

もの知りが時どき墓穴掘りに来る

子離れの赤飯のどに立ち止まる

出雲市 園山 多賀子

九〇〇号薬を掴んで生き延びる

温かい言葉反芻しています

過去綴じて明日に開く花遍路

弱虫ではない情けに脆いだけのひと

死語となる言葉大事に温める

結局は夫婦で食べるチョコ貰う

島根県 伊藤 寿美

罪のいのちと作家のいのち消した朝(永山則夫処刑)

空即是色わたしの色は何だろう

野晒しの椅子はわたしの無題の絵

生き過ぎたと言った亡父を偲ぶ梅

十四歳の球はイレギュラーばかりする

ピアスしてあつげらかと金メダル

鳥取市 石上 悦子

ダンボール素直な心お借りする

綿菓子に雲をヒントにしたのかな

体調が悪いと普段より喋る

プライバシー ヒント与えるごみ袋

目薬を置いて泣いてはない証拠

永田町悪代官が手本です

鳥取県 津村 八重子

民芸の名に草屋根も肩を張る

いい館影がうつるはおばあちゃん

ふところが温いと無駄をしやべり出す

弓なりの背なになつてもがんばらにや

二科展へ老いの心もわくわくと

少年よはばたけ青い空いつぱい

呉市 楨田 英詩

ひとり旅朧な月もいいもんだ

七十路坂日々平穏が続くなり

輝いた瞳もやさしゅうに妻老いぬ

眉の型妻の機嫌は良さそうだ

講演会の帰りにくぐる縄のれん

褒められる術を知らない鴉たち

弘前市 浅田 隆樹

予報官易者のような顔でいる

眼差しは全裸で乗った体重計

散髪を終えて少年輝く目

少しずつ空席増えて北帰行

ひげをそるムンクの叫びの顔をして

春の服もういいかあいまあだだよ

今治市 矢野 佳雲

恵まれた暮らしに牙が抜けおちる

ほっぺの赤い子供見つけてはっとする

孫誕生みどりと名付け木を植える

バスタオルで巻いた温泉肩がこり

ある時は子供に戻る人という

ふと覗くと恥ずかしそうな壺の底

茨木市 井上 森生

ホロ苦いその奥見せぬ露の臺

日の丸の陰でバイ菌が増えている

世紀末世相にぎやか瓦版

夢もない心配もない午後三時

まほろばの病める心に鐘が鳴る

思い切り大きな息は定年後

大阪市 井上 白峰

鏡拭く過去の残像消す如く

善人の仮面被ってくたびれる

さりげない顔で核心衝いてくる

無理すなど言うが援助はしてくれず

続出の意見に詰まる節の目

背伸びしていても蛙の子は蛙

藤井寺市 福元 みのる

引揚後不明で出来ぬ恩返し

友急逝恩給二つふいにして

師の好む唄で括ろう謝恩会

御愛顧のサービス輸入格安品
ドラマよりドラマ顔負け大ニユース
流れから一服したい齡となる

砂川市 大橋 政良

人間模様 花が咲き花が散り
ずんどうも大根曲つても胡瓜
父の忌や父を語るといふし銀
一枚の督促状にひねられる
飼い犬に噛まれたわけを話さない
但し書きひたいのコブのようにある

米子市 石垣 花子

近頃は声が小さい労働歌
三男が時々飛ばす紙つぶて
軽石のはなせぬ足で暖かい
校庭にメガホン忘れた俄雨
師の影の中で内弟子動くだけ
シクラメン日本の言葉で育てられ

香川県 川崎 ひかり

空耳か老母の声聞くひぐれ道
際限なく続くエライ人の嘘
追い風にチャンスかけてる草の種
幸せはとなり座る人がある
よく動く口をポカンと見ている
放つ矢に毒をしつかりぬつておく

熊本市 永田 俊子
悔いひとつ匙にてつぶす冬苳
抱擁を忘れて寒い両乳房

春愁や鳥の擬眼が乾いてる
かくし持つ反旗わたしはさそり座
夫唱婦随大正の世も遠くなり

熊本県 岩切 康子

遅起きの出勤忙しバイキング
重い荷は夫に旅の悦に入る
花つけた鉢を見易い場所に置く
憧れの都会で寺を廻つてる
お土産は仏の花に芹 三つ葉

唐津市 田口 虹汀

食べ初めて孫も世間の味に触れ
大正生れで妻は軍歌をよく歌う
家らしい家はまだまだ震災地
九州に座して四国の味に触れ
梅干しのような男が婿に来る

唐津市 久保 正剣

大股を開いてモーグル金メダル
退屈をパートに売って修羅を買う
口コミの宣伝がない整形医
負けて勝つ保証ないまま負けている
ジーパンに替えてナースの英語塾

唐津市 仁部四郎

馴染み客だから定価で買ってくれ
なだめても人差し指は謀反好き

人斬った舌にも味は玉子焼き

咳払いしてから男黙り込む

湯治場に風土記のような午後の二時

唐津市 山口高明

見舞客戻ると患者熱を出し

別嬪と言われておんな科作り

一日の遅れ悔しい保障切れ

先生の方が切れない家庭不和

トントんと籜打つ音も俺かぎり

唐津市 山門幸夫

背比べ柱に四人の子等が居る

進学期補正予算の古い二人

啓蟄や杖のお連れがほのぼのと

メジロたち嬉々活々と梅散らし

数合せ右往左往の永田町

唐津市 山門タミ

賑やかなおばちゃん去って出る吐息

よろけそう夫の腕にすがりつき

腕くらべたるんだ老いを笑い合い

山門で仁王に挨拶して詣ず

泥くさい世の中風邪も汚染して

唐津市 市丸晴翠

句読点打ち三世代丸く住む

かけもちの卒業式に読む祝辞

あるがまま生きたいと言う齢になり

末っ子の卒業脛もほっとする

悔い改めまた反省のダイエツト

北九州市 梅田宣司

怪物の素顔が薬瓶に浮く

まだ弾む夢があるから這い上がる

喉越しが良くて鵜呑みにしたお世辞

火をかぶる男が居ない淋しいな

操の定義明日から変るかも知れぬ

高知市 北川竹萌

人心一途に励み八十樂し

源流の洞窟郷を見下ろして

早起きの空気たっぷり気が弾む

不足ない空気に生きてありがたい

いじめないいじめられない里に生き

高知県 赤川菊野

ハートまで覗かれそうな青い空

気品ある老女に出会う平家村

ゆれ動く心を抱いて風の中

バスデー今年も一人赤飯で

大地の子歩いた道を追うて旅

高知県 小澤 幸 泉

陽溜りに幼い顔がよく映える
ただ歩く歩きとおして逝くだけさ

主の恵みとおい異教の街に住み
たぶりの古里の味母の愛

母と娘の受験戦争まだ止まず

香川県 木村 あきら

羅針儀が少しゆるんで来た八十路

何を着てゆこうと八十路でも女

幾山河越えた余生はノンビリと

玄海も黒潮も越え六十年

粉ヒキ唄残して祖谷いやの村起こし(祖谷カズラ橋)

香川県 工藤 吟 笑

君が代を唄うと父の背がのびる

七節を見事こなし母の詩

有難う言える最後であればよい

切り札を持って笑顔にある余裕

四割減反農家は何を食えという

香川県 成重 放任

向日葵のように進めと子等諭し

初孫に隣も笑い声が増え

貧しくも短い人生燃えて生き

子の成長見て我が年を振り返り

争った後に孤独が降りかかり

香川県 山地 マツエ

遺言状また書き直しする八十路

ネギ刻む音に目覚める実家の朝

お向いの火の粉でもめている夫婦

湯豆腐がするりと逃げた老妻の箸

直感のするどい妻で肩がこる

松山市 丹下 美津子

趣味を持つ妻を妬いてる定年後

話中でよかった怒り少し解け

大阪の土産老舗の塩昆布

母の愚痴娘は父の肩を持つ

祖父母と同居とてもやさしい子に育つ

今治市 越智 一 水

暗がりで聞く水音は澄んでいる

目を閉じて聞く水音は高からん

掌を合わす顔は光がさしている

掌を合わす心薬を飲むごとし

よくものを知って自分を知らぬ人

今治市 野村 京子

桜咲くおんな子供計りごと

はしやぎすぎ春のネクタイ疲れてる

はた目には幸せそうな二輪草

自立とは無口な風を抱いている

価値観は問うまでもない箸二膳

下関市 石川 侃流洞

満開の桜見たから北帰行

自販機へまともなコイン疑われ

年金へ妻の感謝が身に沁みる

馬鹿になって見ると世間面白い

定位置はことボタン穴がある

宇部市 平田 実男

凶器だと言われナイフを悲しませ

フルコースよりも僕には握り飯

鏝になった子供がかじる脛

妻がまた転ばぬ先の杖になる

貯えが平均寿命ほど伸びず

柳井市 弘津 柳慶

パソコンへ任せ切ってる新人類

仏壇へ芋粥すすった過去語り

行く末は運否天賦にまかせきり

処方箋書き書きただの風邪ですネ

神棚をおがみ仏壇へ御灯明

美祢市 安平次 弘道

美しい言葉もいつか死語になり

杭打てば打ったで流れ早くなる

図書館を出るとあたりは春の彩

喧噪になれたかいつか寝てしまい

行間に私の夢が詰めてある

広島市 森田 文

お祈りの形で蕾春うらら

どれひとつとっても可愛い児のしぐさ

子を思う願いはひとつひなまつり

春の陽へゴンドラの唄口ずさむ

春なのに別れも言わず逝った人

竹原市 小島 蘭幸

母が笑っている おとうとよいもうとよ

妻の鼻も長女の鼻も春になる

飲んでも飲んでも寡黙な父で僕が生まれ

少年のナイフ正しいことを言う

昼まで眠る十六歳の哲学か

竹原市 森井 菁居

晩年になって漸く海が風ぐ

したたかに生きた自負持つ影法師

黙っては居れぬ男の端くれで

プロを諦めて平らな道を選ぶ

ギャラリーを味方に燃えるドライバー

竹原市 古谷 節夫

デスマスク見事に画いて兄は逝き

耳鳴りの金属音で夜が明ける

日本酒の旨さよ今日を打ち上げる

昭和史の前編だけは忘れず

妻と行く宇宙旅行へ鶴を折る

竹原市 岩本笑子

水平線私も溶けてしまいう
日めくりの早き卒業式にいる
切ろう切ろうと足の爪また忘れ
黄八丈 夢二も夢を見たんだな
さあ青だ青だ両手に言いきかせ

竹原市 時広一路

春風に染まれば饒舌にもなろう
明日もまた杉は真つ直ぐ伸びるだろ
遅刻する度に泣きたくなる時計
悔いは無し春の岬に立っている
予定まだ書き足している余命表

竹原市 三宅不朽

けなげにもみてみてすこしやせました
みどり児の纏うや人の泣き声や
うせてゆくカタコト神が遠ざかる
桜桃 杏子信濃路毯になる
葉根譚読んでほめるが間に合わず

廿日市 林野甦光

嫁して行く娘の背に春が蛇行する
お開きの手を叩くまで素面です
温度差を知らず電話も北の人
押し花の葉書が届く春の夢
募金箱子供が入れる背に合わせ

広島県 藤解静風

平和だなこのまま惚けてゆくのかな
いい旅と言えただろうか風の名
男と女微妙にズレてゆく旅路
年金はほどほどでよし血糖値
春財布恥も少々入れてある

岡山市 川端柳子

行止まりついつい扉開けました
青春をしますと言う車椅子
ホワイトデー妻の見立てで無事通過
シルエットここにものこす花影に
かけ抜ける日々忙しくたくましく

岡山市 井上柳五郎

本人は忘れ他人がよく覚え
涙拭くにぎり拳をいとおしむ
結納へ孫活け替えて花と待ち
忘れるな言う老婆もまた忘れ
病名も聞きそびれ老父くすり呑み

倉敷市 田辺灸六

人情をこぼしてならぬ喜寿の皿
悔いのないくらしを神に見てもらい
惜別の雪でのひらで空を見る
クレヨンで描けた母さんが画けた
待つことに慣れた鈍行待避駅

倉敷市 小野 克枝

まん丸い皿によるこび盛り合わす
やがて飛び跳ねる日がくるかたつむり
門柱に立てかけてある父の遺書
月も風も無い夜にそっと咲くさくら
駅で待つ想い一途な女傘

岡山県 二宗 吟平

床屋さん白の眉毛を剃り残し
フト掛けたビデオ亡娘の声を聞く
分担の留守居電話にヤッコラシヨ
取り越しの苦労老いの身負い切れず
またしても問わずを語り悔い重ね

岡山県 矢内 寿恵子

日めくりで年金暮し煮つめられ
いろはにほへと大和言葉のある限り
ういのおく山こえ平成の波高し
長い旅問わず語りの白い髪

岡山県 山本 玉恵

遠い日が回る目裏の風車
善人があふれて神を迷わしむ
さよならがまだ切り出せぬイヤリング
諍いは中止 外は春雨湯はたぎる
しなやかに生きなされよと谷の水

岡山県 小林 妻子

ゴミ袋他人の物のように捨て
三月の鬼も散髪しに行った
無職とはこんな小さな影なのか
ノミ胼胝が僕のダイヤとして残る
振舞いも丁寧過ぎる肚の底

岡山県 大石 あすなろ

初恋の味がのこっているグラス
ポジションを譲り晴耕雨読かな
三姉妹ちがう香りの化粧びん
めがねの度話題に夫婦雨の午後
新風に馴染みそこねた古帽子

岡山県 江口 有一朗

麦の青黄色に変えて酸性雨
善因善果問うて司馬遷史記を書く
責任を忘れ甘えの世の乱れ
迂闊には腰も下ろせぬ骨粗鬆
波もまた英語で寄せてくるハワイ

岡山県 荻野 鮫虎狼

破壊する彼女 補修する彼氏
一天地六 僕に有利な賽である
諦めた女眼鏡の奥に住み
別れた日ネオン眩しく夜を刻み
凡人の暮しを笑うてホームレス

岡山県 福原辰江

村はずれ水車が思い出くり返す

安泰の風は無口であたたかい

策なんか知らない大根よく煮えて

退屈な私に里の風多弁

正確に説明すればボロが出る

松江市 舟木与根一

生命の尊厳野生から学ぶ

銀行をぼろくそに言う焚き火の輪

門前に生まれ育った羅漢たち

仕事なら札束などと思わない

腰掛けで椅子の空くのを待っている

松江市 川本 畔

郷愁がむさぼり食べるコッペパン

陽だまりへ逃してやろう愚痴ひとつ

違和感の雫が落ちる赤い傘

隠れ家にかくまっている滝がある

濁った言葉グラスへ落し合っている

出雲市 久谷 まこと

親の敷くレール走らぬまま錆びる

学歴の差をはね返す力こぶ

下積みでいるから皆うまが合う

欄干のいたずら書きは待ちぼうけ

いい夢を期待してます鏡拭く

出雲市 吉岡 きみえ

どの色に咲いてもかわいいチューリップ

ボンタン飴ひとつ残した箱を置く

早春にぬるめの爛で人恋し

いい主婦してます手抜き考えて

お祈りする心が狂いそうだから

出雲市 竹治 ちかし

平凡な暮らしに旨い酒がある

成るように成っては困るから悩み

妥協する道で歩幅を狭くする

白魚に遠い女房の手に詫びる

香典の額決め揺れている絆

出雲市 富田 蘭水

楽しみは花に合わせた初背広

師弟愛死語か冷たいニュースのみ

出る間際妻の一声ききすぎる

ネクタイを変えて男の意地をみせ

大切な大根に花が咲く陽光

出雲市 岸 桂子

結んで開いてみんなこぼしたラブソング

さよならが言えずに月が欠けてくる

今日終るどこまで来たか西の地図

耐える事慣れて泳ぎもうまくなる

冬の雲動かぬままに日を閉じる

出雲市 石 倉 芙佐子

父母よりも愛する人の居る処 (娘夫婦バンコックに転勤)

古戦場の跡も桜は満開に

たどたどしくタイ語覚えて旅に立つ

バンコックの月も上弦糸車

お別れは故郷の唄で乾杯し

出雲市 小 玉 満 江

やせ蛙好奇心だけでは生きられぬ

義母の呆け嫁は勤めを捨てました

誘われて気乗りのしない招待券

一一三五つも病のある体

どん底でつないだ絆ほどくまい

出雲市 板 垣 夢 醉

おはようと雀がいった日の天気

なれそめがあつて別れがある世間

鰯焼く男やもめにやつと慣れ

嫉妬して相合い傘に雨と風

生きていてよかった夕陽美しい

出雲市 小 白 金 房 子

感動のメダル白馬の空に舞う

よもぎ摘む手に暖かき地の匂い

嫁ぐ日の初心わすれて悲劇うむ

沈丁花匂う窓辺に春の歌

水鳥の波紋静かに川下る

島根県 堀 江 芳 子

戦官の耳を奪うな耳鳴りよ

にんげんも犬も嬉しい花の土手

夫誘い木次橋工事の音聞きに

ふくらみを指で見に行く桜土手

真夜中もお世話かけます点字板

島根県 小 砂 白 汀

ダイヤモンドダストふれふれ白馬村

ミイラ採りがミイラ株屋が株でばったばた

ポケモンがわが家におつてかき回し

拾い読みそれでも時間が足りません

同い歳もうすぐ九十という電話

島根県 榊 原 秀 子

三寒四温ゆっくり春が来るといふ

いやな話きくと疲れがどつと出る

呆けぬようにと贈られました赤ワイン

鶯の初音ときめくものがある

いいわけはもういいですよ春の雪

島根県 森 茂 美

寒の庭赤い椿に温められ

気短な奴が手酌でやっている

無駄な穴掘つて死に金埋め戻す

ボールペン持って散歩の梅日和

鶯の声に春眠夢の中

鳥取市 倉益一 瑤

門あけて下さい心濡れてます

ボランテИА生きる願いと触れ合つて

大きくて姑のエブロンまだできぬ

さくらさくら風船玉になつた彼

裏酒場人の骸が落ちてゐる

鳥取市 西村 黙 光

ボランテИА元の職種へ陽が当たり

一文にもならぬ仕事の忙しさ

豆鉄砲食らつた後の自己嫌悪

おだてあげ後は野となれ山となれ

知っている顔の傍若無人ぶり

鳥取市 両川 洋 々

策士とは妥協せぬ氣のメザシ焼く

スランプと知らぬ影法師がはしゃぐ

再起期す駄馬の俺だが芽は摘むな

スリルには無縁のめしを今日も炊く

人くさい鬼でやつぱり人を恋う

鳥取市 植田 一 京

だあれにも見せない顔で日曜日

風向きを変えるジョークを言つてみる

告白が夢の中では出来たのに

人間の裏にも慣れてよく眠る

一番のくすり故郷の森へゆく

鳥取市 春木 圭一郎

長い目で見れば生活上がり

長い髪切つた女性と会つたころ

長いものに巻かれて過ぎた半世紀

長い間に一度接待受けたきり

長生きをしたら秀句が出来そうだ

鳥取市 岩原 喬 水

坊ちゃんにナイフ恐くて持たされぬ

老骨がスリルに燃えて彼女待つ

おとなしい人柄酒で地金出す

名刺見て最敬礼をやり直す

怒らねばやつぱり政治変えられぬ

鳥取市 武田 帆 雀

凍天を酌んで七星柄が折れん

微動だも目を反らさない税務官

諍いの沸騰点に劫が無い

上等の客に奥さんメロン切る

軒つらら頭突きして出る大試合

米子市 林 荒 介

天井に夜毎に描く昨日今日

眼を凝らし夜の枕の鶴一羽

それからは響いてくれぬ笛太鼓

友達が居てくれる五十円の葉書

一族の拳の中の鯨幕

米子市 林 瑞 枝

朴念仁に効く顆粒なら舐めてみる
ラベンダーの香り大好きアルファー波
身も軽くフォークダンスの掌を交わす
花咲爺の唄声ひびく花の道
祝う子が針穴潜って少し痩せ

米子市 政 岡 日 枝 子

粒がそろわず不協和音が洩れてくる
窓ぎわの椅子を無駄とは思わない
同情の椅子は三角型だった
図書館の窓から交番がみえる
パトカーがずっと後ろをついてくる

米子市 野 坂 な み

裏方もご苦労さまと大花火（五輪終了）
てのひらを合わす姿勢になってゆく
てのひらを澄ませ静かに座っている
参観日どの子の絵にも丸がある
乗り換え駅それから私くじけない

米子市 木 村 富 美 子

気が付けば風がさらった跡ばかり
両の掌で消さないように灯を守る
夢でいい幻でいい君の声
クレヨンと遊ぶ無心になっている
青色のクレヨンで塗る世界地図

米子市 澤 田 千 春

屑籠の紙が空しい音を出す
門灯がぼつと還らぬ兄を待つ
机の下に本音をそつとおく会議
身の内に忘れられない駅がある
いい話聞いて小踊りしだす春

米子市 茂 理 高 代

柿二つ残りどちらが先に落つ
人の常咲かない花は捨てられる
燃えて咲く花も淋しい顔をする
日溜りの温もり亡母を重ね合う
幸せが膨らむような蕾つけ

米子市 白 根 ふ み

春眠に別れそびらす北帰行
春宵に答がでないまわり道
おだやかな春日もの忘れがつづく
鳥たちが散らした紅の桃節句
名人と言われ無骨な語りぐち

米子市 光 井 玲 子

木蓮の白いところに泣けてくる
古里の村の祭りもダムの底
門限は守り信用させている
今日もまたチラシの裏に本音書く
駅弁の王様に逢うフルムーン

米子市 青戸田鶴
ほんとうの春にふれようつくし摘む
しあわせは桜咲く頃やつてくる

葉桜になってはぐれてきたころ
みな老いて先の事など決められぬ
にぎりめし握った母の大きな手

米子市 中井ゆき

花吹雪涅槃に座る心地かな
切なさを又つれて来た沈丁花

哀婉が身内を走る夕桜

フラフラと桜散りたくない顔で

自転車に乗れる間の花めぐり

米子市 驚見正子

山茶花 山茶花 恋はまぶしいものです

ヨーイドン父ちゃんが言う支払日

魚屋のカニをカニ目で見て通る

二度目から素直に言えるおばあちゃん

手伝うと言って夫が邪魔をする

米子市 本吉宗光

故郷の神戸に政治なぜ冷える

CO₂HO₂の三年後

孤老我 在宅福祉まだ拒む

亡妻に手を八年今朝も香ゆらぐ

オシドリの今年の姿撮りに行く

米子市 永井美津子
勝手に惚れて勝手に振られ眠れない
底知れぬ人の心に人が泣く

好きですの手紙抱き締め汽車に乗る
親孝行かあさん望む見合いする
女です小さな夢の馬車を待つ

倉吉市 最上和枝

ほおずきの赤を見初めた紋黄蝶
菜の花田渡るそよ風子のダンス

捻子を巻く幸せ途切れないように

煩惱を琥珀の酒に浮かす夜

合点と飛び出し石に蹴躓く

倉吉市 松本よしえ

春雷に若い梢が目覚めます

春雷に離れた人を思い出す

税務署に行けばやっぱりはじくられ

坊ちゃんと呼ばれ坊ちゃんらしくする

トンネルが山の景色を忘れさす

鳥取県 岩崎みさ江

病むひとの窓にも春の陽がこぼれ

内視鏡マグマ探しの冒険に

寝た虎を起こさぬように忍び足

大小のつづらを前にまだ迷う

帰らない母が居そうな小暗がり

鳥取県 新家 完司

わたくしのクローンが並ぶ立ち飲み屋

雨漏りがしている僕の指定席

鳥居まで厄病神がついてきた

手を合わす神の仏のその向こう

生きているわたしのためにさくら咲く

鳥取県 羽津川 公乃

命名はサクラ可愛い男の児

暖冬に買得カイロ持て余す

一步引く妻に頭が上がりません

最高のコンビと思う父と母

孫の目に手品と見える義歯磨く

鳥取県 土橋 睦子

恋挽歌水平線のむこうから

その先を読んで寂しくなる輪廻

蟹食いはエチケツトなど気にしない

短刀を魔除けに置いてある宗旨

さくら色の便箋に書く恋ひとつ

鳥取県 橋本 多哥由

自分史に句集を入れてよみがえる

幸福になって白髪が増えてきた

骨抜きになった行革どこへ行く

わたくしの似顔に背筋寒くなる

裸婦の画をみつめていればてかてかす

鳥取県 石倉 美恵子

窮屈で柄に合わないフルコース

領いてくれたまあるいお月さま

方々で聞くありふれた私の名

どう生きてみても行き着く同じ駅

空っぽの脳へ逆立ちくり返す

鳥取県 山本 正光

老いの身にシャンとしてよと娘等が言う

暇だからとにかく動くことにする

腹割った仲良し友が居てくれる

高望みなどはしてない衣食住

養殖の牡蠣は胃下垂かも知れず

鳥取県 上田 俊路

スマイリー・ハラダ金では涙声

少年の茶髪陽気にゆれて春

スランプを越えれば花のコース見え

合格で無神論者に逆戻り

我慢せず涙流して別れよう

鳥取県 田村 きみ子

五月晴れきりきり舞いでつつじ咲く

アメリカン飲んでもわたし日本人

やっぱりを信じ遍路の旅に立つ

ささやかなスリルで遊ぶタマゴツチ

長野去る男のロマン見て泣いた

鳥取県 黒田 くに子

勢いが過ぎたか毯が戻らない
職引いた元肩書がなんになる
なんとなく悪友を恋う午後の雨
身辺整理 破った焼いた古手紙
ひとりって淋しいですよ仏さま

鳥取県 埴 寛子

ラストシーンどうせそうだろ寝るとする
障害のドラマ称える金メダル
隻脚の雪ける雄姿息をのむ
家の虎いつの頃からまるで猫
終の家に産声くれてありがとう

鳥取県 権代 康女

亡父ははの風にあいたい祈りする
自分史に本音もはじも入れてある
もらい泣きするほど芸が達者なり
夢追って行けば若さを失わぬ
悲しみを越えると涙もろくなり

鳥取県 近藤 春恵

神様の情けが藁が流れ着く
牛舎から放牧の春待ちつづけ
味噌汁の香りは母の香りです
夫のぐち受ける器となって生き
集まった票に謀叛の色もある

尼崎市 春城 年代

少し気取ってスイスからだと来た電話
友引きもなんてことない世の気風
古い二人だいいじな飴を買ってくる
少女倶楽部に汽笛の音が遠くする
今にして亡母の生い立ちさぐる風

尼崎市 春城 武庫坊

楽しげに風が踊って春になる
風と並んで提げて帰った花の苗
昭和コインがみんな汚れた顔してる
ピストルと同じ力を持つナイフ
蟄居して両刃の剣研いでいる

尼崎市 長浜 澄子

束縛を嫌いタンポポ高く舞う
しなやかに生きて風とも手を結ぶ
染みひとつにも愛着がある亡父の椅子
雲の行方追って私を見失う
春野菜どつと開放感が湧く

伊丹市 山崎 君子

小春日を蟻も上手に生きている
よだれかけいつかわたしも亡父の年齢
尼寺に入った友の夫婦びな
のれん替え花びら一つおどけてる
ホーホケキョ書き出し楽し島便り

西宮市 林 はつ 絵

恨みごとと言わぬと決めた冬すみれ
顔の皺あるがまんまも勇氣なり
光るのはそこ道草をしたあたり
虎の縞着て行き勝負勝ってくる
チンガラと歩いてこれで精一ぱい

西宮市 山 本 義 子

停電に人機械 街うろたえる
お仏壇にいっぱい供え答待つ
下駄箱のなから春にしていこう
猫はいいな少し真似てもいいかしら
朝風呂に罪を感じて花ひとつ

西宮市 奥 田 みつ子

等身大の鏡を贈る子の門出
支え合う辛さ楽しさ仲間たち
忘れていた昔ポツカリ昼の月
問いつめてみても消え去る過去でなし
いかなごの釘煮いくとせ季が巡る

西宮市 西 口 いわゑ

サミットだ等とわいわい飲んでいる
人形の目の暖かさ鋭さよ
漫画から胸に小さな灯をもち
すんなりと納得はせぬ春の風
雲百態人に百態あるように

西宮市 門 谷 たず子

忌の回りまわり舞台を春にする
芽キャベツの色鮮やかに春を盛る
春嵐吹いて船場に灯がつかぬ
先代の影が揺れてる不況風
人間不信の若者が増え街寒し

西宮市 久 保 まさお

そそり立つ弦月黒く仰ぎ見る
地震越え驚いたち声聞けず
初蝶が行きつ戻りつ蓮華待つ
寒椿転がりつつけ春近し
泰山木今年咲こうか咲くまいか

西宮市 刈 田 泰 司

宴会のカラオケぬけて湯にひたり
果実酒を妻が素顔で飲んでる
まだ飲める幸せわかち合って友
金閣を絵にしてくれる雪が降る
一本の燭が人待つ雪の里

宝塚市 吉 田 笑 女

インフルエンザ医者はマスクをかけたまま
息子夫婦とつながる糸も切れたまま
見せられぬ涙を指でそつと拭き
冬日さすえんがわ猫と日なたぼこ
出来たての料理ヘゲスト舌つづみ

川西市 氏林洋敏

和歌山市 川上大輪

金メダルみんな幸せごっこする

やっとうたパチンコ片手拌みする

借金を入れると零になる遺産

能勢電の特急止まる駅に住む

警察の人にこわごわ道を聞く

加古川市 吐田公一

さわやかなムード漂う夜のワイン

五月雨に思うは亡母の一周忌

エルニーニョ喜んでいる仮設の灯

初孫へ団地サイズの鯉のぼり

嫁がいて東風が吹いてる家の中

姫路市 古川奮水

さくらさくらあしなみ揃え花見出る

車座に酒肴など要らぬ

花咲いてさくら取持つ姉妹都市

賑やかな会食妻は隅にいる

真白の阿寒湖氷上フェスティバル

和歌山市 川上富湖

首落ちる相槌ばかり打たされて

紙バック真面目な酒になりそうだ

糸切れてそれぞれ光る真珠玉

旅半ば下ろす荷物と担う荷と

春伸びるズンズンと音立てて

コーヒーはブラック隙のない男

悔しくて涙がすぐに出てこない

魂に住所氏名を書いておく

いい話らしいお菓子が出てきたぞ

戒名は立派だけれど墓がない

和歌山市 堀端三男

坂の上の雲読み返す菜の花忌

ブーム去った石を磨いている愚直

世間並みの並みがわからぬのし袋

クラスメートの計が続いている戻り寒

青信号スクランブルに風が舞う

和歌山市 牛尾緑良

花開く今年もしかと生きている

スピーチに慣れた娘に縁がない

大鳥居いくつの罪が訪うたやら

風邪ごときに負けて一月を伏せる

雪が解けました御先祖様に逢う

和歌山市 青枝鉄治

公僕の語を消し去った黒い霧

エリート末路哀れな汚職劇

また一つ事実を消した多数決

波乗りに長けた男の回り椅子

朱竹画の額をかかっている破産

和歌山市 榎原 公子

自分との闘いでした六十も
頑固者は私でしたかすみ草
闘いの明け暮れ魔物住まわせて
憑き物はジェラシーですか愛ですか
門という結界に住む資本主義

和歌山市 玉置 当代

水槽の魚一日何思う

卓袱台の丸さ湯豆腐囲む幸
春雨を聞きつ長風呂してしまふ
爪ばかり伸びて一日長いこと
乗り切って行くのも試練路のとう

和歌山市 岩 本 美智子

腐れ縁二年ぐずぐず抜かれた歯
身体髪膚これ父母に受く 痛む
パラリンピック輝いている顔と腕
千円の真珠いくらに見えるかな
外商サロン拝借にゆく化粧室

和歌山市 福井 桂 香

目覚めたら私は翔べないかもめ
腰痛五十肩 宇宙遊泳しています
ひなげしも老けたとおもうアグネス・チャン
気長にと言う人と居てみかん剥く
キトラ古墳現る寅歳の白虎

和歌山市 細川 稚代

アラブ出張ベールの奥の目に惚れる
さくら散り幸せさがしの汽車に乗る
銭は霊柩車の回り道
風化した思い出覚ます里の駅
分校のさくらに彫ったイニシャル

和歌山市 山口 三千子

自己愛の強い夫とルビー婚
人妻の枷外したいおぼろ月
無言劇折れて夫に釘をさす
他人事のギックリ腰で医者通い
寸劇を重ね六十路の坂越える

和歌山市 宮口 克子

異次元へ翔び出す準備しています
風雪が朧巴と乱れ飛ぶ
むなしさに何故何故何故と酒の量
美人でも夫は一人しか持てぬ
リストから漏れた段取り悪い人

和歌山市 楠見 章子

木蓮の絵手紙神へいちばんに
嫁がせて思いを知った豆の殻
娘の暮らし話題ばかりの夕御飯
さっぱりとした首筋予定あるらしい
人知れぬ星でも虫が鳴いていよう

和歌山市 田中みね

春霞 若草山が見つからず

奈良市 宮口笛生

待っていた春よ菜の花ネギ坊主

無造作に大根捨てた春の畑

人間のよろさを思う古希過ぎて

にこにこ酒さえあればよい父で

奈良市 天正千梢

目を凝らし耳を澄まして初音聞く

自惚れ天狗少し鼻を折つたらし

酒のめば酒と語るかなお無口

人は皆奇数がすきなんだ575

悲喜こもごもだった脱皮とは言えど

生駒市 北山悟郎

清濁を入歯が区別噛み分ける

世の乱れ切歯扼腕戦傷が

意気地無し何日も離さぬ命綱

しきたりが足枷となり縛られる

身を捨てる骨拾う子が居てくれる

大和高田市 岸本豊平次

雪山を五千の花火爆ぜて映え(長野オリンピック)

黄泉にまで鏡や星座持つて逝き(古墳発掘)

強かな妻少しづつ子に靡く

もめ事の声も和らぎ窓を開け

曲の世に教育勅語懐かしむ

僕は幸せきつと思っている夫
何があろうと私好きだなクリントン
ハイハイへそれ来い孫へ特訓中
こういう事もあると諫める天の声
考えても仕方ない事考える

和歌山市 山根めぐみ

ナイーブな風を頼りに飛行船

二兎を追ひ二兎を逃がしている夢中

群れにいて二枚の舌がよく動く

妄念を抱いて佗しいバラの刺

目にも物を見せる私の奴さん

和歌山市 木村初子

老いの歯止めにつせ川柳と遊ぶ

無為の日々せめて川柳雪月花

バラの夢ほのかに包むかすみ草

行く先は問わず無常の遍路杖

元氣かい花見の城の群鳩よ

海南市 三宅保州

小さくても嘘偽りのない化石

腕組みをするともっともらしくなり

欠点の多い男に油断する

言い訳の手紙が長くなる夜半

同窓会みんな笑っているけれど

大和郡山市 坊 農 柳 弘

雪解けを急かす津軽の白い花
加茂川に初夏誘い込むユリカモメ
菜の花漬け母の優しい味がする
通り抜け人恋し気なさくら花
剩え観光用の茶摘み唄

大和郡山市 柿 原 慧 心

政治家の二世は小粒やじろべえ
豊かさに遊びの文化移りゆく
迷っても迷わなくても明日は来る
子沢山髪を束ねただけの母
ときめいたこともないのか母の靴

大阪市 川 原 章 久

春麗女きれいな膝小僧
大阪弁に津軽訛りが値切られる
卒業です彼と子供も出来ました
布団干す自分も干して春日和
体臭はたっぷり残す天下り

大阪市 西 出 楓 楽

婦人公論リニューアルして親しめぬ
人並に暮して春はねむくなる
哲学をかじり自意識過剰きみ
自由とは淋しきものよ梅の花
ゼロ歳が一家六人振り回す

大阪市 柿 本 落 児

金婚か妻よ本当にありがとう
ある日ふと無性に山が見たくなる
日の丸に涙す自分うれしいね
サーカスの馬は淋しい目をしてる
祇園暮色舞妓の顔がくつきりと

大阪市 河 井 庸 佑

負けて勝つ花を持たせている余裕
難関も努力に似合う結果出る
逆境も初心貫く自信持ち
長い国野趣それぞれという立夏
母の日も厨房からは母の声

大阪市 辻 川 慶 子

巣立つ子も転勤もいる春の駅
風みどり鎖ゆつくり解けてゆく
太陽のめぐみ白いもの白く干す
お喋りも嘘もきれいな花の下
早春の壺で芽ぶいた猫やなぎ

大阪市 北 勝 美

街道を辿れば展く菜の花忌
山桜 石ふみ一つ西行忌
実篤の皿に生きてる桜餅
杉玉がまだ青あおと酒の神
開帳の秘仏を拝む薄明り

大阪市 本間 満津子

傘寿は傘寿 卒寿の思いまだ知らず

聞いてくれるつもりの声は優しゅうて

尊い生命人間だけのものでなし

思い知りました御手柔らかにエルニーニョ

白い皿色とりどりに春を盛り

大阪市 神夏磯 典子

脱皮して五月の風に立ち向かう

役立ちたい役立ちたいと背を伸ばす

内視鏡いちばん恐いかがみです

こんなにちわおおきにある路地が好き

年金の背に夜桜語りかけ

大阪市 小林 周信

成人を待った息子の飲めぬ酒

出かかったもう一言へ酒を注ぐ

遠縁が手酌している通夜の酒

女将から人事聞ける昼の酒

百薬の長の適量俺が決め

大阪市 川端 一步

敗者の背ペンではとても届くまい

歳時記も匂うがごとき春である

ポツリポツリさすが八十路の知恵袋

辛抱の睡魔に負ける心地よさ

譲らない二人うどんが伸びている

大阪市 福岡 雅楓

心にも欲しい一滴極上酒

去ったとて街はいつもの賑やかさ

立ち呑みの足足を足を見て通り

書道展さすが筆ペン置いてない

マジックペンちよっとおしゃれな文字になり

大阪市 渡部 さと美

頭とは別にうどんをすすする口

接待に絡まる男じゅずつなぎ

見栄っ張りボロを見せずに張り通せ

お葬式一時降り止むお人柄

篠山の時代を歩く城下町

大阪市 津守 柳伸

申告がゼロでバッグを買い替える

雪吊りの期待裏切る兼六園

現実に戻す金沢近江町

梅桜大阪城は恋ロード

元氣だよ春の息吹をヒヤシンス

大阪市 黒崎 恭子

白銀に金銀銅の花開き

雪国は今はずかに春なかば

山里の声援の声まばろしに

意識なき母の心は透明か

家の中行ったり来たり万歩計

大阪市 田中節子

独り住み自由も悲し連休日
桜の灯夜の匂いと人に酔い
母の日はこみ上げるもの悔いばかり
プライドで意地の張り合い通しきる
早春の余韻の中に雪の乱

大阪市 大塚節子

バーゲンのオーバー寒もどり待っている
物憂げな卯月三日の夫婦難
バス停の五人元氣な優待券
手に受けた花のつめたさ潔さ
春の風邪小さな咳を残しゆき

大阪市 川内 呎笑

叱れない叱らないから付け上がる
ネジ緩みモラルも捨てる花見酒
廃線にグムの話も付いて来た
世の常といつも逃げて居る僕が居る
五〇年生きた証が太鼓腹

大阪市 玉置英子

アンコールワット彩る虹の自負
伊予柑のおいしい年に長野五輪
自然薯の粘り一件落着し
ひなあられ夜はビールのつまみにし
母の日に子に誘われて薔薇を見に

大阪市 稲本凡子

したいこと山ほどあつて何もせず
孫二人嫁ぎ二人の曾孫みる
忍耐を重ねて呑んだでかい腹
自分との戦いだった闘病記
只酒を飲んで眠れぬ日が続く

大阪市 清水利武

平和ボケ中学生が暴れてる
バツ一が恋を重ねて生きてます
葵祭り見るのに金のかかる席
新旧の鯉元氣よく空泳ぐ
潮干狩だんだん貝が小さくなり

大阪市 奥田良子

一人生く決心をした雛あられ
タクシーを上手におりる脚線美
きんつばでビル建てたのが出世頭
山国の小さい駅のレンゲ畑
丸く老う秘訣は一つ有難う

大阪市 松尾柳右子

大あくび鯉のほりから睨まれる
窓あけて風のささやき仏壇へ
薫風に胸の芯までしわ伸ばす
厳禁と書いてあるから守らない
入園児もうすらすらと字が読めて

大阪市 小糸昭子

アマリリスおしゃべり花が顔を出す

通販の地蔵に願ひ掛けている

母さんは漬物石の重しなり

たらの芽のほろりと苦い仲でいる

親鴨が先導して胸張って

堺市 板尾岳人

すばらしき女演じて幕が降り(義母の死 五句)

惜しまれて花散る如し摩訶般若

闇となるところが濡れる春隣

出棺の刻へ春風止まりけり

梅の咲く街も静かに闇となる

堺市 柿花紀美女

乱世相老いの一日無為に消え

丸文字で結婚すると孫手紙

胸の谷誘われそうな鈴が鳴る

遠い日の子等と見上げた星の数

幼逝の弟銀河で遊んでる

堺市 吉本菁風

上役に付いて行かねば道がなし

またひとつ村の文化が消えて行き

六十過ぎナシヨナリズムが強くなり

小綺麗に可愛く元氣心掛け

古書引用津山が画く武將伝

堺市 志田千代

ベイブリッジすでに私は異邦人

チンチン電車まだ走ってる街自慢

門外漢の妻辛辣な批評する

子は妻にまるめこまれているようす

飲み仲間魚心あり水心

堺市 近藤豊子

げた箱の上さむそうなヒヤシンス

保育園わあいにおいなヒヤシンス

風信子 堂堂めぐりの議論かな

ヒヤシンス咲きそめ受験おわりけり

アポロンのかなしみの白ヒヤシンス

和泉市 岡井やすお

よくやった接待担は杜のエース

どぼんざぶん子供しつけるひまがない

負けた子もさわやかであれ次がある

佐の山さんマシんに勝って腕を撫で

憂き世でも長く生きたい人の情

貝塚市 池田寿美子

雪舞に老いの美秘めてはん女逝く

沈丁花どこから来たのこの香り

夢ごとを語りかけたい路の臺

種まきの人振向かず露の臺

退き際はさくら吹雪の中に立つ

岸和田市 高須賀 金 太

廃校に止まったままの刻があり

中学の中に魔物がいるらしい

ベイエリア浪費の見本建っている

さざめきが碓氷峠にまだ残り

太陽がまぶしい昨日吐いた嘘

岸和田市 岩 佐 ダン吉

苦 喜わかつ一万五千いま号砲（N A H A 国際マラソン）

チバリヨー（がんばれ）が満ちる国際大通り

足は棒 雨容赦ない十二月

ブーゲンビリア悲しい僕に語りかけ

悲走五時間握手をしたい人ばかり

岸和田市 原 さよ子

合格の孫へワインで乾杯し

キッチンで冷凍しとく愚痴一つ

バアちゃんが迷子でさがす梅祭り

気休めの薬も入れて母の旅

あくびまで写されていた旅写真

岸和田市 芳 地 狸 村

夢がある紫禁城への旅プラン

王府井の筆墨たのむ絵の仲間

兵馬俑のロマンたのしい旅の夢

合格の知らせはらはら母が待ち

記念貨が欠伸している貸金庫

岸和田市 田 中 文 時

臍繰って府は赤字やと言われても

肝臓が超勤手当出せと言う

風を読む手段に上げるアドバルン

同じ年なのに右膝だけ痛む

献金の金は有っても貸し渋り

岸和田市 古 野 ひ で

痛いところあちこち続く春の鬱

あのように生きたいそんなドラマ見る

腹たてる私をせめているわたし

歳月も消せない深い傷がある

ひとり住み気丈気丈と鞭をうち

岸和田市 井 齋 一 齋

社長室ざわめきだした年度末

五輪村茶髪とピアス見直され

かまととと話す中味は吟味する

雑学をぎっしり詰めてテレビ出る

抜擢に妬みが続くいやがらせ

岸和田市 長谷川 呂 万

校門の桜咲く人散らす人

お隣の子もぶら下がる力瘤

へそくりをはたいて流行着ています

発見が到達になるコロンブス

根回しの疲れをいやす会議室

松原市 小池 しげお

春一番なんだ手ぶらで来たのかい

李白にも杜甫にもさせる吟醸酒

からくりの出所が分かる万華鏡

責められて外反母趾になつてくる

伸び縮みする物差しで測られる

松原市 玉置 重人

遅配などせぬ年金のありがたさ

すぐ齢を忘れる悪い癖がある

バーゲンを待っていたのに売り切れた

ギョーザ食べたんかと白い目で見られ

寅さんに会った気がした通り抜け

羽曳野市 福田 満州

黒いカネ出していつまで低金利

愛と勇気の聖火ランナー義手義足

エアリアルまるで人間竹とんぼ

朝風呂へ籠のうぐいす旅気分

超ミニのくの字の膝を君知るや

羽曳野市 吉川 寿美

マンネリの愛を育てて箸茶碗

消去法わたしひとりが売れ残る

捨てて拾ってわたしの旅はまだ続く

亡妹のたましい抱けば春霞

憶いしずかに心に灯す喪のあかり

羽曳野市 酒井 一壺

無器用で妻に安心されている

無器用な男にもある得意技

動物もオアシスまでの長い旅

苦い水飲まねばならぬ時もある

大切な植木の水を頼まれる

富田林市 片岡 智恵子

喋ったら壊れる夢を抱いている

善人の堕ちるドラマを見て飽かず

総会屋事件企業の敵は企業なり

お百度はまだ踏んでない足の裏

デパートに子がいなくなり新学期

富田林市 松本 今日子

ネー聞いて火の粉もろたよお水取り

三世代飾る女雛の乱れ髪

半分は嘘かも知れぬ愚痴を聞く

バスツアー大阪弁を先頭に

近頃は月も身近に見えて来た

藤井寺市 中島 志洋

連休明け緩んだ螺子を締めなおす

片腕と煽って部下をこき使い

風の日も雨の日もあり夫婦旅

おばはんと呼ばれ我慢のアルバイト

本心は秘めて女のきれいな事

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

からだごと来て匂われた沈丁花
告白にペンが動かぬ意気地なし
想い出に浸りたい酒長くなり
こだわりのお酒のビンの濃い緑
墨絵からさくらの根っこまでみえる

河内長野市 井上 喜 醉

老兵が宝にしている薬箱
ライバルの無い淋しさよ土いじり
人生いよいよ残すはロスタイム
歩き食いしながら塾へ子は急ぎ
裏返し出来たら人生面白い

河内長野市 加島 由 一

客筋を読んで女将は早仕舞い
千日の稽古世界が見えてくる
暗算に強く娘は縁遠い
栄冠をとりそこなった飲酒癖
平行に少年の夢母の夢

八尾市 宮西 弥 生

春の風生命を紡ぐやさしさよ
夏の風生命をさらす炎なり
秋の風生命ふたたび地にかえす
冬の風生命を癒す温みあり
人間があふれて消える森の水

八尾市 内海 幸 生

買った夢連れて逃げるも宝くじ
読めぬ字に出会ってからの鬱三日
美術館出ると無口になっている
名も知らぬ神札を買う孫入試
自画自讃できる人とは羨ましい

八尾市 高杉 千 歩

兜飾る二十年の越し方や
晩酌のいらぬ夕餉の愛想なさ
遠縁の計を見送って喫茶店
地下街をエレベーターに助けられ
エルニーニョわたしが叫んだとて何に

八尾市 篠原 いつ ふみ

物分かりよくなり父の細い足
今更と別れて知った思いやり
Vサイン屈託の無い老母が好き
もう一本どうやら欲しい独り言
効くと言う物は何でも試してる

八尾市 高橋 夕 花

翔ぶこともなし夜間飛行は抽斗に
白酒で童女コロコロ雛の宵
爪びけばとても淋しい私の弦
カレーライス甘辛しゃんてつつがなし
掘り起こすとザックザックと悪の面

八尾市 宮崎 シマ子

確定申告杖つく夫連れてゆく
ベル押せば何のご用と聞く隣
霧の空港奈落へ向かうごと着地
三寒四温白虎隊の墓雪残る
今の今偕楽園は梅ざかり

八尾市 吉村 一風

軽やかにスニーカーとゆくお遍路さん
重ね着で水溜り越え春を待つ
ひと役も二役も終え靴ちびる
風邪ぎみを妻のくすりで間に合わせ
和解して飲めない酒をのまされる

八尾市 村上 剛治

軽いうそまぜると舌がよく弾む
初孫の声に魔法をかけられる
風の子の手足にからむ塾かばん
気を静め見据える的へ矢が唸る
ルーキーが力まかせに投げてくる

八尾市 大内 朝子

バンザイのかたちの好きな若葉たち
国会のテレビわたしもやじとばす
ときめきは十九の春にさも似たり
黄昏れの道にも紅い花は咲く
古時計あらたな明日へネジを巻く

東大阪市 森下 愛論

満開へ老軀に席の酒肴
借りて飲む店があったよ途中下車
雑魚寝するふとん疎開の頃偲び
焚火する匂いにほんのり沈丁花
花惜しむ所どころで歩がゆるむ

東大阪市 西村 哲夫

未完の神器が寝顔見ながら
浄土から見つめられてる師を思う
死ぬことも許されないか自由国
上手になれずいつまでも評論家
自善他否じわじわくずれ落ちていく

東大阪市 指宿 千枝子

春やよい赤い服着て誕生日
甘夏柑今日一日をありがとう
今日のペン日記を書いただけのこと
春うらら鼻炎の顔は見せられぬ
さくらさくら孫は十三娘なり

守口市 結城 君子

雪に魅せられ星に魅せられ怒り忘れた
五台目の車も女性運転手
寒肥忘れを許してくれた椿咲く
東大の猫まで哲学的な顔
慰めるつもりで私のボケをいう

守口市 森川 まさお

わが足と思えどよちよち歩きかな
前立腺頼り甲斐ある漫瓶かな
待ちかねる春が遠のく空の色
カタカナの花が早春謳歌する
陰翳のある日本の花愛すべく

交野市 福崎 しげお

世界一息子は母へ金メダル
消費税上がり不況が腰据える
老兵のいでたち腰に万歩計
医療費がズシリ年金族泣かせ
ゼいたくを言えば我が家で安楽死

豊中市 田中正坊

シナリオは短くてよし喜寿の劇
検査票ずらり並んだ正常値
年金の夫婦健康だけとりえ
孫一年 小中大のそろいぶみ
司馬と行く街道をゆく春の夢

豊中市 安藤 寿美子

はつと振りかえれば沈丁花白く
金三月月門口で母待っている
まぼろしの都大路に朱雀門
水割りの氷が音をたてて溶け
茜さす紫野行き恋に生きん

豊中市 吉田 あずき

一輪ずつ序列守って梅開く
バレンタイン老いの二人のチョコレート
咲く予感もう体温はさくら色
詰めていた息吐くように三時鳴る
老いを知る度に大きくなる山河

豊中市 井上 直次

雪しんしん下戸は甘酒おかわりし
祝い酒下戸のわが家は歌も出す
酒蔵の帰り一升飲んだよう
粉飾のちりばめられた立志伝
無視せよと他人に軽くあしらわれ

豊中市 江口 明光

芸の無い猿に回って来たチャンス
無理を言う母はそれだけ齢をとり
どん底で笑える男立ち直る
カラスより居ない広場の殺人鬼
結び目におんなの呪文かけてある

豊中市 滝北 博史

風神が守る日の丸ジャンプ陣
ヤングパワー茶髪舟木鳥になる
障害をバラリンピックでエンジョイし
バイアスロン ガイドと共に金メダル
アイススレッジ声援も車椅子

箕面市 椎江清芳
悪友がもう飲めるかと聞く見舞

老夫婦昔を偲ぶ写真帳

割烹着に定年ないと妻自慢

テキメンに効いたキャツシユという薬

近道をするに借金取りに会う

池田市 岡本吉太郎

オリンピック涙々の老いの日々

ひやひやの原田のジャンプ見事です

浪速人ばちぼちでんなが出ない日々

親こばむ目になり娘育ち行く

エルニーニョ世界の景気ゆすつて

池田市 栗田久子

古都の今どんなロマンが眠るやら

花粉の香日ざしの中で菜花咲く

梅の園蜂の羽音が休みなく

茜雲空いっぱい形の形して

幾度か結び直した靴のひも

茨木市 藤井正雄

民謡のテレビ年中稔る秋

ペン走る無口が嘘のような人

先ずは酒用向き後でよいお客

台所諍いの余波遅い昼

大阪の味に頷く友に酌

熱燗ののれんの外は春の雪

孫が来てまわるおすしが好きという

絵のように唇を描き眉を描く

金婚の波にゆだねる身の軽さ

染め上げて緞帳降りる夕茜

高槻市 川島諷云児

長いよで短いものは命かも

つれづれに思うことあり日記繰る

生真面目な父で質素を旨とする

子は宝なんてむかしの語り草

相槌の軽さを妻に叱られる

高槻市 井上照子

金柑を甘く炊いてた母真似る

独り居に二羽の雀が朝に来る

焼き肉をさわぎ食べたい孤独感

抜き差しのならぬ証拠の会議録

寝る前に今日は友来た日記書く

高槻市 傍島克治

こんな場で政治の話するなんて

心配は急にやさしくなった夫

一本は俺の所為かも母の皺

背比べふと口ずさむ子供の日

五月晴れゲートボールの子供の日

茨木市 堀良江

寝屋川市 岸 野 あやめ

税務署でゴマメ齒軋りしています

しみじみと聞かせる出まかせの話術

減茶苦茶に生かさないでと書いておく

レトルトの粥の不味さに驚いた

ひとりとはこんな暢気な鮭茶漬

寝屋川市 森 茜

弱者にはそらおそろしい接待費

日溜りへまっ先にくる猫のボス

頬つべたがばかばかりんご病うつる

生真面目が一人加わり輪が歪む

大事な用に気づくトイレのカレンダー

寝屋川市 江 口 度

スッポン料理いきなり首をつかんだり

駅名を間違う車掌春です

特急通過駅も走って見たくなる

山門よりも鳥居の好きな父である

ずらり建つ求人ゼロのノッポビル

寝屋川市 堀 江 光 子

年の豆一つ増やして母元氣

そよ風の集まってくる葦草

訪ね当てれば花に埋もれた小さい寺

報われること口にせぬ父の背

道のりの長さを思う金メダル

寝屋川市 柴 田 英壬子

不釣合いなゴミ出しているひとり

ピーポーが近所で止まる話し声

ひっそりと改革はかる預金帳

撮る人のところが送られて来た写真

夜桜の宴に贅沢なワイン

寝屋川市 北 岡 波留吉

甘い言葉かけたかいなと金婚日

どん底で男心を試される

心の窓開き平和な嫁姑

地球儀を回して孫に平和説く

連休も走り続ける父の貨車

寝屋川市 後 藤 黎之助

自分史を胃のカメラに覗かれる

生きるのだ生かしてくれと手術台

退院の隣のベッドまぶしくて

退院の実感が湧く妻のお茶

一病が明日につながることを知り

寝屋川市 酒 井 勇 太 朗

基地の是非針の筵の大田知事

一蹴りのゴールが一生左右する

援助したつもりセクハラ訴訟沙汰

数々のドラマ聖火が燃えつきる

長野五輪和太鼓響く海越えて

寝屋川市 籠島恵子

猶はずす老母をだまつて見ています
お水とり済まぬうちからもうさくら
カラーピーマンの威力を知った日のサラダ
拗ねてふくれてこんな私じゃないの다가
一日の短さ一年はもっとと

枚方市 海老池 洋

諸行無常 老化の進む雪だるま
夜桜のライトアップも原子力
虎の欲 翼が欲しくなってくる
あや取りの糸を返さぬ娘がひとり
愛敬ぼくろとメモをしておく花名刺

枚方市 八田 敏

梅桜椿が見送る老いの旅
花も実も老い慰めし桜桃
とりどりの椿へ別れ告げる朝
明日からはベランダで花咲かす夢
娘と孫が待つ引越しへ老いの夢

枚方市 前 たもつ

しっかりした妻にしたのはこの僕だ
贈取賄のニュース横目に昼寝する
一列に並ぶと黙る癖がある
推敲のペンあと見入る菜の花忌
喜びの酒は一人であたためる

枚方市 森本節子

どよめきが吹雪とおしてラージヒル
健康は小一時間の土の道
おふとんに入りしあわせしみじみと
トントんと若牛蒡たたく春の味
引出しの中でもぞもぞ花の種

吹田市 瀬戸 まさよ

独りいて心をさらけ身もさらけ
何もなく孤独でない日孤独な日
菜の花の和えもの供え春ですよ
桜餅好きでついつい食べ過ぎる
爪切った夜父偲び母憶う

吹田市 石原靖巳

七桁へ住所省略出来もせず
明日知れぬ命へ押した保証印
仲の良い夫婦に見えるベアルック
ライバルに水あけられて終電車
暗い世に古墳がロマンかき立てる

吹田市 茂見 よ志子

終らない話が続くのは女
ぶつつけた本音で消えたわだかまり
ガーデニング老いて時流の波に乗り
近道のつもり迷路にはまり込み
ホームレス携帯電話持ち歩き

吹田市 栗谷春子

はじめての外出兄の告別式

虞美人草同じ心で読んだ日々

耳鳴りがなければ私なんだろう

何故だろう行きずりの人皆ほえんで

思い切って行きたいところへ行けるなら

大阪府 榎山隆盛

若葉風仁王ウオーツと叫びたし

武者飾り刀抜きたくなってくる

志望校祝合格孫娘

花見時急行停車無人駅

回遊魚父の漁場へ戻らない

大阪府 八十田洞庵

桃の花風も口づけして通る

花を買う男に崩れないわたし

繕えば点るものあり女です

握手にも異和感がある敵だろか

見はるかす暮色ひそかに喝采す

京都市 大石未佐子

汚職画面拭う五輪の若者よ

テレクラでないブリクラを撮ってみる

若い日に恋した人とお茶を飲む

胸の内老いと若さのやじろべえ

金でない贅沢を持つ暮らしかな

京都府 稲葉冬葉

老木に健気に咲きたいのち見ゆ

余韻嬋娟 浄土ヶ浜に佇みぬ

生真面目な人だと思ふ河豚刺身

少年の脱皮蟬がちらと見え

選択の自由は岐路に立たされる

富山市 島ひかる

生まれ故郷の人も空気もみな優し

黒百合を咲かせてくれた人に逢い

葛城の間はらはら落ちる目の鱗

ペティナイフ優しくりんご剥いてゆく

雑踏へ消えるあなたも私も

富山市 酒井輝

門の無い町で往診して老いる

コンニチワ開けてどうぞで住める町

パソコンで母がオシャレな手内職

じじばばのお伽噺に明日がある

一日の余命が重い鐘の音

大山市 早川盛夫

人生は九回裏まであるんだぞ

此の道に来てこの道の他知らず

心臓がなくてアメリカまで出掛け

怒ってなどいない生れは河内弁

未来より今をどうにかしなくては

静岡市 安本晃授

横浜市 菊地政勝

眼に染みる一輪挿しの風媒花
触れあつた波で男の首洗う

朝市へ白い命を売りにゆく

均等法妻の舵とる夫婦舟

駿河路の若芽伸びゆく茶の名所

富士宮市 渥美弧秀

ピカソ描く孫はクレヨン離さない

苦労性酒で一肌脱がされる

柏手に望みの高く家族連れ

拝金の世情に疎く生きる自負

“花”歌う夫の瞳に虹が立つ

静岡県 蘭田猓沓

日本中酔わせた日の丸飛行隊

景品を先ず振ってみる嗅いでみる

心電図心の揺れを所見あり

ウルトラマンしつかり握り孫の旅

親子の碁父が黒石持つて指す

横浜市 清水潮華

褒められてバランス崩す心電図

申告も納付も済ませ早寝する

この年になつても貯金止められず

はつて置くことも薬と言ひ聞かず

再建策聞こえは良いが人減らし

一流の官僚にしてあの無様
粉飾と装飾ともに良く見せる
大臣の言う検討はノーのこと
贅沢を敵にしておく定年後
銀行がくれる花種期待せず

町田市 竹内紫鏑

筆友があつて七ヶタ暗記する
唄つてる写真 肺病前ですよ
大雪で処置ナシという元軍人

友はまた泳ぐバイパス手術かな
賑やかな人に代つて追悼文

仙台市 川村映輝

長生きの秘訣聞いたが真似できず

国語辞典よりカタカナ辞典忙しい

今日も無為日記に書くこと何ものなし

蔵王連峰雪の衣着て春近し

敵にまわせば恐いのが家に居る

弘前市 佐治千加子

雪原の芹田みどりに輝けり

目の奥に住むいち人を野に放つ

恋知らぬ猫が見つめるわが素足

無色透明の叫びを抱いているナイフ

忘却のくさぐさ流れゆく河口

弘前市 高瀬霜石

生き上手忘れ上手な人だろう
無人駅なんだか申し訳がない
夜逃げした友を手本に生きのびる
魚屋も米屋もあつたいい時代
人生の初舞台踏む若い喪主

弘前市 斉藤 島

ふるさとはいいなあ恩師とじやつぱ汁
瑠璃ちゃんが生まれて君子蘭も咲き
仏様末っ子が母になりました
合格の日から風揚げしています
いのちの母は大地だと子の巣立ち

弘前市 岡本花匠

搭乗券食い道楽で空の旅
おこしやす情っ張りほどけ句会の座
津軽っ子呼名びつくり詠寿記念
詠寿記念柳友の輪に塔光る
感動の句碑と出遇いの法善寺

弘前市 蒔苗果林

病木は春の吹雪にまぎれ切る
セーターがもう春ですと重くなり
会うたびに顔も手もみな花に見え
梅ぼしの気だてに舌がまず惚れて
胸閉じて出さぬ言葉も顔に出る

弘前市 相馬銀波

世話焼けるひとりに僕を指に折る
あきらめも捨てるも下手な戦中派
セールの技は丁寧語で落とす
食の可否さぐれば明日の皮下脂肪
聞き流す笑顔を敵に盗まれる

弘前市 高橋 水

現実を晒して潮が引いてゆく
新芽から若葉へ思惟の道へ出る
良心に小突かれてる拾い物
風ばかり読んで一步を躊躇する
旅に出て一会の風とたわむれる

弘前市 櫻庭順風

ロードレース捲り上げるに捲り上げ
広いロードも走る団子で狭くなる
風を切る間もなく団子点となる
細波のよう団子縛れる上り坂
怒涛のよう団子息つく下り坂

弘前市 一戸ツネ

みちのくの鄙びに添うた斜陽族
おっとり写真の墨の水になる
密やかに孤独を愛でる破れ傘
絵ロウソク孤独の笑顔脇ほとけ
白髪にも昔の彩がちらちらと

弘前市

小寺花峯

青森県 富士慕情

ジョーカーが欲しい日です爪を切る

靴下の穴が悲しい通夜の席

音もなく蠅が飛んでる台所

ボトル一本明日の仕事を入れておく

心配の種を背負っている無口

黒石市

相馬一花

愛犬もソバージュにするお洒落好き

離婚して友達になる君と僕

サロンパス貼って痴漢を撃退す

職につくまではワインのように寝る

こっそりと貴方好みに整形す

十和田市

小笠原敏人

庭掃除要らぬ雪国淋しかろ

重い雪躲して空に向かう木々

幕間に一筆啓上凄い人

オリンピック テレビで私も参加する

公用は税務署行きもルンルンさ

十和田市

阿部進

甘い汁吸ったそのつけ払わされ

ほかぶり野良着の父によく似合い

煽てればすぐ踊り出すお人好し

風当り正論吐けば強くなり

路地裏は浮き世の風の通り道

御堂筋ゆっくり歩く津軽衆

法善寺へいへいへいと丸い石

苔むしたお不動様に光る水

浪花節本場の情に泣くりんご

大阪の人も空気が好きやねん

青森県 諏訪柳々

大きいこといい事ですか大仏さん

京なまり聞かずに帰る京の旅

天平のたおやかさ満つ唐招提寺

小督にも会いたく嵯峨野竹の中

誉めことは？酒が強いと言われます

青森県 西谷大吾

野仏が背伸びしている北の春

幸せは汗した素手で掴むもの

花の咲く種は一粒あればよい

貧しさの蝶を分ける夫婦箸

窓際で雲を見ている理想論

札幌市 三浦強一

初舞台幼い声の七五調

アルバムの父ダンディーなセピア色

鍵穴の向こうに二十一世紀

白い指りんごの皮が伸びてゆく

青い鳥身近にあった孫の笑み

熊本県 高野 宵草

人様に生えてよい苔わるい苔
解らない絵から疲れた美術館
兎小屋ただ見るだけの植木市
定年で退化した掌が頼りない

香川県 池内 かおり

追伸にきっちり書いてきた本音
フィナーレを飾る笑顔はあでやかに
合格へ下にもおかぬおもてなし
引越しの荷を右へ遣り上へ遣り

竹原市 石原 淑子

菜の花や弥勒菩薩の大字宙
花吹雪五十の青春まつしぐら
冬の部屋守り続けて蘭の散る
愛一途流れにまかす花筏

倉敷市 井上 富子

ラッシュアワーで擦り減っている思いやり
丸裸まだ健康と夢がある
平成の鬼は朝からパンを食う
クレヨンのアポロが飛んでいる襖

松江市 安食 友子

陽気だとそこはかとなく草へ指
それ陽気燃え立ってくれ万物に
怠惰の虎が流し目ばかりして
甘んじて働き蜂へリフレッシユ

松江市 佐野 木みえ

娘の誘い都の春を満喫し
新しい門札いい事ありそうな
再会の孫に布団を干す暗間
背かれた人を今宵も恋しがり

松江市 浦辺 静江

イベントに腕組み歩く凡夫婦
なにくそと背を伸ばしてる野水仙
酔い過ぎて二言三言多くなり
ストレスの機嫌とつてるシヨツピング

島根県 藤原 鈴江

老いならん過去振り返り振り返り
亡父母夫恋ししみじみ半世紀
時折りは怒ってみるのも一興か
独り酒友懐かしく電話する

鳥取市 美田 旋風

古文書に強い絆の父子を見る
同じこと何度も話す老母卒寿
五輪すみ相撲のあとはプロ野球
後編のドラマほんとの僕がいる

鳥取市 杉本 孝男

あの美女を誰が口説くか皆寡黙
ふるさとの橋もロマンを抱いて朽ち
天の声バネに八起きの灯を点す
中立が崩れそうだよ振り向かぬ

鳥取市 前田 一枝

春を行く鬼も笑顔でついて来る
美人ネと言われた人は横に居た
薬の束一つ位は効くだろう
うそを言う口に似合わぬ歯の白さ

倉吉市 淡路 ゆり子

有情無情死もまた生の一部なり
行き先は誰も決めてる壺の中
空き樽の茶室で点前披露する
心配をかくし切れない白髪抜く

倉吉市 野中 御前

ママが好きだから上手な嘘をつき
花からはな花粉まぶれの蜂かえる
赤い薔薇うつかり抱いてまたキレル
携帯電話しながら歩く花の下

倉吉市 米田 幸子

難破しそうなこともあったな丸木舟
父さんに似たら素敵な子に育つ
無尽蔵汲んでかじった親の愛
競り上げてくるから梯子踏み外す

鳥取県 林 露杖

未だ下手な初音を聞いて臥所出る
颯々と磯打つ波も春の音
春光にグランドゴルフ打球音
老妻と声かけ合って薬服む

鳥取県 乾 喜与志

点取り虫よ少し昼寝をしませんか
春二番などで炬燵を出られない
岬から潮吹く魚に見取れたり
接待と言う雑草が逞ましい

鳥取県 石尾 かつ乃

趣味が合い肩の凝らないお付き合い
冒険がしたくて梓を越えちゃった
生かされて晴耕雨読過去未来
平和です二人三脚もたれ合い

鳥取県 乾 隆風

セールスが十をも若く見てくれる
欠点を合わせ共白髪となりぬ
押し売りへめつきり耳が遠くなり
金バツ汚しひな壇からころぶ

鳥取県 さえき やえ

一期一会こんなにもまい井戸の水
師を求め雨の道ゆく沈丁花
子どもらに民話きかせて春の雨
鳥になり戻りなされよお父さん

鳥取県 谷口 次男

木炭と石炭捨てて心荒れ
太陽の光を弾く露強し
会社では鬼の仮面を被るパパ
いつの日か大黒柱になってやる

鳥取県 西川 和子

遠眼鏡そのの岬に気が付かぬ
時どきは岬も波に飲み込まれ
申告を終えて肩こりひどくなり
問題の袋裏口しか知らぬ

鳥取県 幸家 單車

定年も間近老後のプラン組む
若いつていいな失敗恐れな
いすぐ近いゴールに罠が待っていた
若いからでつかい夢を追ってやる

鳥取県 太田 幸枝

暗い世にパラリンピック灯をつける
殺し文句補聴器だけが聞いている
古希すぎて死は他人事とうそぶいて
少年よ視点を明日に向けて見よ

神戸市 山口 美穂

筍も木の芽もあわてるエルニーニョ
たこ焼のにおいを持ってバスに乗る
不景気の策なく老いをためつけ
お役所の常識 庶民には分からない

神戸市 池田 善守

疲れてる妻の寝息に耳を立て
定年五年会社の夢も少し減る
フアッションを着て光る人曇る人
窓の露なくなり春はすぐそこに

芦屋市 黒田 能子

考える人の形で物思い
やわらかくやわらかく赤ちゃんを抱く
あらいい酒の力を借りて言う
杜用族酔えない酒に酔っている

西宮市 亀岡 哲子

子が横で眠る静けさ梅の花
花時計少し進んでいる陽ざし
湖と空の狭間へ雪こんこ
自動改札抜けて道問う人もなし

西宮市 菊池 トミエ

大それた事考えず包丁研ぐ
皆強気なかなかよしが戻らない
大津絵の鬼もおどけて春近し
流しびな水面は風も暖かい

西宮市 井上 松煙

合格の知らせにこぞ昼の酒
下戸なのに吞ませ上手に世を渡る
心地よい風になつて趣味の会
自転車に幼い頃をふと思ひ

川西市 松本 ただし

するするとすすってひと息つくうどん
出無精へコートが入った福袋
見ず知らずいつか話が合うてくる
追い風が思わぬ所で吹き止んだ

相生市 中塚礎石

申告を済ませた顔が春を待つ
絹ごしが軟らかくなる二人酒
補聴器が聞こえぬほどに嘘をため
その気なら男にも意地老いの恋

和歌山市 垂井千寿子

見え過ぎる眼鏡で寒い風あたり
美人画の表紙が春を目覚めさせ
眠ってるくせに手を上げ多数決
腕前は五分五分容姿見るとする

和歌山市 福本英子

良妻賢母夕方のコンビニで
回転ドア考えごとをしてしまっ
どの面を付けても本心邪魔をする
よく回るコマを土産にくれる姑

和歌山市 堀畑靖子

住みなれて遊び仲間の増えた町
落ち着いてられぬいっばい夢がある
黄身白身一つの殻にある個性
風ぎの日が明日も続くよう祈る

和歌山市 池永正匍

晴れた朝でてる坊主忘れられ
新聞もすぐ故紙となる儚さよ
技よりも勇気で挙げた新記録
豪華船よりも手漕ぎで生き生きと

和歌山市 古久保和子

焼き芋はきつと半分くれるだろ
プラタナスの実が排ガスに噎せている
それぞれに言い訳がある鍵の束
俺の胃も古墳も覗いているカメラ

奈良市 米田恭昌

K点をにらむ男の血が騒ぐ(長野五輪 三句)
旗旗旗吹雪の中の男泣き
久しぶり日の丸に酔う白馬岳
啓蟄に古墳這い出た虎と竜(キトラ古墳)

大阪市 町田達子

北欧のガラス器にオーロラをふっと
深いふかいロマン画いた星宿図(キトラ古墳)
天体の妖しさいつか壁画の虜です
なぜ何故と耳塞ぎたい少年の事件

大阪市 中田あい子

好き気まま通した父の大往生
春の雨木々の梢の芽にやさし
重くるしい空気流れる遺産わけ
笑顔よい原田さん泣く金メダル

大阪市 板東倫子

ふっきてからええ顔になりはった
横綱がコロリと転ぶ春の場所
橋龍の貌が孤独になつて行く
年金をあてに身内が借りに来る

大阪市 藤田頂留子

バラリンピック元氣頂きありがとう
風一ぱいくよくよすな鯉のぼり
鉄の門何度許しを乞うたやら
ウインドー覗けばお出ししましようか

大阪市 寺井東雲

老後でも紅と白粉しのばせる
欲の皮並んで会議始まった
団体と分かるリボンが移動する
口から生れ一生これで食べて行く

大阪市 川久保睦子

ポロポロと親の意見がこぼれ落ち
とまり木にボソボソ愚痴置きにくる
ポツンポツン雨が孤独をつれて来る
スーパ一の野菜しおしお消えた旬

堺市 楊井二南

素顔でも怖めず臆せず出るせりふ
身震いは意気込む時もあるらしい
貫禄の有無が舞台であからさま
両替をしてから誘う方が良い

堺市 黒田真砂

桜咲く心の中の花も咲く
夫の蒲団干せば気になる回復期
老けたなと三面鏡に春の顔
山桜里の便りが待遠し

堺市 神原文

税務署が見向きもしない朽ちた屋根
にこにこときつい事言うGセブン
ドラフトの一番三振繰り返し
亡き人の星占いに眼を凝らし

高石市 浅野房子

慕情かなたしかに魅力ある人だ
充電と言う名で遊ぶ温泉地
さつと反応した耳はまだ初心らしい
虚しさは宴のあとにやってくる

和泉市 西岡洛醉

水平線僕の望みはあそこまで
過疎からの四季の便りは変りなく
擦れ違う夫婦で今日の糧拾う
サイコロ肉初めての味舌つづみ

岸和田市 藪野けい子

老いの眼を美人に変えているめがね
重装備背にくいこむ冬登山
宝くじ五枚に期待する不況
新築に庭木が芽吹きちらほらと

河内長野市 植村喜代

巻ずしが倍の値段で福をよぶ
人の世にどうして人が生きにくい
幸せにどう生きようか年初め
親族紹介夫の涙で代りする(結婚式)

藤井寺市 吉岡美房

賑やかな方へ桜は散り急ぐ
うどん食いながら再起を考える
御見舞の花まで春を奏でてる
修身を刑務所で聞く東大出

東大阪市 安永暁子

そら出番マスク忘れぬ花粉症
ねむい目にパンチさせた記事が載る
巢立ち行く孫に日の出をみるごとく
待ってます別府草津も買い揃え

八尾市 長谷川春蘭

見頃来て孫と一刻梅日和
何よりも賑やかなのが好きな母
姉のようなママより離れ卒業す
チューリップ親指姫も目覚む頃

八尾市 生嶋ますみ

パソコンに遊んでもらう親も子も
俺お前にもどって交わす屋台酒
髪型かえて何処へいくにも弾む足
がさがさに荒れた母の手土匂う

八尾市 村上ミツ子

あちこちで春がルルツと目を覚ます
日脚が伸びて忙しい忙しい
戦争は嫌いと言うてけんかする
暗やみにいきいきとする白い杖

八尾市 神原まさと

物忘れ春の陽気の所為にする
年金のつかい棒にならぬ利子
初孫にじいと呼ばれた日のシヨック
ともかくも後十年の設計図

豊中市 湯浅馬洗

飛ぶ鳥の原田を見ては濡れる頬
付いた疵思い起こして雛飾る
ピカピカはナイフでないよ新学期
登校は駆け込み寺の保健室

豊中市 松岡久留美

生きて来た最後を飾るものが無い
旅の空我が家の夕餉なつかしい
子育てに生涯飾るつよい母
友よりの温もり思うシクラメン

池田市 藤井計光

先生は頼れる人で悩み聞け
セカンドライフ多才な趣味が待ちうける
加害者も犠牲者なのか受け止める
朝風呂が好きだが酒に縁がない

守口市 石森利昭

居酒屋の親父が諭す人の道
別れ上手次の相手は決まってる
疑いが晴れて二人でモーニング
どっちみち才女と悪女裏表

茨木市 島 元 ふ み

棟梁の隠居の趣味は面づくり

息子のお下がり爺ちゃん十も若返る

事務的な連絡網で知る計報

姉一人暮す東京雪国に

寝屋川市 平 松 かすみ

乾杯が揃う三百有余人
祝八五〇号

川柳の虜 北から南から

お祝いの支えになった細い腕

頑張つてみよう九〇〇号に向け

寝屋川市 富 山 ルイ子

突然の計報淋しくなる句会(静江さん逝去)

折にふれ葬儀の形娘に話す

死んでまで口出し無用娘の返事

希望かなえられそうにないお葬式

寝屋川市 坂 上 高 栄

連休を私一人の旅にする

一輪車上手に未婚増えている

声のない裸婦の悲鳴が画布に立つ

日日好日こんな大きな恩を受け

寝屋川市 太 田 とし子

花褒めてすみれを敷いたにぎりめし

うどん吸る音ばかりなり友葬る

人情も毬もころころ柵越える

八五〇号花より先にパツと咲く

枚方市 二 宮 山 久

思う事ありて湯の町一人旅

幸せはあなたまかせの泥の舟

嫁がせた娘へ早く春よこい

老妻のくせに勤めに出るという

京都市 都 倉 求 芽

菜の花や月のない日も陽は温し

タレントもアナも老眼鏡が増え

春風のリズム口笛は軽騎兵

四温背に鉢のぬくみや梅を切る

富山県 増 田 紗 弓

縮尺図あなたとわたし隣組

街角に忘れ得ぬ石置いてある

オペ終えて談笑を聞く無影灯

機械棚役割果たし艶が出る

可児市 板 山 まみ子

渋滞に高速料金おしくなる

一日をキリリとしたい紅を付け

フラッシュと火の粉負けじと舞う修二会

台所の中の句ばかり吟じてる

横浜市 後 藤 早 智

長野五輪どつとふるさと蘇り

家族みなドラマを抱え春迎え

子育てと重ね合わせる花いじり

正直な花だ明るい窓へ向き

弘前市 中山雅城

臍だつて昔話は持つている

握手した分だけ増えぬ票の数

人間の鼻で笑つた虚栄心

羊水の中でピアノを聞かされる

弘前市 今 生恵子

神様の線引き跳ぶ子と沈む子と

水仙が杉林のようにのびてくる

気まま旅風花の舞う駅に立ち

パスポートいらぬ沖繩ちよつと旅

八戸市 島田昭治

人間の心の色がみな違ふ

動脈瘤嫌な病氣に取りつかれ

眠つてゐる中に往生は虫が良い

ここいらで死後の世界を見てみたい

水煙抄 (追加)

鳥取県 国森武子

裏釘私みたいな暮らし方

百点はつけないけれどいい嫁ね

尾崎市 尾宮弘治

強引に自分を売ってから孤独

やるだけはやつたが座る席がない

鳥取市 谷岡清子
せまい家愛があふれて鳥も来る

沖繩の行くえ案ずる珊瑚礁

生駒市 半澤 無眼子

黙示録震い止まらぬ苦よもぎ

火焼け地蔵度過ぎた真似に外方向き

須崎豆秋句集『ふるさと』から

口髭を生やして猫の子が生れ

出勤へヒヨコがすこしついて来る

降りる客いとのかんと続くなり

手ぶらでは鹿も相手にしてくれず

阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ

長靴の中で一びき蚊が暮し

児が追へば鳩は歩いて逃げるなり

大阪川柳の会

とき 6月2日(火)17時開場 ところ サンケイビル本館322号室 題と選者 叱る・杉野睦朗△愛・天根夢草△てきばき・安藤寿美子△夢・磯野いさむ
各題2句 席題なし 会費 500円 18時締切

計報 渡邊蓮夫氏(府中市・川柳研究社主幹・日

川協常務理事)は4月15日、病氣のため死去。78歳

自選集

恒松 町紅

黒川 紫香

器用貧乏ねっからのお人好し
正論などと頑固が自惚れる
跡継がぬ門が軋んでばかりいる
朗らかな話が好きな回り椅子
筆の先年はとらせぬ墨の艶

金井 文秋

野田 素身郎

長生きが子の定年を見てしまふ
依存症の果ての孤独死笑えない
鬼は外仕事の鬼は出て行くな
もの忘れこんな美人の名前まで
約束はしない忘れるのが怖い

奥谷 弘朗

松川 杜的

肝心なところばかり丸く生き
ゆとりある人や苦笑だけですみ
出しゃばりが居て町内をかき回し
悩むよりイチかバチかで振るバット
てかてかの頭に若さ感じさせ

入社式ライバルとなる目と出会う
連休に出る日の事を考える
怒らずとブイと出て行く父でした
呼び止めると逃げ腰になるのも女
呼び寄せて僕の車を利用する

アンケート答えに窮するものもある
芝芽生えてもプレイできない後遺症
老いたりつくづく思う大欠伸
それぞれ宴会妻と別れた夜の街
無精髭病人らしく生えてくる

平八郎展にて

“寒庭待春”南天の実の赤く
実感の人平八郎の鯉のいろ
整然と画面一ぱい屋根瓦
水模様百態それぞれ生きている
“新雪”の落款の上にも降り積る

藤井明朗

西田柳宏子

師に会いたくて元氣溜めている

大阪の旅へ元氣を見てもらう

官僚も自戒自肅の断が下り

お招かれはおたがい官僚身にしみる

しばらくは不況忘れている花見

野村太茂津

六段の調は父娘今佳境

父と娘の六段に泣く母心

お琴尺八父娘奏でる風に乗り

死刑より無期獄中身を責めよ

あるかなきかの風に香りが乗る若葉

遠山可住

雪解けへ土のいのちがしゃべり出す

何時来ても混むふるさとへ帰る旅

お金がなくて地獄へ行つたかもしれぬ

ふところが佗しご遠慮申し上げ

にんげんのあしたは鳥には見える

小林由多香

点滴へ生死の狭間つなされる

安い値を不服が蟹が泡を吹く

爛をしてちよこで飲むほど暇でない

良心のかけらも見せぬ黙否権

少々のほらを吹いても負けられぬ

道連れは邪魔にはならぬ欲を連れ
野暮なこと言うなとキャツシュねじこまれ
母の汗滲み込む卒業証書です
携電を持ってリモコンされている
許す気になつたかお茶を入れてくれ

波多野五楽庵

鬼手仏心四十年の長さかな

頭痛薬演技がうまく出てこない

北向きの窓に悩みをぶちまける

回診につつがなきやの優しい目

懐かしい仇名で肩を叩かれる

辻白溪子

奪われたのは現金で諦める

床の間に飾って壺に花がない

似合わない帽子被っているおしゃれ

身を守る言葉は喧嘩になりやすい

カラオケに通うてる喉見抜かれる

小西雄々

生き方を見どりの風と語らんか

献立へフリージアまで囁いた

悠久の山いくつもの顔を持つ

白桃も熟れるとさすが懺悔せぬ

逃げ足の早い男を風が追う

阿 萬 萬 的

八十路過ぎ自己流という陶土^{つち}いじり
同じとこ回る自分に気がつかず
齢ですねおんなじ駄洒落くり返す
妻は妻で私と違ふ趣味えらぶ
一病息災それでも僕に過ぎた妻

月 原 宵 明

万歳か乾杯の役頼む齡
音立てず食べるうどんはうまくない
北風に列なす老舗有難し
憤懣の捨て場にもなる日記帳
大陸が恋しい日あり戦友は亡し

正 本 水 客

聞き違いでしたと速達がくる
掌の裏をかえしたように笑い顔
愚問かな月の明るい道かえる
猫のひげ食みち足りた陽があたる
気休めの言葉で下駄をそろえられ

藤 村 女

恩愛を忘れぬ花のあるお庭
もめている土地とも知らずあやめ咲く
順番につぼみが開く立ちあおい
喪の家を囲みれんげ田花盛り
賞状の二番目からは以下同文

高 杉 鬼 遊

おとなしい方が好かれるとは知らぬ
ひと駅を歩く始末と健康に
銀行を不思議なくらい可愛がり
はたるいか生き生かされて酒のあて
いろはから後のつづかぬ迷い文

八 木 千 代

南天の代りに鳥の置いた花
遅咲きのさくら洪々散るような
どの花も若気の至りでは散るな
堀の内まで寄せてくる花だより
養生という名で続く出ず嫌い

河 内 天 笑

開幕スタメンへ男を張っている
顔を近づけてごはんの湯気甘し
曖昧な減農薬という表示
アルコールカット本気でダイエット
自分を敵に回してダイエット開始

橘 高 薫 風

海の女神の三千メートルのパール（明石大橋開通）
つらら解けTip Top Tap 珈琲館
万歩計おやおや君としたことが
三日月の朧は三日月の油断
美しい我慢くらべの夕桜

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、ろ

(88)

橘 高 薫 風

『川柳雑誌』昭和十年七月号の編集の窓には「上汐町から」の欄を廃し「柳界展望」を

新設した、この欄で川柳界の総ゆるの消息が一目で判るようにしたいと思っている、細大洩らさず御通信をお願いする、と記されている。

「柳界展望」は昭和四十年の終刊号まで、名称も変らずに続くわけだが、翌八月号の同欄に、句集「大川端」刊行の記事が載っている。

阪大川柳会五周年を記念して七月二十五日の発行、会員十七人と指導者麻生路郎先生の五年間の課題吟の集大成である。先生の序に山を登り切るまでには幾度か足をとどめて、歩み続けて来た道を振り返るものである。

瞰下に白く光った一筋の帯のような流れへ無限の情趣をよびかけるのもこの時である。

そうした感懐と意図の下に刊行される句集「大川端」が川柳愛好の士の渴を医するに足ることはいうまでもなからう。(以下略)

とあるが、昭和初期の知識人(医学部教授、助教授、講師、事務担当者)の豊かな人間性と知的な批判性が相均衡して、高度な質の句

集となって得難い光彩を放っている。

長崎 柳秀(会長)

金魚屋に舞妓たもとを教えられ

この家にして酒があり松の内

笠原 路生

六角堂幾何学的に暮れて行き

三の糸切れて久しくなりにけり

布施 筑川

酒 酒 酒秀才の影何処へやら

井上 湧三

伯林の夜を君黙々と歩く気か

この暑さ儲かりまつかどころかい

石崎 洗塵

今日からはお前というぞ俺という

西尾 青一路

蚤にも喰わせず天下もとらず

筈は竹になるとは知らなんだ

西田 永炭

お婿さんと名をぬきにして呼ばれてゐ

気短かになる病気だと聞いてくる

尾崎 方正

萬巻に通じて恋はうぶなりき
昇任へ父聞きまさは母あらば
押谷 たけを

逆境に居て褒められる耳の相
信心で来れば生駒は花盛り

吉田 千秋

先生の癖は書生のものになり

浦田 正甫

枕もとさぐるは金でなかりけり

歌麿の書いたようなる蚊帳の中

内海 貞三

大望は春の雲だけ知ってくれ

丸島 利生

はい／＼と言つてはいるが自尊心

小林 橙合

一本の外はどうでも良いテープ

転落の石の姿で無常来る

坂口 芳一

黙祷へ日本海の波の音(東郷大将国葬の日)

佐野 栞

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

人生四十染直しよく似合い

関根 山彦

のう／＼と山の湯槽で雪をきく

麻生 路郎(指導)

腰が立てばまだ富田屋の一の客

川柳太平記 (240)

川柳の群像

津川紫吻

東野 大八

「大正十二年(一九三三)の松陽柳壇から同十四年五月号の『大大阪』に始まる『大正川柳』『きやり』『鯢鉾』『東北川柳』『百万石』『番傘』『川柳雑誌』『たまむし』『ふあうすと』『時の川柳』『京』『氷原』『影像』『ますかつと』『ひろしま』『朝鮮の砦』『大連の』『白頭豚』『通』『黄海』あたりまで飛んだ遍歴は、顧みて忸怩たるものがあるが、それはそれとして、今更取り消せるわけのものでもない。

幸か不幸か特定の師もたず、いずれの結社に専属することもなく、無暴にも片意地を張って徒らに過(こ)して来た五十余年だが、それにしてもこの間、句会を含めて一度は選者の目に触れ、活字となった作品は約二万一千、その中から辛うじて抜き得た、一千六十句を、

これまた取り消せないものとして、ささやかな私の記録とも、自叙とも考えてここに収録した。

同じものを出すなら、いいものをと装幀まで含めての誠意ある助言、鞭撻にそむいた罪は軽くないが、亡父が常に口にしていた『自らを知れ』にせめてもの自肅が求めたかったことは付記しておきたい。

若くして父を喪った私も、既にして古稀、今年は五十七歳を二期とした父の五十回忌を修することになって、懐古去来の感慨はひとしお深い。幸いに本書が、永年の恩愛、交誼となるところあれば望外のごよびである(句集『孤影』昭54年刊のあとがき 津川紫吻) 本名・津川清。明治41年9月17日、松江市北堀町生れ。松江刑務所総務課長を最後に、

平成九年五月三日死去。享年90、清嚴道陪居士が法名。

「大正十二年、十五歳の時から川柳をはじめられ、今日までの七十五年の間、川柳一筋に歩んで来られ、昭和54年唯一の句集『孤影』を発刊。その中から三句。

屋号での話が尽きぬ国の母

笑われているとも知らぬ馬鹿力

ふるさとは出雲急須の薄汚れ

句集のあとがきにもあるとおり。

「幸か不幸か特定の師をもたず、いずれの結社にも属することなく、徒(いた)ずらに過してきた」

とあるとおりだが、氏は島根大学の水木眞弓教授(注)古川柳研究界で水木本として著名)に師事、古川柳の分類を学ばれ、県外からも古川柳研究家で著名であった。

昭和8年に湊愛川柳社を興し、同12年まで『川柳叢雲』を編集発行。さらに昭和32年松江柳会を結成。県内川柳人を中心とした自選集『擬宝珠』を、同36年の第三集まで編集されたが、第一集のあとがきに

「大橋の擬宝珠に、柔らかな陽ざしが映えて、此処にも平和が戻ってきた。この平和な環境の中に、長く険しい人生行路のやっと五十路を歩んできた柳人の二人、三人、五人が

期せずして川柳への郷愁を覚え、やがて十人二十人が集まって松江川柳会を興し、今その第一集を世におくる。敢て宣伝もしなかった。ささやかな句集であるが、お互いの川柳する心に、懐かしい過去の姿が、誌上記念碑となつたよろこびとして、印象づけられることは間違いない。

と紫叻主幹は結んでいる。

「昭和51年以来、島根県芸術文化祭川柳部門審査委員、『島根新聞』（現『山陰中央新報』）文芸欄柳壇選者を昭和48年から平成6年6月までつとめ、城西公民館川柳クラブ講師として後進の指導育成に当り、島根県川柳協会副理事長となる」（以上川柳塔まつえ吟社主幹兼全日本川柳協会常任幹事恒松町紅悼文）。

この簡潔な悼文に付し、恒松主幹の交友回顧が山陰中央新報紙上に次の様に、同氏は人肌あたたかく追記されている。

「紫叻氏は元来、きちょうめんな正確さで書齋の本棚には、柳人各氏の句集はもとより各川柳会誌が分類保管されている上、古い手紙まできちんと整理されていて、いつ拝見してもとても真似のできないことと感服したものである。

氏はまたなかなかの健筆家で、新聞や川柳誌に数多随筆を寄稿、近詠句も『川柳塔まつ

え』『にたむらくも』『ますかつ』などの各会誌に欠かさず出句され、特に岡山の『ますかつ』誌五月号の近詠、

肩へ散るさくら別れの目を惜しむ 紫叻
の一句は、虫の知らせというか、氏の終章を飾るにふさわしい遺句であらう。

孤影逝くいま香煙のゆるやかに 町紅
古い話だが、十余年もの昔、松江へ孫を連れての講演の旅で、まだ健在の尼緑之助・柴田午朗両師の出迎えをうけ、一泊二日の楽しい旅に出た折、紫叻氏が元氣はつらつと松江市内の旧小泉八雲邸などのガイド役をかつて頂いた思い出は忘れられない。

「彼は司法省刑務官として昭和29年頃に高梁市にいたが、同じ刑務官で番傘川柳社の重鎮森紫苑荘が、この年、松山から高松転任となり、近い岡山柳界へ出席宣言をして、岡山川柳創立十五周年記念大会等に出席。紫叻の柳号も紫苑荘からと私（延永忠美）は想像している。そして同時に彼は川柳岡山社の会員となり、近作集にその名前が載った。

横文字の下へ漢字で研究所

などであった。そしてこつこつと近作集へ句を送り続け、主幹の大森風来子の選を受けていた。

川雉から川柳岡山社への転身を経て、昭和

30年2月同人の推薦を受けたのであった。その後も近作同人集から黄薇句苑へと彼の性格のように休まず几帳面に句を送りつけてきていた。

歳のせいでもあろうか、彼は器用な多作家ではなく、伝統をふまえた本格川柳家であった。大会で優勝というより、のどかに句を楽しむ作家と私は見ていた。我々の『合同句集吉備団子』には第七集から第四十七集まで、三回休んで三十八回も参加している。

紫叻は昭和三十一年四月に松江刑務所の作業課長に転任し、三十九年山口刑務所へ転任となり、そして四十一年三月に定年退官したが、その後は松江に居を構え、ひたすらわが『ますかつ』の「花かつら」欄の常連として誌上を飾っていた。諸行無常とはこのことか、心からの彼の逝去を悲しみ御冥福を祈りたい（『ますかつ』6月号、延永忠美悼文抄録）。以下その紫叻の晩年の作品を並べておく。

しばらくの無沙汰沈丁花が匂う

砂に字をよしや阿呆といわれても

舌打を妻がしている釘をうつ

ハンカチを染めて貰って旅終る

二人居てふたつの音で年送る

紫叻

〃

〃

〃

〃

▼次号は「今野 空白」

『端午の節句』

清 博 美

古くから、「正・五・九」といって、一年の中でも、正月、五月、九月は最も重要な月とされていた。特に五月は田植の月でもある。神が村に來臨してとどまるので、その神のご機嫌を損なうと、秋の収穫は望めない。

そこで物忌みの生活が要求された。『檀園隨筆』に「五月結婚を忌む」とあるように、目出度いはずの結婚も、この月に限ってタブーとされたのである。

菖蒲を軒にさし、また菖蒲湯に入る風習もこの物忌みの意味からであった。武者人形は、五月五日に菖蒲髪（上代、青柳、アヤメ、ユリ、藻草、稻穂などの種々の植物を、髪飾りにしたもの。『日本国語大辞典』）をする風習に端を発し、これが後に薄い板で作った菖蒲兜に変わり、この前立てに人形を飾るよう

になった。やがてこの人形が独立して武者人形になるのである。

『絵本風俗往来』は、「○五月端午の進物並売物」の項を立てて、次のように記している。「五月五日は端午の佳節として祝日の進物の如く季の物なり。男子ある家は柏餅粽の贈答地主家主師匠への進物総て上巳と同じ。男子初めての祝ある所への進物武者人形飾兜鎧青龍刀鷹弓矢などの手遊品貴賤に応じて贈る。返礼は、柏餅粽酒勝魚なり又祝宴を開き縁辺朋友の招請あり（以下略）」と。

○幟

端午幟は、宝永の頃までは紙幟であったが、やがて鍾馗・鯉などを描いた布幟に変化して行く。その内、鯉を描いた幟が吹流しの鯉幟

に発展したのが天明期頃ではなからうかと推測されているが、未だ鯉幟の起源に付いての定説はない。

『嬉遊笑覧』は、この幟について次のように記している。「昔は端午のぼりの頭に種々のものを付けたり、のぼりも今世のやうに一対にして立つるはなく、幾本立つるも一本づゝさまざまなり、故に彼の出しといふものもみなかはれり、五元拾遺、なよ竹の末葉のこして紙のぼり、是又五月のぼりの出しに笹を付けたるなり。笹を付くるは今も神祭ののぼりにはあり。西川祐信が三ツ物絵尽、麵類の汁と隠して色茶屋へ行くが同じことは端午のぼりといふ、心はだしがいりますといへる是なり」と。

目出たさへ家の根継の幟杭 六二六

―長男誕生で幟用の杭を打つ。―
だいいて出てのほりを立てるじやまに成り

―子供に見せようとして 明七智二

初幟追くくに来る諸軍勢 六三九

―お祝いの武者人形が贈られて来る。―

竹に虎風にもまる、紙のほり 宝十一・八・五

―虎の絵の紙幟。―

初幟萎たんく上を見る 五九三〇

―男の子を産んだ妾がのさばり始める。―

○菖蒲葺

端午に備え、五月四日の夕方に軒へ菖蒲をさす事が行われた。『塩尻』には、「菖蒲、蓬を五月五日に用ひ来る事、我國久しきならはし也」と記して、『古事記』を多く引用、また「按に、菖蒲水草なる故。これをふくなり、夫五月は午の月、南方離火の時也、水草を以て火氣を去意にや」などとも記されている。

はこの子の干物を拾ふあやめふき 二7

羽子の子を樋からほうるあやめふき 四四22
―正月に遊んだ名残の羽根。屋根に引つか
かったままだったのである。

隣へも梯子の礼にあやめ葺 初12

―借りた梯子の礼に隣の屋根にも菖蒲を。
あやめふき御用にはしこおさへさせ 明五智4

―通りがかったご用開きの小僧に、梯子を
押さへさせる。

四斗樽のそこをふみぬくあやめふき 四一40
―こちらは梯子の替り四斗樽を使つて。

○菖蒲刀

端午の節句に菖蒲を軒に葺き、菖蒲湯に入る風習に付いては、先に記した通りだが、また子供が菖蒲刀をつくり菖蒲打をする風習もあった。

『守貞漫稿』に「菖蒲刀 端午の飾刀にて、

親族出生の男子等に送レ之、木刀也。金銀紙等にて飾レ之」とあり、また、「五月節句翌六日、男子七歳より十二歳迄、大将に成べき子は上り甲をかぶり、菖蒲刀をさして魔を、持、供に連る子供、せうぶ刀を指菖蒲の鉢巻させ、螺吹て備へ立して、員数切といふ事をして遊ぶ、是軍陣の稽古也」とは、『むかし物語』の記載するところ。

菖蒲刀を二本さし武者の礼 七八7

―恰も武士になったような仕草。

菖蒲刀を附紐の右へさし 一一四11

―附紐は着物に縫いつけてある紐。左へ指すべき刀を右へ。左右もわからず。

奥さまをしやうぶ刀で切なびけ 一〇30
お妾のせうぶ刀は切れるなり 二五11

―男子を産んだ妾は強い。次第に奥様を凌駕する。

○柏餅

端午の節句には柏餅。ちまきとともに供えられた。昔から柏の葉は、食物を盛るのに用いられたが、これが江戸では節句の蒸菓子に應用されるようになったのだという。

『歳時拾遺』には、「五月五日、米の粉をこねてひらめ、中に餡を入れて、合すこと編笠の形の如し、柏の葉を以てつつみ、蒸しこれ

を柏餅と言ふ。機内にはさのみ用ひぬ事なり」とあり、『世事百談』には、「端午の日、柏の葉に餅を包みて、互に贈るわざは江戸のみにて、他の国には聞えぬ風俗にして、しかも古き世よりのならはしにもあらざるにや」とある。つまり、江戸では柏餅、他の地方ではちまきが供えられた模様であり、それほど古い古い風習でもなさそうだというのである。

柏餅妹の乳母ハ手つだはず 初13

―坊っちゃんまの祝い、お嬢ちゃんを預かる乳母は見えて見ぬ振り。

かみさまをいくらもよせるかしわもち 六18

―近所のかみさん連中に手伝いを頼む。姦しい台所となる。

辻番へもりが指図のかしわもち 初39

―子供を遊ばせるために、子供は何時しか辻番の爺さんと親しくなっている。そこで辻番へも配る。

大小で配つてあるくかしわもち 八3

かしわもちくばつて来てハきつくい 一八24
太刀をぐわらりと投げ捨てかしわ餅 一三13

―菖蒲刀を差した子供の使い。
かしわもちあまくこしらへ内て喰ふ 一八24
―家で喰う分は格別に甘く作る。

秀句鑑賞

同人吟 田中正坊

— 4月号から —

今回、ピンチヒッターとして『秀句鑑賞』

を依頼され、ホイホイと引き受けたあとで、

「しまった」と思った。実はこのころ、ス

ランプが続き、作句もままならないからであ

る。『川柳塔』にしても、締切日の前日にな

ってから四苦八苦してしぼり出し、やっと規

定の八句をそろえて出稿する始末、『泥縄』

もいいところだ。『そのような私が……』と思

うと筆にもぶるが、やはり承知した以上は責

めを果たさねばならない。

ところで、私の親しい同人にユニークな作

句をしている人がいる。いつも小型のノート

を携行し、折りにふれて頭に浮かんだ句を書

き止める。彼の場合、句は「作る」と言うよ

りも、「生れる」のである。自由吟の五句や

十句はいつもストックがあり、課題吟もその

中の句をアレンジすれば間に合うらしい。

実はこれはユニークでも何でもなく、作句の

王道ではないかと思う。私もこれを機に

日常的に句を作ることを心がけたい。

花粉症近づく梅がほころんで

牛尾 緑良

目下、私も花粉症に悩まされており、この

句が目にとまった。梅がほころびはじめ、春

が近づくのはうれしいが、それから花粉症の

シーズンになると思うと身構えてしまう。昔

子どもが泥まみれになつて遊んでいた時代は、

こんな症状はなかった。近ごろでは、抗

菌グッズとやらが出回っているらしい。

そう言えば近頃空を見ていない

西出 楓 楽

昨年、長い看病生活の後、ご主人を亡くさ

れた作者だが、今年に入ってから句会にはも

より川柳塔関係の仕事にも励んでおられる。

つれあいを失った悲しみは、時が経つても消

えることはないが、「いつまでも泣いてばかり

おられませんから……」とご本人はきっぱりと

語っている。

発表された六句とも、最近の心境を詠まれ

た句だが、最後の句に「元氣出すのが亡夫へ

の恩返し」とある。

節操のなさが服着ている政治

高須賀 金太

近頃の政治家の姿を見ていると、『節操』

という言葉が死語になってしまったのではない

いかと思う。この句を読んで「昨日勤皇／明

日は佐幕」という歌詞を思い出した。たしか

西条八十作詞「侍ニッポン」の一節だったと

思う。

戦争も平和も人が殺される

大橋 政良

何百何千万の人を殺傷した大戦が終つてひ

さしく、表面的には平和な世とはなったが、

戦火の火種は消えず、世界のあちこちで民族

紛争によって血が流されている。

そうでなくても毎日の新聞には、ナイフで

教師を刺したり、少年が何の罪もない少女を

殺す事件などが報道されており、これがほん

とくに平和な世なのかと考えさせられる。金

太さんの句とともに数少ない時事吟の秀句。

僕はもう何も言うことありません

酒井 一 壺

一見すると、あきらめの心境を詠んだよう

に受け取られるが、こうきっぱり言い切るに

は、自分がおかれた環境にめげず、再起をめ

ざす決意がひしひしと伝わってくる。どうか

元氣を出してください。

矢面に立つ氣しつかり食べておく

玉置 重人

「腹がすいては戦はできぬ」という言葉がある。テレビの時代劇で、陣幕の中に座った武将が、木の椀に盛られた飯をかきこんでいる場面がよく映し出される。この句に深い意味はないが、やはり事にあたっては、こういう心掛けが大切だろう。

この花は本物きれいに枯れてゆく

宮崎 シマ子

よくできた造花がうつすらと埃をかぶっているのを見ると、何かおぞましいような気持ちにさせられる。いのちなきものの悲しさだ。やはり本物の花は小さく、目立たなくても、きれいに咲いて、きれいに枯れていく。咲いた花は枯れるのが定めだから。「きれいに枯れ」という言葉がユニーク。

国内の憂さを蹴ちらし金メダル

久保 まさお

今月はさすがに多かった長野オリンピックにちなむ句の代表として、この句をいたしたい。新聞やテレビニュースを見て、毎日うつとしい日が続く中で、オリンピックにおける日本代表選手の子想外の活躍ぶりには目を見はらされた。金メダルを高々と掲げた選手の笑顔が、いつまでも忘れられない。

老人手帳届いて齢を自覚する

山口 三千子

高齢者の一人として見ていると、無意識にこういう句が目にとまる。いわゆる老人手帳は府県によつて名称が異なるが、大阪府では「健康手帳」と銘打っている。老いを自覚した方がいいか、自覚しない方がいいか、意見が分かれるところだが、この句を読んで手帳が届いた十年前のことを思い出している。

はじめから老人だったわけでない

林 はつ絵

若い人たちにとっては、老人は何か別の人種のように見えるらしいが、この句のとおりはじめから老人だったわけではなく、また、好きこのんで老人になったわけでもない。青壮年時代はいつか来た道、高齢者はいつか行く道に過ぎない。思ったままをズバリ表現した作者の意気を買いたい。

春愁や老いに逆らうことはない

門谷 たす子

年よりも若く見られて喜んだり、意識して若づくりする人がいる。どのように生きるかは、それぞれの人の勝手だが、淡々として老いを受け入れ、その人なりの生き方をするのが望ましいのではないだろうか。これはすでに老い込むこととは別である。

願うこと古希すぎてから一つだけ

滝北 博史

老いに逆らわないということは、欲を捨てることでもある。作者の一つだけ願うことは何か知らないが、自身の健康や孫のすこやかな成長であつてもよい。ギラギラした金銭欲や名誉欲でないことだけはたしかである。

残高は分からぬがよし余命表

石原 靖巳

余命が何年か知りたくないこともないが、それがもし分かるとすれば、死刑の執行を待つ人のような気にもなるだろう。やはりそれが分からぬままに、ベストをつくして生きることが大切だろう。

号令をかけて動いている私

富坂 志重

これはコメントをつけるまでもなく、私をふくめて高齢者の日常生活の姿である。

国のため死ねる老人などはない

橋本 多哥由

「老人は死んでください国のため」という句に賛否の論が沸いたが、これは実にさっぱりとしている。かつて多くのわかものがだまされて国のために死んでいったが、今のわかものはもうだまされないし、かつてはわかものがあった高齢者においておやである。



西田柳宏子選

今治市 渡辺南奉

人間の強き弱さを知る涙
幸せを守り続けるちびた靴
神様も多忙見落とすことも多々
正確な敬語へ肩がこつて来る
断りがていねい過ぎて腹が立つ

今治市 塩路よしみ

無駄の一つもやしの尻尾とっている
度忘れをひとりつぶやく自己嫌悪
かすり傷ほどの悲しみ笑っちゃお
年金のおかげ白旗まだ振らず
寒梅の一輪亡母へ匂わせる

富田林市 藤田泰子

入門をしてから遠い遠い道
戎顔の底に野心が透けて見え
自分でも笑ってしまふ物忘れ
旅の恥アルバム見る度笑い出す
雪燃える近松心中物語

河内長野市 大西文次

芽吹き時仁王も欠伸かみ殺す
先生が美人で通う書道塾
悪友の司会気になる披露宴
玄関の花お淑やかそうに咲く
遺言状書く気持には未だなれず

尼崎市 田辺鹿太

目の中に入れると痛い不肖の子
待ち切れず新酒を嗅ぎに灘五郷
も一人の自分が僕を追いつめる
男気はあるが勇気はありません
不祥事でやつぱり逃げるのはトップ

今治市 野村清美

床の間のすすきが壺で干からびる
やましきはない堂々と昼に会う
ポスターの画鋏が落ちていけずする
父の背を信じて眠る鬼の面
ふと覗く鏡が叱る眉の皺

和歌山市 吉村 さち子

吹田市 西岡 豊

何処にでも顔出したがる好奇心

朝食は甘辛しゃんと合わす刻

可も不可もなく定位置に夫婦箸

割り勘の端数に個性ほつとけぬ

ハンガーに昨日の悲しみ掛けたまま

鳥取市 西村 半 量

古希半ば正座しなくてすむ仲間

春の服七十五歳ジルバ踏み

風よ吹け親子の風が待っている

ひとかどの人だと知った散歩連れ

ガン術後妻の悟りに救われる

大阪市 一本 勇 太

唐草に包んだ母の青春譜

修羅いくつ抱いて過去帳風化する

白線を越えろとガラリ変る主語

友情のままで過ごそう第二章

大都会嘘の残響二十四時

唐津市 井上 勝 視

晩学の分は長生きしてやろう

嫁というぬり絵のワクが氣にくわぬ

一途さを買いますアナタの下手が好き

副作用抑えて次の副作用

身勝手を賽銭箱に嗤われる

張り替えた障子に映える若い二人

見込みある弟子と師匠の瞳が厳し

親孝行イギリスからの一通話

丸髻の亡母の姿も遠くなる

上席に座ると空気薄くなる

横浜市 田中 笑 子

あやとりは母に習った通りする

梅の香に誘われて行く回り道

雑草に元気をもらう散歩道

快方に向かった母の薄化粧

父の夢子の夢風は乱高下

今治市 越 智 青 園

合格へ家族が弾む毬になる

台本にない喝采に勇氣湧く

シクラメン若やいでくる老いの部屋

一石が今夜の私眠らせぬ

札束が罪の重さを知っている

寝屋川市 瀧 本 八十八

瀑布より神住みたまう行の滝

蹴手繰りは小兵力士のかくし技

乙姫の涙か真珠秘める貝

祝日は紅白まんじゅうのどかさよ

積み木には森の神秘と暖かさ

東大阪市 北村賢子

嫁ぐ日近い無口な父がなお無口
どこよりも一番利口なうちの孫
まなうらにあの日のままの君が居る
節くれたあれたわが手に亡母慕う
春うららちつちやなあんよもとびはねる

兵庫県 安達 厚

人生は甘くなかった日記帳
悩み事無くて夕陽が美しい
三と四が足せぬ園児がピアノひく
食事する姿勢を妻に叱られる
絵手紙を夫婦で書ける老いうれし

京都府 前上英一

反対の署名へ義理が絡みつく
一枚の辞令が遠くするとなり
書き添える一筆思い満ちてくる
野に下りて少し辺りが見えてくる
若い芽を伸ばす踏み台ならなろう

横浜市 金森徳三

役に立つ煙草税だと吸いつづけ
啓蟄や虫も動かぬ不況風
おーいお茶リモコン今日は電池切れ
要る要らぬ迷って増える要らぬ物
雪だるまジャンプしたかる北の空

羽曳野市 西村りつえ

この胸で寝てた天使も反抗期
水たまりの月を抱いてる淋しがり
騒がしい子供の声にバスが酔い
土産話でポッケが重い旅帰り
角隠す帽子を買って姑になる

堺市 梶本哲平

赤提灯湯気立つ宵や人恋し
威勢良いおっちゃんの声寒さ飛ぶ
熱燭で今宵のぼくが生き返る
隅に居て人の飲み様また楽し
ぐいと飲みばいと金置き消える漢

愛媛県 黒田茂代

冬空へ裸木明日の夢抱いて
眠くなったら寝られる自由ある余生
和服着て色足袋主婦も板につき
知らぬ人の便り励みにペンを持つ
生きている限り人間新しい

大阪市 亀井円女

核家族つかず離れずこれでよし
たかが喜寿余生は夢で胸を張る
揃って元氣食べて怒って笑えま
するさいと一喝わたし負けた振り
侮った風邪は香港製だった

鳥取県 西垣 美知子

じつくりと聞いてやりたい子の悩み
節穴でなかった母の目の高さ

くやしいがここでは負けよ天の声
仲裁の父の一声歯切れ良い

無駄足とわかって踏むも親心

横浜市 川島 良子

感謝する仏の顔へ一歩寄る

やわらかいご飯を老母と共に食べ

流行に飛びつくわたし風邪もらっ

券売機まごまご電車乗り遅れ

こだわりのパンへテクテク四十分

大阪府 米澤 俣子

成長を待った息子が遠ざかる

収入に見合う暮しで恙なし

脇道にそれた時間は大きすぎ

ふるさとはよろしおますと大阪弁

いかなこの釘煮お膳に春が来る

高知県 桑名 孝雄

気は古希ぞ誰も尊敬してくれぬ

孫を追う目はパパラッチよりすごい

鉄壁の守りを蟻があざ笑う

老いらくの恋は少うし呆けてから

いじめなどあつけられかといなす嫁

唐津市 樋口 輝夫

棒グラフ伸びて来月課長補佐
試供品だけで母ちゃんめかしこみ

長寿だけ賞めちぎってるのど自慢
絵心は無いがベレーがよく似合う

いたわっていると言いたい嫁の顔

高槻市 乙倉 武史

金メダル沈滞ムード一掃す

長野五輪感動くれた車椅子

充電の一日となる春の雨

ベテランの旨さが光る土俵際

胃袋を励ます旨い食前酒

富田林市 山原 昭水

ハーモニカ吹いて青春とりもどす

流行を着てもやっぱり河内弁

春祭り母の出番でいなり寿司

仏にも鬼にも出会ひ花見する

釣り竿に親子の絆深くする

寝屋川市 角野 仁清

働かぬ暮らしに慣れてくる焦り

定年でやつと気付いたキリギリス

しっかりと巻いてキャベツの護身術

ドラえもんとおとぎの国へ行く枕

買い替える毎に分厚くなる眼鏡

兵庫縣 倉垣惠美

春一番 梅志句集に逢いました

リング句う風邪が治った証拠かも

水仙よ起床ラッパは亡夫へ吹け

馬鈴薯の種子置き忘れ置き忘れ

伊丹市 延寿庵 野鶴

箸紙の裏に女将の一行詩

裏庭の風も友なり春を持つ

遠近法構図の中に猫も置き

風つかみタンポポが飛ぶ浄瑠璃寺

藤井寺市 太田 扶美代

少年の夢がこぼれる春の駅

身中に育ち盛りの虫が棲む

賞め言葉今胸中で育ててる

木枯しの中から春を嗅ぎ分ける

横浜市 山梨 雅子

店閉めた豆腐屋さんと医者で会い

軽目にと頼めば飯の上をはね

受験期をオリンピックが邪魔をする

妻の留守止められているものを食べ

尼崎市 森 安 夢之助

その汗に惚れて娘を嫁にやる

古い二人居眠りしている置き炬燵

ずる休みして寝たろかな外は雪

民宿の炊き込みごはん母の味

大阪府 立 蔵 信 子

パソコンで疲労回復しています

プレゼント深い意味などありません

外野にて無責任さをやじってる

活気ある職場にいつもティータム

米子市 大 野 蒼 流

短詩型ピカソばかり追いかける

死神に手紙貰った交差点

もう一度愛確かめて渡る橋

ランドセルもう偏差値が待っている

泉佐野市 稲 葉 洋

輪になって踊ろナガノに地球人

好奇心不老の糧と自己暗示

ひとり芝居亡妻だけが客であり

熱演の僕を喜劇という世間

大阪府 岡 本 久 峰

齡忘れ見果てぬ夢を追いかける

足萎えて庇う頭脳も衰える

ごうぜんと改札通る無料パス

時々凍土の夢にうなされる

池田市 木 村 一 笛

ライバルが転んで一等貰ってる

へたったら三隣亡が待ち構え

一坪の庭に咲いてる梅の出来

雨だれがリズム忙しく戸を叩く

岸和田市 亀井皎月

射程距離 歳がだんだん遠くする
味に数制限の店列つくる

戦時中並んだ癖がまだ残る

冷や奴 湯豆腐にする 〇—157

高槻市 執行稲子

大らかに絵筆遊ぶす友の逝く

とらの眼がうまく画けたと亡友の声

ダイエツト中素知らぬ顔の力瘤

時々はちりり女を見せた亡友

大阪市 杉澤汀

殉国の同期よ眠れラッパやむ

飛んで火に入れとは誰の命令ぞ

旬すぎた鰯酒独りかむ夜更け

古里を夕日のように遠く見る

大阪市 平井露芳

保健室休みたいのは教師です

事故車見る車で渋滞続いとり

見出しだけで読んだ気がする週刊誌

食べ過ぎで魚も近頃太り気味

高知市 細木子龍

世知辛い世相へチラシ増え続け

春雷に声が途切れる電話口

見え透いた腰が低さの選挙前

懐に残す龍馬の謎がある

秋田県 湊修水

子雀よ小鳥よ踊れ春がきた

大ジャンプ泣いた原田にもらい泣き

医者通い荷物重たい老いの坂

噛み合わせぬ感情線がショートする

和歌山市 木村親路

母さんのコビーのような嫁が来た

高額な保険に妻は入れたがり

中身まで変えてはくれぬ貸衣裳

小ジワまで撮ったカメラが憎らしい

神戸市 船津とみ子

さくら餅その優しさは春です

ね 風が吹く今日は三月ひなまつり

震災四年目娘のおひな様飾る

ひな人形の髪飾りが落ちてゐる

伊丹市 樫谷郁子

第九のうねり長野に集う五大陸

雪空を突き上げてゐる涙の手

浄土は空 大正生まれ掌を合わす

美味いとは言えぬが母の温い味

羽曳野市 芦田絢子

子を庇う嘘だ大目に見ておこ

う 石一つ投げて出方を確かめる

今さらに作り話と言ひ出せず

蛞蝓のストレス跡を光らせる

羽曳野市 安芸田 泰子

相槌が寢息に変わる旅の宿

合掌の手からこぼれた癌告知

中流の意識が見栄を張りたがる

尻尾振る疲れが溜る尾氈骨

大阪府 澤田 和重

冬の陽を盗む布団を干している

尻餅をついて綱引き勝ちになり

あこがれの的へ射る矢が届かない

底抜けに明るい嫁がきて平和

横浜市 福島 かづ子

沈丁花コーン爆けるように咲き

スカートに替え春風の街に出る

夫婦にも歩調合わせる嘘がある

小半刻話して名前出て来ない

高槻市 江原 秀夫

輪になって娑婆に感謝の酒を酌む

妻が持つ紐は年々太くなる

妻元氣頼りにしてる葉のむ

もう一人の自分に悩むトップの座

八尾市 平川 幸枝

一灯を洩らし眠れぬ夜のテレビ

黒もまたすんなり春の色になる

居酒屋へ味を盗みに妻と行く

また元の独りになって子と別居

向い風味方になった新記録

秀才と言われ汚職と使い込み

銀行は貸さぬ笑顔も持つて居り

止める人居るから強い事を言う

岡山市 清水 金太郎

ゆきずりの花と知りつつ手をつなぐ

四面楚歌なかに味方の顔探す

七人の敵がまだ居るまだ死ぬ

異常なし言われて他の医者探す

富田林市 大橋 鐘造

一戸建て呼べば老妻だけが居る

求刑も世論の波に少し揺れ

捨て印もきっちり押し離婚する

大臣の顔で出てくる縄のれん

唐津市 宗 弘

ブルドーザ見れば乙女の眼が光る

ガラガラ列車になぜか指定席

親馬鹿と言われるほどの子が欲しい

雪の朝裸足が走る永平寺

西宮市 長谷川 淳

夫と居るただそれだけで事足りる

自我張って今日一日を棒に振る

熱爛に妻の機嫌を見た思い

母は手に打出の小槌隠してた

和歌山市 上地 忍

立板に水で説教身に沁まず

京都市 高島啓子

方円の水にはなれず家を出る

深い皺笑顔はいつも持っている

高知県 百田幸

不器用なプロポーズする人が良い

生き方は不器用棚はうまく吊る

大正の旗振る夫と五十年
一粒の米を拾って笑われる
三世代住んで別部屋別財布

兵庫 仲井素水

欲捨てて何の生き甲斐あるものか

爪と髭生きて証拠すぐに伸び

何よりの宝毎日恙無く

少年が迷惑顔の事件増え
鯉幟少子化風も重く吹き
素人が考古学者になるキトラ

元旦の若水九十の老いが汲む

手洗いで仮面をつける四面楚歌

鳥取市 近藤佳子

離婚した妻がよこした年賀状

リハビリの朝も欠かさぬ薄化粧
窓際の一年二目腕を上げ

東京都 井上つよし

いいじゃない踏まれて耐えた人生も

寒い月母を看取った夜に似る

奥さんが受付看護婦薬剤士
茜空今日のスコアに悔い残る

青春を偲ぶ公園風寒し

寅さんが声かけそうな帝釈天
参道は本家元祖が軒並べ

高槻市 小林一閑

子の育つ速さで親が老けてゆく

親が親だから子も子と呆れられ
初めてのふりして老母の愚痴を聞く

横浜市 長島亜希子

治癒待たず主治医転動してしまふ

よろけても歩けと人は軽く言う

むつかしい事を手掛けてボケ防止

リストラの足くじ売場探してる
予定表が花見ばかりで溢れそう
イヌフグリ見つけて嬉し春の朝

鳥取県 加藤公子

大根が肌ぬぎをして農夫待ち

ホーホケキョ畑うつ鋏の手が休む

先陣に立った土筆を霜が攻め

還暦の岬に立って深呼吸

朝は梅午後桜見て日が暮れる

横浜市 伊藤ふみ

鳥取市 岸 本 宏 章

姓だけの表札父の顔がない
乱筆で届く手紙が温かい
汗知らぬ手が華やかにテープ切る
豊かさの陰で心が風邪をひく

静岡市 大 村 正 雄

草笛を吹けば童心よみがえり
緑風に誘われ口笛吹いてみる
おデイトの君を待たせる薄化粧

本年も居心地よいか燕来る

島根県 槻 谷 伸 子

年寄りの計を聞くたびに年を取り
釘付けになったジャンプの金メダル
雛祭り正座している女の子
雨しとど春の息吹が見える野辺

鳥取県 原 み さ を

水茎のあとにきれいな嘘がある
筆マメというつきあいにくたびれる
表札は褪せてただいま別居中
踏んばった仁王の足を虫が食う

鳥取市 有 沢 せ つ 子

鯉のぼり本家の意地も見上げさせ
かくれんぼ鬼に呼ばれて返事する
太陽の匂いを添えて傘返す
余生とはいつの事やら孫の守り

横浜市 岡 田 芳 江

いつからか花粉に春を告げられる
悠々と五十路迎えて面はずす
髪を切り白黒はつきり見え始め
春うらら財布のひもも羽がはえ

大阪市 小 泉 久 子

残り火を夢に托して燃え続け
聞き上手ばろつと本音出でしまい
さまざまな杖を頼りに生き延びる

遅すぎた親の気持が判る齡

今治市 渡 邊 伊 津 志

思いやる心を作り出す笑顔
立話ベルぐらいでは動かない
鉢巻きを締めると雑魚の血が躍り
波蹴って男の詩が散って航く

愛媛県 安 野 案 山 子

菜の花と桜 日本が春になる
幸せな僕だと思ふ誕生日
物忘れ笑いあつてる妻と僕
早起きの孫が急かせる鯉轡

高槻市 左 右 田 泰 雄

点滴のベッドを見舞う赤いバラ
日溜りに影を落した冬帽子
長野から眩しい若さほとばしる
ひっそりと主なき部屋のシクラメン

倉吉市 山中 康子

大阪市 榎本 日出子

思春期の奮はんなり色をつけ
懸命な十四歳の抗議文

ひもじさも薬になると旅立たせ
青い芽をのばす大人を育てねば

海門市 谷口 義男

領いてしまいい後悔する妥協

妻泣く年金だけで米買える

生翳り医学知識を振り回す

問い詰めず泳がせて置く妻の知恵

河内長野市 妹背 尽呂久

ずるずると書くのが延びる遺言書

鴛鴦が謎を残した離婚劇

賑やかな宴張る過疎の一軒家

カルテ書く医師の筆先気にかかる

米子市 小塩 智加恵

満期くる余生楽しむテレビ買う

姑の引く一線を越さぬ嫁

少子化で長男と言う子が一人

日々妻に頭上がらぬ物忘れ

八王子市 井上 京一郎

あみだ籤さながら京の小路抜け

乾杯と拍手グラスの置きどころ

襲名という口上の声の張り

見通しが良すぎましたと事故の弁

いたずらな風が一人のとびら開け

散るサクラ湯舟に浮かべ友偲び

目ぐすりを悔し涙の上に差し

買って出た苦勞が裏目に出る時も

樫原市 西本 保夫

弱いものいじめだ悪い奴は逃げ

税務署を出るとあれこれ腹が立ち

にこにこと出迎え税務署追徴税

税務署の女の子まで憎くなる

米子市 猪森 スミエ

クレヨンが春を咲かせて上機嫌

孫二人育ち盛りの炊飯器

ちやほやと育てた犬に手を噛まれ

一枚の紙が指図をする遺産

八尾市 鷺見 章

梅だより我はテレビで知る季節

食すんで夢のつづきを追って見る

窓外の家並静かに朝となる

ひげ剃ってこれから何をするつもり

岸和田市 不破 仁緑

肩書きを外せばふらふら宙に浮く

長老の長い話に座を立てず

今度こそ今度こそはと墓穴掘る

お互いに疑いながら探し物

米子市 門脇晶子

前置きが長く話が纏めない
退院の日から縁が好きになる
無口でも味方になった腕時計

兵庫県 緒方美津子

コンサートやさしい足音つれ帰る
十九歳世をすねるには早すぎる
お風呂場の鏡が急かすダイエット

和歌山市 和田美寿子

喜寿過ぎて息の合わなくなった老い
手の届く位置の幸せかみしめる
良い夢を見たくて枕替えて寝る

京都市 勝山美千代

すこやかに老いて残り日楽しもう
道端の名もなき草も春の顔
若者に負けぬ気骨で齢を積む

八尾市 田中トシエ

平成の母を背負って二歩でこけ
初孫はスターのように扱われ
おはようの一言今日の風を変え

大阪市 中澤孝子

手のひらの薬がぞえて飲んでます
新聞よりチラシに力入れてみる
悪口を聞き分け犬がすねている

羽曳野市 徳山みつこ

春や春 論吉浮かれて行つたきり
職業欄主婦とかくほど家事をせず
合格へ母ちゃんの鼻もりあがる

川西市 田中喜俊

老いてから生きる楽しみ幅が出来
門限のない未亡人よく喋る
仲良しに淋しい夜の長電話

尼崎市 内田美也子

春の孫日々に膨らむ知恵袋
二月堂たいまつが行く春が来る
夕映えの空は未来の夢を抱く

横浜市 平達也

夢のため夢を壊して行く科学
屁理屈が言えて子供の親ばなれ
負けるまいただそれだけのひた走り

米子市 池尾保子

日本髪見たさに京を訪れる
肩掛けも粋に巻いてる舞妓さん
脇役がいるから主役熱が入り

羽曳野市 川田晋

友達で居りたいという元夫婦
仲人に説得される男親
学校で覚えて来たという苛め

寢屋川市 妻 谷 重 三

給料日ちよつぱり威張る弱い父

ドクターの酒の許しにある疑念

比べるな奴は東大銀時計

横浜市 山 下 省 子

独り言に返事をされてギョツとする

ストレスにつきあっている無駄遣い

しあわせが買える世間の不しあわせ

横浜市 鈴 江 純 子

三年目孫を待つ声出しそびれ

杉花粉飛んで今年も春を知り

居心地が好くて恢復かくしてる

横浜市 明 渡 トヨ子

春一番何と嬉しい便りでしょ

ケラケラと笑いたいけど種がない

目を病んでラジオ聞く耳感謝する

姫路市 服 部 一 典

金銭で買えぬ命を断つ保険

親が敷くレールを走る塾通い

就職難 各種資格が趣味になる

和歌山県 坂 東 和 代

忘れたと言わねば虫が治まらぬ

追伸が本文よりも長くなり

ご破算でまた一日が動き出す

尼崎市 軸 丸 勝 巳

初耳のように聞いている三度目も

一つまたひとつ管とれゆるむ頬

半分の胃で生きていく箸始め

和泉市 横 山 捷 也

父逝きて母の形見も整理する

ひたいほどの庭に新芽の四季がある

同窓会忘れた顔と握手する

鳥取市 岸 本 孝 子

調子いい男がいつも踏み外す

ローマ字の表札チャイム押しそびれ

苦労性肩の荷おろす時がない

綾部市 藤 田 芳 郎

駄馬でよし身に合う靴を履きつぶす

三代の同居に要らぬ門構え

広辞苑「ん」が孤高を守り抜く

香川県 向 山 治 延

大海の稚魚は群をくずさない

八十路でも春は夫婦で遍路杖

草餅を無住の寺にそっと置き

鳴門市 八 木 芳 水

日の当たる男の顔にある過信

春の乱私だけが風邪をひく

年金で生きてせめても義援金

出雲市 梅 ミツエ

ボランテア笑いの中の春日和
不況風吹いてる割に山のゴミ

春がすみ黄砂出雲へ吹き荒れる

大阪市 榎本 洋子

祝賀会招かれ隅にいる私

祝金親の想いがつまってる

丸窓に朝日さし込み春近し

尼崎市 的場 十四郎

さらなる夢抱いて八十路の坂のぼる

このチャンス決めた男は突っ走る

嫌われた娘から来たチョコレート

尼崎市 中澤 向西

越して来た団地のあかり強すぎる

正直に喋ると鬼の眼が笑う

正確に動く時計のつらい日々

日立市 加藤 権悟

無冠だが軍手に父の自負がある

飽食のペットやっぱりお前もか

人情に触れると溶けて行く仮面

兵庫県 徳平 毯子

腹たてて顔に出しては負けている

七転び定年の日がや々と来る

ことしまたぐ煮届いて春だより

河内長野市 木太久 正一

娘の電話うっかり妻の誕生日

久し振り初音に耳をそばだてる

所得税 全額還付春うらら

枚方市 寺川 弘一

妻の留守猫に合わせて背伸びする

よい頃にお勤めでしたと停年後

ワンマンも一人耐えてる疼きあり

八王子市 播本 充子

ありのまま見る聞く書くに汗をかき

実らない努力へ金の無駄を言い

選ばれた不運を嘆く花粉症

横浜市 生坂 サト子

啓蟄と聞いて負けずに靴を履く

デパートが好きで朝から長居する

駄目押しをする執念に期待され

益田市 岡田 たけを

妻の留守独りでいれば眠くなる

触れられぬように古傷抱えている

花があるうちに小さな旅をする

横浜市 近藤 道子

陽に感謝天地返し of 土作り

種じゃがを古い記憶で植えてみる

四季めぐり土と話して土に生き

東大阪市 谷口 義

世間では通じぬことを家で言い

愚痴一つ言わぬ女がこわくなる

更年期おんな自由になつてゆく

今治市 中村 好恵

負け癖のついた蛙が飛び出せぬ

ビタミンCこぼれるように柿若葉

晩学の筆先生のほめ上手

兵庫県 円増 純子

悔しさへ鍋ピカピカに光らせる

ゲートボールが母を達者にしてくれる

花作りこんな平和が来たわたし

尼崎市 清水 久美子

幸せと思う湯船に委ねる身

空泣きで知恵をしぼっている子供

ひとり歩きしたいがついてくる夫

鳥取市 近藤 秋星

路のとう小さい春を見付けたり

金メダル取った涙が美しい

転勤の噂ちらほら出る二月

熊本県 立道 善太郎

合わす掌の中にわたしの生きる道

不治の身も妻の副え木で八十路坂

生きて来た形見は弥陀の句碑二つ

出雲市 川島 和歌子

長い髪バツサリ切つて受験する

赴任地で熱燗吞んで酔う屋台

意見にも十人十色の口開く

兵庫県 植村 雄太郎

三寒を知らず日向の梅が咲く

性悪でじんわり攻めて来る余病

状態の変化で遺書を保留する

島根県 松本 聖子

深呼吸朝の空気の美味しいこと

目が覚めて病夫と子供と孫のこと

七十路まだまだ強い風当り

鳥取県 山内 芳江

貸した金とんと忘れて惚け始め

小銭からコツコツためている長者

晩学へゆるみ始めた捻子を巻く

新潟県 高野 不二

ごたごたも皆帳消しの金メダル

住む世界違ふか言いたい事を言う

三度三度吞んで薬がまた余る

砂川市 武田 正美

懺悔録めいて私の古日記

血圧の話で今日も暮れかかる

天秤に合せる腰が重くなる

兵庫 北川 とみ子

古里の母の声するソバ枕

嫁姑翔んで夕餉はチン料理

野仏にお願いがあるにぎりめし

和歌山 松本 良

隠しても身体が本音言うてくる

身体張る男だんだんいなくなる

溜まる膿こころで日本荒療治

和歌山 中後 清史

しらを切ることを五歳はもう覚え

ほどほどの幸せでよし独り酒

汗知らぬ金は倫理をわきまえず

鳥取 福田 登美

春うらら弾んだ声を呑む砂丘

新鮮な若さが戻る好奇心

転居先是非立ち寄れを信じたい

東大阪 今岡 貞人

年齢は忘れましたと言うやる気

職人の目が職人の仕事する

一芸を生きぬくプロのど根性

(先月分) 大阪 榎本 洋子

父在ればもつと幸せあったかも

秋空に古代ロマン朱雀門

マンションの谷間の木々に秋をみる

和歌山 上地 登美代

春風といっしょに歩くニースーツ

菜園の人参小指ほどで抜き

バーゲンで買った同じの服が来る

滋賀 中 宗明

雪道の滑るスリルに汗をかき

ダイエットしながら太る因果な身

虎の子を都銀は不安郵貯する

横浜 荒井 広和

後手後手になると本音も愚痴にされ

合理化を称え断ち切る蜘蛛の糸

偽善者の顔で介護の金騙す

倉吉 山本 玲子

国訛り消えて古里遠くなる

かけ忘れた胸の釦が不用心

庭箒わたし好みの癖がつく

兵庫 谷田 多美子

じんわりと指の疼きよ終い風呂

金メダル大きく光る車椅子

梅の花挿して帰ったランドセル

横浜 福田 由美子

ただいまの声を合図に魚焼く

教育費 背広も父もくたびれる

真っ先に母が綻び見つけだし

横浜市 三村 八重子

ポケットに噂の種火持ち歩く

賞でる間もなく雪化粧掻かされる

春一番土もわたしもせかされる

香川県 神保 坊太郎

参観の日の母さんは別な顔

守りをするおとき嘶が寝て終い

投票箱政治不信を入れてくる

八尾市 奥田 明

久しぶり胸にぐざりと妻の愚痴

貸した金返せというとなぜ呪む

風邪引きの最後は妻が締めくくり

堺市 矢倉 五月

手に馴染みすし屋の湯呑もろて来た

孫あやすどこからそんな声が出る

同病と聞いて一氣に垣根取れ

吹田市 野下 之男

ペン先が言う事聞かんラブレター

母だけが父のペン字を解読し

MOF担も株も知らずに生きており

三重県 佐々木 森哉

爛酒を亡父にも酌いで話し掛け

終身刑鎖の先を握る妻

窓開けて月の意見も訊いてみる

兵庫県 西山 八重子

転んでも父さんと呼ぶ杖がある

言い勝って見ても嵐が吹くばかり

斬られても又起き上がる影法師

沖縄県 杉谷 カズエ

退院を待つ食卓の指定席

次つぎと財布を買って溜まらない

大き過ぎうれし恥ずかしにぎり飯

和歌山市 福重 美子

門外不出縋帯巻いて渡来する

土産より嵩高ごみを持ち帰り

振り返るゆとりを持たぬ若い道

尼崎市 野瀬 昌子

一日をフルに動いてよく眠る

日だまりで近所サミットしています

台所一日みがく菜種梅雨

河内長野市 印藤 智子

老妻も定年宣言したいなあ

この齡でちゃん付けで呼ぶ友がいる

堂々と老いもジープンペアルック

大阪狭山市 伊藤 尚子

十指みな器用に動くゆび人形

無器用で随分損をしています

南々東の玄海灘を恵方とし

和歌山県 村中悦男

試食する私が漬けた塩加減

医師の顔先にうかがうレントゲン

売却済みに欲しい気持が倍になる

川崎市 和泉 見早子

恋をしたらしい雪達磨が瘦せる

嬉しい日ふらり花屋に足が向き

お喋りがいの一番に駆けつける

大阪市 鈴木 トヨ子

遠慮して出した意見に拍手され

姑が泣かせた嫁に詫びて喜寿

正月の楽しさ残す路地の町

北九州市 岡田 幸生

春序曲妻の知らない還付金

リストラの風に揺れてる春の首

男用エプロン買えと妻が言う

横浜市 布山 嘉信

定めとは儚いものか会者定離

狭い町にも増えて来た貸店舗

朝帰り猫も疲れた顔をして

熊本県 増田 一乗

雛節句母子装う晴れ姿

欠席に安否気遣う月例会

春はそこ阿蘇の野焼き空焦がし

豊中市 みき わきみ

公金を治外法権のつもりらし

花の名を妻に教わる日々となり

せめてもの贅沢輸入の煙草吸う

今治市 村上 久美子

忘れかけたものも芽をふく菜種梅雨

芋虫も未来は蝶になる野望

手鏡を覗けば亡母が其処に居る

松江市 松浦 登志子

夫婦別姓欲しい物だけ追いかける

ひと言が多い母連れ遍路道

弱虫の仮面かぶった妻がいる

倉吉市 大下 智子

昨今のゴミは焼かれぬダイオキシン

酌みかわす酒に本音がみえかくれ

授業中君と呼ばれて目がさめた

羽曳野市 川口 信子

仏壇のお経に孫がついて来る

コマーシャル一足早い春にする

春の風恋の道草したくなり

和歌山市 岡本 八重子

仏壇を磨いて母の五十回忌

二世から来たカセットは紀州弁

暗い世にメダルで湧かす日本勢

上天気なぜか心がうそさむい
梅の香がほんのりにおうおぼろ月
八尾市 山本 宏

山寺の歴史知ってる木の火鉢
春うららレンゲ畑で寝てみたい
交野市 山川 日出子

蒲公英を摘んだ思い出なつかしむ
首に鈴義理と人情板挟み
千葉県 大川 晩翠

家毀ち迷惑知らぬ駄菓子箱
米寿まで天寿がほしい花便り
東大阪市 松山 隆

ペン先もいふことときかぬ筆無精
峠茶屋甘酒たのみ雨模様
兵庫県 井上 信子

少年の直っ直ぐな視線純度一〇〇
趣味ひとつ私を活かす小半日
大阪市 三浦 千津子

道草を食うてよろろ生きている
ライバルが大きな歩幅でやってくる
倉敷市 家守 政子

曲る背の老いに一徹曲げられず
貰うものもらう妻から風邪もらう
大阪市 尾崎 黄紅

お茶ばかり飲んで糸口見つからぬ
骨のある男だ拍手してやろう
愛媛県 中居 善信

冬これで終りですよと雛の雪
洋花を活け華やかな大伽藍
横浜市 豊田 羊子

息子逝き嫁との距離が近くなり
近すぎて話足りない男孫
静岡市 中西 雅

一抹の淋しさ消えず北帰行
淡々と癌病棟やひなまつり
米子市 林 風子

別々の道を歩んで一つ屋根
別々で夫婦活躍よくかせぎ
鳥取県 藤山 弘子

買ったての帽子飛ばして春風
どくだみの花咲く故郷手をつなぎ
宝塚市 飯西 ミサヲ

これからを位置づけさせたフルムーン
赤飯の小豆微笑む初節句
鳥取市 富山 雄幸

誕生日子達の祝辞心待ち
引越しの荷ほど持ち込む里帰り
鳥取市 山本 崇

あじさいの新芽ぬくぬく春の雨
尼崎市 古川 正子

障子あけ猫の入り来る春の風

羽曳野市 山本 たけし

神仏の加護あり今日のある余生

あれ嫌いこれも好かぬと張る虚栄

横浜市 北沢 街湖

税務署は手落ちでしたと税を取り

淋しいは言うまい人はたと居る

兵庫県 大谷 幸次郎

肩書きの消えた名刺が羽伸ばす

ふてた顔花粉症かと尋ねられ

鳥取市 森本 和子

ユーターンの子 父は黙って酒を注ぐ

名護沖は変身しても基地ですね

横浜市 保田 絹子

かすれ音のドーナツ盤に在るロマン

弥次馬の一語に絵筆軽くなり

八尾市 井尻 民子

前歴を誇るでもなく庭師さん

人生にりハーサルなし向きあおう

徳島県 安宅 美代子

悪口も聞いて心の糧にする

辞書にない言葉の角を母がとり

僕たちに理屈は無用髪染める
床下の褻の銀行たしかです

大阪府 奥野 義夫
香川県 松村 輝夫

他人でも手の温もりは伝われり

どん底にも救いの主が鎮座する

尼崎市 河津 正治

嫌われることは承知の愚痴が増え

会釈して思い出せない顔と会う

寝屋川市 井上 すみれ

戻り寒隣の咳が眠らせず

呼び声が聞こえなんだり聞こえたり

鳥取県 高尾 京

感動のパラリンピック世界の輪

障害をメダルの奥に秘めて咲く

出雲市 加藤 スズコ

日の丸を掲げて空気のうまい朝

北帰行今年も亡夫の眠る地に

泉佐野市 大工 静子

豪邸で住むより気の合う友ほしい

飛行機で見知らぬ方に見染められ

唐津市 岩崎 實

基本型ふまえた技の美しき

うすくなる影を背負って過疎の村

河内長野市 水滴も旅も夫婦で喜寿と古稀
水谷 笙子
風邪治るビールお酒も元の味

兵庫県 中野 とよ子

お揃いの服で見分けのつかぬ孫
添え書きに残る思いの二三行

福岡県 本田 忠男

柿剪定 秋の実りの絵を画いて
真夜中の終停一人バス降りる

岡山県 国米 きくゑ

どの角度からも絵になる母の影
不器用に生きぬく父のうすい影

和歌山県 中村 君枝

ねんねこでスキンスリップの老いの肩
生き甲斐の小言に妻の目が光る

吹田市 有田 加寿老

なんばでも時間おますと尻を据え
人の無事祈る寒夜の北斗星

東京都 清原 悦子

再会をしたら昔の夢消され
アリスさんの行方見ている待ち時間

島根県 福岡 博利

なるようになれと昼寝の猫の足
歳だけは亡父を三つも越えたけど

鳥取市 猫舌の課長にあつい茶を入れる
森 明美
俄か雨やむ時までのティータイム

岸和田市 井伊 吉三

官僚は世界の日本を忘れてる
旅プラン調べに余念無い女房

島根県 武島 ちよえ

午前二時顔に蓋したままの本
ささやかな贅に風呂場の湯が溢れ

島根県 菅田 かつ子

立ち直るからと一杯飲んで去に
乱暴な言葉がすこし照れている

鳥取県 橋谷 静江

もう少し残ったファイト捻子を巻く
愚痴聞いてくれる夫がそばにいる

出雲市 岡 あきら

なぜ荒む丸い地球に生きていて
一差しの花が迎える過疎の駅

鳥取市 山本 益子

寒い冬しつかり食べて風邪に勝つ
酔えば直ぐ同期の桜歌う老い

豊中市 岸田 知香子

慣れ切った三寒四温春を待つ
腰痛に年を感じる昨日今日

横浜市 秋元和可
コーヒーは冷めて話に熱が入り
定年がせつせと布団干している

和歌山市 武本碧
堪忍袋の口はゆる目に締めておく
平静を装う胸が荒れている

尼崎市 小川富江
梅満開きいてついでの寺まいり
回復の二字をもううて窓全開

藤井寺市 岸本寿代
夕食に春を感じる木の芽あえ
散歩道ジョンと飛び出す雨蛙

枚方市 大昇隆広
同僚に長の肩書き増える春
夜が更けた駅のホームに今日の風

大阪市 中井正秀
行かんから一度遊びに来いと言う
めざましが鳴ってますよと起こされる

大阪市 星野ひさ
甘い夢みたくて花の種を蒔く
ローカル線昔むかしのにおいする

富田林市 中井アキ
頑張らんでいいよと息子やさしすぎ
やさしさの石はひとつで足りている

鳥取市 宮脇道子
雀の子案山子の肩でやすんでる
鍋の中豆が威張って煮られている

大阪府 井上千代子
楽しみの旅もすねばん駄々をこね
低金利お札タンスで居候

愛媛県 宮本末子
啓蟄の土ふんわりと盛り上がる
三月の頼り満期の保険金

羽曳野市 三好専平
ムキになる相手をそらすほめ言葉
ぼちぼちと歩いていればいつか着く

森田四三郎
自販機にお札の皺を咎められ
札束に良心まで売る天下り

八尾市 高橋明子
今しがた泳いだ魚 鍋料理
落ちるなよ重なり合って雀の子

静岡市 増田扶美
反抗期父との距離を遠くする
鳴る鐘が世界平和と長野から

兵庫県 高見未野
下水無ききれいな小川歌ってる
雨上がり牡丹芍薬 春の音

(国森武子・尾宮弘治・谷岡清子・半澤無眼子四氏の句は49ページに掲載してあります)

水煙抄

秀句鑑賞

—4月号から

時 広 一 路

笑つてるところが古稀の五十肩

太 西 文 次

四十代から六十代の人になり易い五十肩を古稀になつてなれたとは、若いと冷やかされても本人にとっては痛くて大変です。笑つてるところではないでしょう。半年余りで痛みも止るでしょうからそれまで我慢我慢。

桃好きの夫に供える固い桃

藤 田 泰 子

傷み易い桃を一日でも長くお供えしたい泰子さん。固い桃にお気持ちがとてもよく出ています。

プレゼント嫁のやさしい蝶結び

野 村 清 美

本当に優しいお嫁さんですね。母の日・誕生日等今までも、そしてこれからお嫁さんからの贈り物が続くことでしょう。蝶結びにそれが窺えます。幸福ですね。

御希望に予算と見栄をくすぐられ

一 本 勇 太

買物に行き店員さんに案内されると予算と見栄の秤が揺れ動いて仲々決めかねるものです。先に予算を言っておくのも一つのやり方ですよ。くすぐられが効いています。

宙に浮く丸い地球を見てみたい

北 村 賢 子

ぼっかりと宇宙に浮いている青い地球を宇宙船から見たいという夢はどなたでも持っていることでしょう。二十一世紀になれば宇宙旅行のツアーがあるかも知れませんか。

酒一升ほどの相談なら乗ろう

桑 名 孝 雄

一合の酒一合のように飲み

藤 田 芳 郎

酒一句。前者は清酒一本提げて来る程度の軽い相談なら受けましようと言ひ、後者は制限をされての一合なのではないか。どちらも気持ちがよく分かります。

一本のフィルム孫を閉じこめる

内 田 美 也 子

まだ幼い可愛いお孫さんなのではないか。フィルム一本みんな撮っても撮り足りない美也子さんのお祖母さん振りが目に見えるようです。閉じこめるに思いが込められています。

人見知りすればどんなに楽だろう

亀 井 円 女

幼児のする人見知りには誰も腹を立てません。大人の世界でそれが出来たらと思うのは円女さんだけでしょうか。

これも愛 塩も砂糖も減らされる

村 上 久 美 子

生活習慣病を友とする身になると、塩も砂糖も制限されるようになります。本人には辛いことだけれど、これも長生きをして貰いたいという愛情なのでしょう。

ねんきんが生きているかと問い合わせ

神 保 坊 太 郎

年金受給者は年一度生きているということを実況届で申告せねばなりません。送られて来る現況届の用紙。正に問い合わせですね。弓に矢をつがえて的のない男

與 田 明

七人の敵との戦を終えて老後の平和な生活に入ると、何か物足りなくなつて敵はいなくても矢をつがえてみたくなることではないか。

へそくりが出来てころころ良く笑う

森 明 美

何とも楽しい句ですね。へそくりが出来て心に余裕が出来ると人間明るくなるもので、ころころにとっても楽しい心が窺えます。

渺湖抄

八木千代選

有り様を言えば開いてゆく辛夷

首の皮一枚残しさくら散る

半眼の睫の下にある自由

ご飯粒ばろばろ人格もこぼす

改札ぬける背筋に重いものがある

指示された範囲で泳がねば金魚

吊るしたらぼたりぼたりと私の悔い

悪くない居心地 孵化せぬ卵たち

太陽さんを無一文でいただく

喪主の席これが最後の妻の役

死者たちをいっぱい乗せてほうき星

春愁の惹きざむとき世に遠し

咲ききれば桜にながいがいながい闇

春キャベツちよっとおどけてみたくなる

山脈の彼方に消えるのも手品

下手でいい いや下手がいい一途です

石橋を叩けば戻ることになる

残雪のところどころが美しい

さてなにを家から捨てる老い支度

大事な人から大事なハガキ 星月夜

西宮市 牧淵富喜子

羽曳野市 田中 透太

鳥取県 岩崎みさ江

米子市 政岡日枝子

同

富田林市 池 森子

寝屋川市 森 茜

大宮市 新井 朋子

鳥取県 乾 隆風

和歌山市 桜井 千秀

鳥取県 新家 完司

和歌山市 木本 朱夏

米子市 青戸 田鶴

東京都 佐藤 季頼

岡山県 小林 妻子

唐津市 井上 勝祝

横浜市 秋元 和可

鳥取県 鈴木 公弘

尼崎市 春城 年代

吹田市 山本希久子

他人だと思つてからはよく食べる
仏壇にその後を入れる箱がある
雑草と話すとき時も長くなる

いろいろとあつてみたがネズミにはねずみ

うた詠みのマントの中は時化している

棘のないバラに復讐出来ますか

照準をビタリ合わせて病んでいる

復元の朱塗り鮮やかすぎないか

明日も又 叩いてみよう古時計

人去つて岬の風のどつと吹く

振り乱す髪はカツラかも知れぬ

如月の喜劇をひとつ演じよう

ラッパ水仙なんだか嘘がありそうな

逢魔が時 さくらのかげに何かいる

光るもの持つてどの子も家を出る

くじけそうだから温もりなど要らぬ

平均余命だれも保証をしてくれぬ

背伸びした首から上の風当り

老いるとは哀しきものよ花むくろ

錆ついたホルトの強さ本物だ

その時はたのしい舟を予約する

生煮えの言葉で喉をまだ越さぬ

歯が痛い さては二月のチョコレート

いつまでも酔つてはおれぬ顔洗う

引出しに小道具そろふ嘘摘う

空き缶を拾うと風が吹いてくる

松原市 小池しげお

鳥取県 土橋 睦子

米子市 木村富美子

堺市 志田 千代

和歌山市 古久保和子

美祿市 安平次弘道

和歌山市 川上 大輪

海南市 三宅 保州

富田林市 片岡智恵子

和歌山市 野々 圭子

和歌山県 坂東 和代

鳥取県 土橋 螢

鳥取市 坂田和歌子

西宮市 奥田みつ子

米子市 鷺見 正子

八王子市 播本 充子

豊中市 田中 正坊

和歌山市 福本 英子

羽曳野市 吉川 寿美

尼崎市 春城武庫坊

米子市 茂理 高代

岡山県 山本 玉恵

和歌山市 川上 富湖

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 福井 桂香

愛媛県 中居 善信

美味しいのと別に我が家の味がある
 取りあえず手を洗うまで待ちなさい
 てのひらに受けた情けはこぼさない
 どれほどのこともない日か晴れわたり
 ゴールには正解がある散歩道
 いろいろに化けていちにち過ぎていく
 仏壇のマツチが役に立っている
 猫のように髭を落とすと歩けない
 背伸びして命ちめることもなし
 リビングは暗くそれぞれ部屋にいる
 万物の目覚めまごまごしておれぬ
 悪人の出ないドラマはつまらない
 借金を大事に使うかたつむり
 金魚掬う二匹目傍がやかましい
 目の中に鱗が出来たコンタクト
 感情線少し低めにセットする
 満月に淋しい影を持つ女
 対岸から見えていた頃の赤い花
 種袋 中に謀反の種もあり
 不器用に生きて作った瘤の数
 上向きに咲けない百合の不仕合せ
 公園は濡れて一人も居ぬ暗さ
 捨てられてこころ残りの紙コップ
 キヤッチホン何時もわたしが待たされる
 番外にいつも私の影がある
 どん底は見えたが頂点まだ見えぬ

横濱市	菱田	満秋
鳥取県	土橋はるお	
倉敷市	田辺	炎六
米子市	白根	ふみ
富田林市	藤田	泰子
八尾市	村上ミツ子	
大阪府	神夏磯典子	
唐津市	田口	虹汀
西宮市	西口いわゑ	
横浜市	豊田	羊子
弘前市	斉藤	岳
吹田市	石原	靖巳
米子市	門脇	晶子
八尾市	吉村	一風
海南市	谷口	義男
高槻市	乙倉	武史
倉敷市	小野	克枝
綾部市	藤田	芳郎
寝屋川市	井上すみれ	
唐津市	市丸	晴翠
今治市	渡邊伊津志	
出雲市	板垣	夢酔
米子市	光井	玲子
今治市	村上久美子	
和歌山市	武本	碧
和歌山市	堀畑	靖子

潮が引く海が溜め息するように
 聞き下手の愚痴からボタンはずされる
 黄昏れる五感へ花を替えてみる
 春を待ったのしみもなくはるになる
 線引きの内か外かの運を待つ
 健康食あれこれつまり自分流
 平熱になっても甘え直らない
 生きている価値は何かとふと思う
 道化師が受ける花束だつてある
 花衣脱いでわが身の置きどころ
 結論はさておき今日のにぎりめし
 あかね雲その日誘導たのみます
 医療費明細ともに払えば恐い額
 ラマーズ法までは確かに愛だつた
 それぞれの人生がある窓明かり
 風の音樹の音生きる水の音
 投函の今日は沈丁香る道
 伸びきったゴム取替える陽溜まりで
 極楽を探しあぐねた旅づかれ
 ゴキブリが識るわたくしの凄顔
 思い出の枕わたしの笹小舟
 集団の薔ぐんぐんシクラメン
 いっだって外野にすわるほうが良い
 人形の目 確かにこわいときがある
 猫柳わたしの恋を真似ている
 本丸で場所を譲らぬ老桜

鳥取市	岸本	宏章
兵庫県	北川とみ子	
唐津市	久保	正剣
西宮市	門谷たず子	
兵庫県	大谷幸次郎	
大阪府	渡部さと美	
富田林市	中井	アキ
大阪府	大森	年子
大阪府	一本	勇太
弘前市	高橋	岳水
寝屋川市	籠島	恵子
米子市	野坂	なみ
八尾市	高杉	千歩
尼崎市	長浜	澄子
高槻市	川島諷云児	
日立市	加藤	権悟
寝屋川市	堀江	光子
和歌山市	上地	忍
大阪府	板東	倫子
岡山県	富坂	志重
和歌山市	山根めぐみ	
大阪府	津守	柳伸
大阪府	立蔵	信子
大阪市	榊本	路児
松江市	川本	畔
弘前市	中山	雅城

捨てられたごみが賑やか過ぎないか
 何時もの女がいつもの処で立話
 少年のころは忘れていた大人
 顔だけが仕上がつっている楽屋部屋
 樹の精が翁の面となつて笑む
 道草のコツをおぼえた二年生
 良くも悪くも貴女次第の処方箋
 高低の差をうめている紙ネンド
 良心と邪心がいつも譲らない
 雪吊りを解いて背伸びをさせてやる
 にんまりと敵の尻尾を掴んでる
 専門で負けて雑学でも負ける
 食べるだけ食べて蚤は透きとおる
 菜の花の蔭から声をかける人
 中庸を選んで長話はしない
 千羽鶴 千羽に札を言えぬまま
 芥にも喜怒哀楽がつきまとう
 肝心なことはさりと書いてあり
 つむじ風吹く辻 手相見て貰う
 盆栽の桜も潔く散りました
 遅咲きのタイプ自然に身を任せ
 片目つぶって男を見れば丁度よし
 子供から親れば大人は嘘の国
 花の種母に教わる花言葉
 辻褄をやつと合させた自己欺瞞
 まあまあと丸い通りの無責任

鳥取県	西原	艶子
京都市	松川	杜的
唐津市	宗	弘
吹田市	西岡	豊
京都市	都倉	求芽
泉佐野市	稲葉	洋
大阪市	日阪	秋子
大阪市	川久保	睦子
鳥取市	谷口	次男
青森県	西谷	大吾
和歌山市	宮口	克子
鳥取市	春木圭一	郎
寝屋川市	江口	度
出雲市	園山多賀子	
神戸市	船津とみ子	
横浜市	田中	笑子
八尾市	大内	朝子
横浜市	保田	絹子
今治市	月原	宵明
出雲市	竹治ちかし	
横浜市	後藤	早智
今治市	越智	一水
和歌山市	玉置	当代
岡山県	矢内寿恵子	
川西市	松本ただし	
大阪市	本間満津子	

糸一本切れて重心定まらぬ
 ひたむきに春待つ姿勢 猫の耳
 筋書きのところが消えていた
 ときめいて先の先まで書く日記
 きっぱりと子離れをする娘糸
 昔を入れた小箱に風を入れておく
 傷癒すけものように露天風呂
 故里の桜は胸で咲き誇る
 寒椿 雨水に哀れ堕ちにけり
 お隣に負けているのはゴミの量
 石地藏ピンチだブルが唸つとる
 改装は介護者のないうちにする
 長針の小まめに短針のすばら
 追伸の謎に腕組はどけない
 途中から女になった喉仏
 ホームレスの話題もやはり花だより
 はずまない毯でも優しいのがとりえ

牧淵富喜子さんの辛夷は相変わらずスカツとしています。この冬を払い除けるようにして咲く真っ白い花に、「有り様」という古風できりつとした詞をぶつつけて、この人ならではの句姿を見せてくださいました。「有り様」には一貫した方向があり、辛夷も振動しながら花弁を弛めたのでしょうか。田中透太さんの首の皮のみつけには文句なし参りました。あの緑色の萼がさくらの首の皮だったとは。深い散りかたも匂い立つ桜いろも、皮一枚に種の存続をたくしての安心立命の旅立ちなんです。岩崎みさ江さんの自由にこだわってみました。み仏の半眼には目を開けばかならず進る炎があると考えていたからです。火柱ではなく宇宙、自由は宇宙のことですね。

枚方市	海老池	洋
弘前市	佐治千加子	
倉吉市	野口	節子
奈良県	鍛原	千里
松原市	玉置	重人
米子市	澤田	千春
河内長野市	加島	由一
藤井寺市	太田扶美代	
唐津市	山門	幸夫
尼崎市	田辺	鹿太
鳥取市	武田	帆雀
横浜市	山梨	雅子
大山市	早川	盛夫
倉敷市	家守	政子
大阪府	澤田	和重
枚方市	前	たもつ
倉敷市	井上	富子

「国際化粧品文化研究会」主催

KESHOU

第1回

SENRYU

化粧品川柳募集

- ◆作品 「化粧」をモチーフとした作品なら何でも可
3句一組、何組でも可、但し、他の大会・柳誌への二重投稿は不可。
- ◆投句方法 200字詰原稿用紙に楷書で作品、ならびに住所・氏名（雅号併記）
・男女別・電話番号を明記。
- ◆投句料 一組（3句）につき1000円（入選作品集代含む）。郵便定額小為替
で投句に同封（切手不可）
- ◆投句先 〒156-0042 東京都世田谷区羽根木 1-15-3
国際化粧品文化研究会事務局 電話 03-3323-2886
- ◆締切 平成10年6月10日（水）（当日消印有効）
- ◆選者

和泉 香
IZUMI KAORI



「川柳展望」同人、
第1回オール川柳賞
新人賞受賞、「レディ
川柳'97」選者

山倉洋子
YAMAKURA YOKO



「柳都川柳」同人、
平成9年オール川柳
堂を受賞、「レディ
川柳'98」選者

◆賞

- | | | |
|--------|-----|-----------------|
| ◎大賞 | 1名 | 10万円および高級化粧品セット |
| ◎準賞 | 2名 | 各5万円および高級化粧品セット |
| ◎後援団体賞 | 10名 | 各1万円および高級化粧品セット |
| ◎協賛企業賞 | 30名 | 各化粧品セット |

◆発表 平成10年7月20日（月）投句者全員に入選作品集を送付。

主催 国際化粧品文化研究会（代表 田中 仁）
後援 全国化粧品小売組合連合会
葉文館出版（株） 川柳展望社 柳都川柳社

苗香のむ

宮西弥生 選

炎の橋を渡り終えると駅に着く

花が散るブライドひとつずつする

生きすぎてお地蔵さまの顔になり

結び目をゆるくしておく母がいる

クレヨン折れて彩が足りない世紀末

いずれ散る美学を桜から貰う

老眼鏡だんだん狭くなる視界

鏡見ぬ一日でした悲報です

不幸とは思わずスマレ庭の隅

夕焼けの空を無口に窓を拭く

生きるとは悲しい時にする笑顔

生まれた記憶ないけどその後の愛がある

ぬくご飯あればキレイたりするだろうか

目の高さ替えて心に見えるもの

真向かえば意外と風が柔らかい

こだわりの中で打たれた句読点

許容量溢れ笑顔で居られない

春の色着て空っぽを埋めている

風邪の神うちも素通りしてくれぬ

倉敷市 小野 克枝
岡山県 矢内寿恵子
今治市 野村 京子
横浜市 近藤 道子
米子市 政岡日枝子
西宮市 門谷たず子
富田林市 藤田 泰子
寝屋川市 井上すみれ
西宮市 奥田みつ子
鳥取県 土橋 睦子
大阪市 稲本 凡子
岡山市 川端 柳子
羽曳野市 徳山みつこ
横浜市 保田 絹子
藤井寺市 高田美代子
吹田市 山本希久子
和歌山市 川上 富湖
西宮市 牧渕富喜子
和歌山市 福本 英子

少しだけ幸せ下さい花の種
はげましは嫌同情はもつと嫌
おもいでを手繰り出てきたのは埃
うまが合うそれだけではないよい出会い
喧嘩ではありません会議中です
窓閉めた閉めない外出先のワツ
千手観音あなたも爪を染めますか
懐かしい時間を食べる桜餅
曼陀羅の世界わたしに派手すぎる
淋しいと言えずピエロを演じます
ひとりぼっちと言わずフリーと言ってみる
横糸のゆるみに母の温かさ
ごめんねが言えたらきつと楽になる
走れない絵馬をゆらせて春の風
少年の心に親も師も住まぬ
賑やかな商店街でみな他人
ひと花を咲かせる道へ迷うまい
余罪微罪ポケットにあり日々楽し
石同土何をささやく河川敷
春の沙汰郵便箱もときめきぬ
七桁のゆくえ不安な一番地
聞き上手リンゴを長くながくむく
生きて行くピエロの役も演じつつ
レモンティー噂話はなお嫌い
つまずきは釘ひとつの掛け違い

奈良県 鍛原 千里
富田林市 中井 アキ
今治市 村上久美子
寝屋川市 森 茜
大阪市 神夏磯典子
寝屋川市 平松かすみ
倉敷市 井上 富子
和歌山市 木本 朱夏
横浜市 清水 潮華
箕面市 出口セツ子
藤井寺市 太田扶美代
鳥取県 岩崎みさ江
鳥取県 西原 艶子
羽曳野市 吉川 寿美
大阪市 板東 倫子
大阪市 本間満津子
八尾市 大内 朝子
尼崎市 長浜 澄子
西宮市 西口いわゑ
八尾市 高橋 夕花
和歌山市 楠見 章子
八尾市 生嶋ますみ
倉吉市 野口 節子
和歌山市 福井 桂香
池田市 栗田 久子

はんなりと春を包んである封書
保護色になって生きよう楽だから
堪忍の袋がしばむ平和な日

ぬくもりがただ欲しくて手をつなぐ
マイナスがあつてプラス活きてくる
ブローチに欲しい翡翠の雨蛙

喝采に溺れてならぬ水中花

心開いた子の絵日記のばらの花

突然に切れる隣の普通の子

そこかしこ芽がもつさりとコミカルだ

外面がよくてストレスたまります

サイレンのたびガス栓に目が走る

つくしんば顔が出せない護岸土手

四捨五入すると楽しくなる余生

ライバルが菩薩の仮面つけている

寝たきりにさせてはならぬ車椅子

大八に蓮華を積んだ昔です

生かされて生きて二合の米洗う

さよならを重ねた泪あつたかい

三年目座った石に飽きてくる

緑たつ頃と題して筆をおく

賑やかな九人家族のフライパン

こんな伯母だったと言われたい背のび

損得に触れぬ身軽な独り者

耳打ちをすれば形が崩れそう

尼崎市 春城 年代

和歌山市 上地登美代

米子市 小塩智加恵

愛媛県 黒田 茂代

八尾市 村上ミツ子

米子市 林 瑞枝

出雲市 園山多賀子

熊本市 永田 俊子

米子市 驚見 正子

松江市 安食 友子

和歌山市 堀畑 靖子

横浜市 豊田 羊子

横浜市 三村八重子

和歌山市 和田美寿子

東大阪市 北村 賢子

鳥取県 西川 和子

鳥取市 坂田和歌子

神戸市 船津とみ子

弘前市 佐治千加子

横浜市 鈴江 純子

八尾市 高杉 千歩

倉敷市 家守 政子

寝屋川市 籠島 恵子

大阪市 津守 柳伸

和歌山市 吉村さち子

塀越えた毬がだんだん自己主張

四面楚歌嵐やむまで帆をたたむ

女湯に隠す作法もあります

神様との約束で引く線がある

流星のこと宇宙の塵と言うけれど

想い出を繰ればゆきつく母の背な

陽も土の恵みも知らぬ水中花

手ぬかりを小指の傷に責められる

明日のことはあすにしよう花だより

産声強し地球へのメッセージ

目的に向かうリズムは狂わない

四方山の話がしたいこけしたち

米子市 光井 玲子

岡山県 大石あすなろ

堺市 志田 千代

和歌山市 榎原 公子

大阪市 町田 達子

鳥取県 植田 一京

今治市 野村 清美

米子市 木村富美子

今治市 中村 好恵

芦屋市 黒田 能子

貝塚市 池田寿美子

寝屋川市 太田とし子

克枝さんの句―作者の平和なこの頃の生活にも、遠い昔はい

くつかもあつたであろう、炎の橋というものが。人生「七転び

八起き」それも若さは有難いもの、解決してくれました。それ

も川柳と氣力とでも言うのだろうか。流石に女は強くたくま

しいです。寿恵子さんの句―厳しい冬を耐えた花ほど美しいと

いう。やがて芽吹きへ花は威儀を正す。花は花なりに自負とプ

ライドを守り、花の命の短さを悟っている。栄耀榮華に溺れず

いさぎよく散る様は私達人間も大いに学ばねばならない。表現

が素直で後味がよい句である。京子さんの句―生き過ぎて、と

んでもないこと。罫りの存在を肥やしとして生きるとこんな優

しいお地藏さんの顔になるのです。道子さんの句―結び目をゆ

るく、作者の優しい真情あふれた心に魅せられる。何時までも

母は生きてほしいと思う心からの氣持がよく出ている。

家

酒井 輝選



家中を仕切っています僕のネコ
軒々と借家墓だけ建てておく
新しい家子の部屋に鍵がある
軒低う住んで離さぬ伊勢こよみ
家ぐるみ暮しの知恵をつぎ合わせ
近くまで来て寄られると困る家
我が家にも妻が手腕の薄外処理
転居するたび表札が小さくなり
生き下手で建て替え出来ぬうさぎ小屋
散らかした他所の家見てホッとす
二世帯の二階か下でもめ始め
本家への火花は他人には見せぬ
立ち退かぬ家一軒という反旗
家の中垣間見られるアンケート
家柄の良さが育ちに見えかくれ
虎の子がわが家で眠るビッグバン
迷わずに子供の帰る家がある
夜遊びの歩幅小さくなる家路
三代目家訓半分ほど崩れ
金メダル母にもかける家族愛
浪人を軸にわが家のスケジュール
二世帯の愚痴が雨戸を重くする

和歌子 良 重人 寿恵子 志重 輝夫 勝視 久仁於 花匠 鉄治 雅子 雄々 伊津志 倅子 めぐみ とし子 正雄 凡々子 勝巳 岳水 潮華

時々は貧乏神も家に住む
家系図に直系の孫書き入れる
三世代住んで我慢と譲り合い
旅三日ソロソロ家の事思つ
家系図にひとり名を足す呱々の声
定年を待っててくれる里の家
子に甘い分家を覗む鬼瓦
家柄も日柄もよいがまだ独り
宅配の荷物預かるだけの家
働けば食える小さい家がある
鍵に家のローンがなっている
家事育児うまい男で頼りない
すねかじり家事手伝いは表向き
縦割りの家族を笑う炊飯器
忍耐の影薄れてる核家族
住
棟上げの日から貧乏神が住み
家風にはそわない嫁の頼もしさ
念願の城ヘローンという活気
のし袋本家の意地も詰めてある
エリートに育てて家が病んでいる
人
ログハウス森のこだまも連れて来る
地
子は別居家具が二階に住んでいる
天
工房も造り出直す家を建て
軸
子沢山暮らしの壁は子が開く
武田 帆雀

清芳 螢 登美 京子 隆広 一花 晋 四郎 宏章 叭笑 勇太 有一朗 満秋 保州 みね あずま 芳郎

こだわる

高須賀金太選



こだわりを引きずる朝の茶が冷える
王様は髭にこだわり持っている
こだわりの詰まる匠の道具箱
沖縄のこだわり軽く見てないか
こだわりの珈琲店は裏通り
こだわってみても所詮は蛙の子
糠味噌にこだわり母は旅ざらい
こだわりは消えぬ雫もまだ切れぬ
こだわりは見ればこだわり馬鹿みたい
他人から見ればこだわり馬鹿みたい
こだわって世界が小さくなってくる
こだわりの味はうまいが高つく
反感を買うこだわりのスポーツ紙
温もりでこだわり手書きする手紙
エリートにこだわるママを子が恨む
ブランドにこだわりカード破産する
勝ちだけにこだわりマナー忘れそう
こだわりは木の椅子にあるあたたかさ
こだわりの果ての孤独に責められる
こだわりを脱いで春野を闊歩する
こだわりの一品村を背負っている
九条にこだわる戦火知っている

善信 不二 杜的 日枝子 雄々 早智 次男 晋 英子 洞庵 宵明 玉恵 鉄治 晴翠 輝夫 信子 良 時弘 寿恵子

可住
扶美代
保州
大輪
ちかし

春木圭一郎選



良知
日枝子
勝巳
清美
富美子
しげお
登美
宏章
靖巳
喬水
倫子
螢
保州
隆盛
俊路

可住
扶美代
保州
大輪
ちかし
宏章
黎之助
重人
清史
岳水
あき
文時
高明
雅子
四郎

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

剛治
大輪
ますみ
良
鉄治
時弘
早智
ちかし
勇太
虹汀
睦子
めぐみ
ひで
よしみ
あやめ
次男
京子
洞庵
柳弘
志洋

夢の中Aがまだ解けぬ
無冠だが父さんエースだと思っ
先輩にABCを聞く屋台
やがてやがて端役のAに夢がある
少年の人権Aで守らせる
接待をAからZまで学ぶ

朝子
正雄
権悟
ミツ子
隆広
雄々
隆盛
俊路

朝子
典子
芳郎
まさと
順風
満秋
あずま

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

銘柄を言うて居酒屋困らせる
満秋

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

スタートは右足からと決めている
あずま

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

さッポロでないと飲まない北の女
相馬 一花

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

人間のABCはこんなにちわ
いつまでもAのままですお茶の友
A席の美人がちよっと気にかかる
腐っても鯛で寄付だけAランク
どんぶりを平らげ黙す被疑者A
契約書わたしをAで片付ける
Aに泣きAに笑った青春譜
愛情に飢えた少年Aの罪
少女A愛の割符を持ちたがり

初歩教室

題一張る

吐田公一

川柳は人間を詩う五七五だとか何回か申してありますが、ご投句の中にはややもすると、この人間（関係）が詠めていない句が目につく。

○菰かぶり胸を張ってる寒牡丹

決して情景や風物を詠んだ句が悪いというのではない。例えば

名園に小舟が一つ腐りかけ 豆秋

枝のない椰子を夕日がすべり落つ 薫風

などのように風景を詠んでも、そこに人間の情感を刺戟するような演出が構成されているとき、人はその句に大いなる感銘を受ける。

添削句

○気を張って生きておつても呆けるだろう 奴夫
全くイメージの悪い句、勤め人が気を遣って生きてきた姿を詠むとすれば——。句意は違うが

▽気を張って生きた証の回り椅子

○最終のランナーが切るテープ張る 芳水
最終のランナーがテープを切ることに特別な意味があるのだろうか。

▽ランナーを張ったテープが待つ記録

○年の暮母の仕事は障子張り 日出子

仕事とするより母の苦勞を表現すれば

▽障子張る母の手荒れる年の暮れ

○見栄を張り出した一万惜しくなり 郁子

中七がこの句のイメージを悪くしている。

▽見栄張った祝儀が惜しくなる仕打ち

○お互いに意地張り合って紐解けず てる子

下五が難解。言わんとすることは分かるが

▽意地張ってもつれはじめた二人仲

○ライバルと張り合う仲間川柳 晩翠

下四は尻切れトンボで語呂が悪い。一句作

った時何度も口の中で反芻してみること。

▽張り合った仲だがウマも合うふたり

○卒業式鏡に映す晴れ姿 忠男

「張る」の題意から外れている。

▽突つ張った子も卒業の晴れ姿

○退職で妻を相手に意地を張る 捷也

定退にこの場合ストレスを持って来る方が

構成としては面白いのではないでしょうか。

▽定退のストレス溜めた意地つ張り

○意地張った悔いと空腹抱かされる 〇八重子

意地張ってにすればよかったのでは

○一周忌心の張りも消えました 茂代

拡がりのある言葉を探そうに

▽張りつめた暮らしもなれて一周忌

○好きだと言わず会えは張り合うばかり 一典

濁点が落ちていた。選者次第で没となる。

投句前には必ず読み返すこと。また表現が

単刀直入すぎる。

▽好きだけれど逢えは意地張る恋しぐれ

○突張って親の言うことなど聞かぬ 義男

忠男さんの添削句をご参考に

○意地張って自我を通せば寒い風 てる代

自我を通す言葉が固い。また意地を張る

自我を通すで同義語

▽我を張った報いと知った寒い風

○意地を張る心に隙間風が吹く 久子

原句の方に軍配だな。

▽隙間風吹けどなおらぬ意地つ張り

○超スピードお巡りさんが張っている 玲子

着想はユニークだが、措辞に問題

▽スピード出すコースへ張っているボリス

○嫁の家気を張ってくる送りのもの 静子

実家とした方が分かり易いと思う。

▽気を張った嫁の実家の贈り物

○ひみつなど作らぬ我家はガラス張り ミツオ

はあってもなくても意味が通じる。この

一字で中八となりリズムが悪くなっている。

○張りつめた受験に母は願かける 登美

説明句に近い。母親が子のために願をかけるのは当然。むしろ家中の張りつめた気持を詠むといひのでは

▽家中が気を張りつめた子の受験

○年金にたしなめられて見栄っ張り 利徳
たしなめられたとすればよかったのでは

▽見栄張って見たが年金追いつけず

○慶弔に見栄張る気持包んでる 智加恵
単なる説明に終つてゐる。

▽本家から見栄張つてきたのし袋

○張るちらし目で追つかける流れ雲 タツエ
下五が前句から遊離している。

▽ちらし張りその日の特価追いかける

○かくれみのカーテン張って息を呑み 美恵子
時事吟とすれば

▽カーテンを張ってキャリアは息を呑み

○意地っ張りはめられてまた淋しいな トヨ子
中七以後がいま一つ

▽家中が認める祖母の意地っ張り

○見栄を張り年甲斐もなく照れる顔 宗明
突込みが不足

▽見栄張つたつもりがドジを踏んだ悔い

○共白髪気を張るほどの歳でない 隆
訴えよつとする内容が乏しい。

▽気を張つて暮らし支えた共白髪

○禁酒禁煙張つた書き初め三日まで 数彦

添刺句も下六で語呂が悪いが

▽張り紙の禁酒が笑う三日坊主

○意地張つた背中にごめん言わせてる サト子
下八音字の表現が粗雑。

▽意地張つた背中が詫びている夫

○意地っ張り財布の底を考えろ 武治
下五の表現がよろしくない。

▽意地張つてみても財布の底が見え

○言い張つて見てもやっぱり親子です 西八重子
この句も下五がやや安易

▽言い張つてみてもやっぱり親が折れ

○張りつめた気持をはぐす花手入れ 俊二
次の美也子さんの句と同想。視点を變えて

▽張りつめた気持はぐれた合格日

○張りつめた空気がなごむ花一輪 美也子
見付けが両者共甘いと言わざるを得ない。

句会だと同想没句となる運命

▽張りつめた空気がなごませる

○見栄張つたあとの勘定高つき 君江
君江さんにしては今度の出来は今一つ。体調のよしあしはありますが頑張って

▽見栄張つた勘定書に残る悔い

○胸張つて大人の仲間成人式 トキ
成人式―大人の仲間入りで同義語

▽胸張つた成人式の孫の顔

○張り替えた障子で法事つとめられ 富江
句の中に人間が詠まれていない。

▽亡母がしたように法事へ障子張り

○意地張る児尻叩きつつ期待かけ 輝夫
中七の表現がまずい。

▽意地っ張りへ期待をかける親のエゴ

佳句

モンタージュ角張る顔が友に似て 哲平
張りつめた空気がふるわすアンコール

ボスター張るホーム明るく花だより トシエ
政と官張り倒したい思いきり

肩張つて越えた幾坂ふり返り よし子
張り子の虎景気直せと首を振り

春の宵気張つて妻とディナーショウ 明美
綱を張るその日夢見てチャンコ鍋

欲張つた皿に恥入る食べ残し 弘子
胸張つて歩けば二歳若くなる

張りつめた糸も弛んだ子の巣立ち 寿代
胸張つて歩けば二歳若くなる

肩書のついた名刺が胸を張り 信子
アンテナを張りめぐらせて噂好き

外国へ見栄を張つてゐる火の車 幸子
張切つたジャンプに風が味方する

張りつめた気力で翔んだ金メダル 政子
口下手の背中が詫びる夫の意地

口下手の背中が詫びる夫の意地 幸枝
私の句

頂上を目指し最後のテント張る

本社
四月句会

四月七日(火)午後五時半

ア
ウ
イ
ー
ナ
大
阪

散りはじめた沿線の桜を眺めながら、暮れ
そうで暮れぬ春の夕、会場のホテルアウイ
ナに着く。九十六名の出席により四月旬会は
賑やかに定刻開催された。

お話は、ようやく雅号洞庵にふさわしい年齢になったと述懐する八十田洞庵氏。

盟友の名前でもない歳となり
洞庵

トシネルを抜けるとそこは和歌山という大阪府岬町に住む氏は南海電鉄勤務の後、岬町教育委員を十三年つとめた経緯から、小中学生の間に川柳を普及したい熱意に燃え、主宰する岬川柳会五周年記念の「川柳公開講座」（五月十七日）にジュニア川柳の募集、発表を計画していると言う。

初出席に大阪市の鶴田哲郎氏、東大阪市の西村梨里さん、北村賢子さんを迎える。

月間賞は、藤井寺市の太田扶美代さんに輝く。

(記名—月子・いわゑ)

(受付—たもつ・寿美子・かすみ)

席題 「たくさん」
川上富湖選

たくさんの祝辞別れるではないぞのし袋たたくさん買っておく絆金はないけれどたたくさん友がいるつつがない暮し沢山恩がある一枚の舌をたたくさん使ひ分け書くことがたたくさん春の日記帳ぬくい言葉たたくさん持つて逢いにゆくどれがどう効くのか仰山葉くれ腹の虫沢山不服持っているたたくさんの小言ばんだかしわ餅お友だち百人はしいランドセルたたくさんの薬を食べるように飲むたたくさんの箸が返す法螺の音よたたくさんの中から選んだ妻なのにとたくさんの核に囲まれてる不安たたくさん盛ってオトリになっているミカンどっち向いてもおんな女の通りぬけたくさんの地雷恨んでいる地球花まるがたたくさん弾むカレンダー檜山へ行けばたたくさん友がいる南風たたくさん花粉連れでくる一日中好きという字を書いた過去たたくさんの愛につつまれ生きている診察券をたたくさん持っている仲間傾かぬようにたたくさん釘を打っておく血をきょうさんもらい元気になりました雑魚ばかり群れると怖い戯画になる

恵子 夕花 金太 千愛 泰論 泰子 泰子 柳宏子 千梢 とし子 たもつ 稚代 哲夫 ダン吉 しげお 千歩 朝子 大輪 天笑 保州 寿美子 大輪 扶美代 月子 勇太

澄子 久しぶりとくさん言わんならんこと
克治 シマ子 ちりめんじやなくさんたなくさんいる仲間
柳弘 公約の数だけたんと裏切られ
英子 たくさん産めばきつと誰かが看てくれる

佳

楓 楽
シマ子
寿 美
茜
朝 子

カネに傾く奴だ大事は打ち明けぬ
無口な父はじつくり耳を傾ける
太陽が傾きこころ細くなる
急傾斜あんなところに家がある
時どきは鬼に傾く花の首
傾斜十度二十三十度の睡魔
急斜面残して散つた彼岸花
南無大師等傾ける花の雨

文 秋
保 州
信 子
金 太
たず 子
樹千 代
樹美 代子
女

澄子 克治子 シマ子 柳弘英子 楓楽 シマ子 寿美 朝子 セツ子 石舟 しげお 富湖 文秋 保州子 信子 金太 たず子 千代 (男) (女) 美代子

長女次女三女に傾きだした納屋
傾くと神も仏も目に入る
福寿草春に傾き薫らんか
傾いた靴が並んで家族です
反対へ一途にのめり込む若さ
朝礼の社歌もこの頃沈みがち
傾きながらゆっくり回る夫婦独楽
よく見ればビサの斜塔にある色気
傾いた国でしっかりと立っている
楽な方へ傾いてゆくのが本音
傾いて旧街道に残る家
会いたくはないパラソルを傾けて
傾いたままで人生終りそう
傾けた耳へ雑音ばかりくる
傾いてから人間がよく見える
傾いた家にもさくら咲いている
美しい暗示に傾きやすい耳
背信へ愛が傾く砂時計
球体の外で傾く蟻の列
表札が傾いてますお父さん
おぼろ夜の足は巷へ傾斜する
ときめいてころろ傾く春帽子
傾く度に深まってゆく絆
油断すると直ぐに傾きだす積み木

住

しげお 夕花 落児 柳宏子 洞庵 たず子 大輪 鬼遊 剛治 紫香 寿美子 梨里 庸佑 富湖 保子 勇太 朝子 森子 鬼遊 鹿太 朝子 扶美代 洋

手の鳴る方へ傾く軽くなった首
人
風が途絶えて傾くわたくしの祈り
地
優しさに傾いてゆく体ごと
天
傾いた地蔵へ傾いて拝み
軸
陽も月も傾きこっこして飽きず
兼題「すっかり」 宮園 射月芳選
絵蠟燭すっかり春の風景だ
成り行きをすっかり聞いて善後策
うたた寝ですっかり聞いた裏話
春の夜の寝言すっかり聞いた乱
サングラスすっかり他人にはなれぬ
春眠にすっかり羽根を奪われる
田と畑すっかり食べた三代目
思惑はすっかり敵に読まれてた
乗せられてすっかり自分置き去りに
価値観をすっかり変えた癌告知
仇名だけ覚えてすっかり名を忘れ
人柄がすっかり変る酒の量
出したものすっかり食べる客が好き
春の絵にすっかりとける旅カバン
すっかりと元氣になった退院日
父の地位すっかり軽くなった戦後
ネオンの海ですっかり妻を忘れてる
真実をすっかり言えば肌ざむい

勇太 森子 扶美代 天笑 美代子 路児 庸佑 澄子 茜 扶美代 森子 かすみ 保子 千里 楓楽 紫香 冬葉 保子 朝子 笛生 セツ子 大輪 金太

辻褄が合わずすっかりばれてくる
文句たらたらすっかり料理平げる
許す気になつてすっかり癒えた傷
老後の計画すっかり狂う低金利
すっかりその気にさせる誘い水
内臓もすっかり酒に蝕まれ
お地蔵さんすっかり春に囲まれて
シベルカーすっかり過疎をぬりかえる
地球の掟すっかり忘れ病む人科
知恵の輪がとけてすっかり春ですぬ
オカリナが狂つてすっかり森は闇
しがらみをすっかり洗い這い上がる
愛なんかすっかり冷めたまま夫婦
すっかりとその気にさせて袖にする
再会がすっかり消した思いこみ
言い分をすっかりのんだ訳でない

住

洞庵 夕花 典子 萬的 とし子 石舟 路児 ますみ 洋 弥生 久峰 梨里 弘一 庸佑 楓楽 森子 克治 朝子 洞庵 月子 大輪 月子

乗せられてすっかりピエロそのものに 射月芳

兼題「食べる」

岩佐 ダン吉 選

ライバルが目につきうなぎ特上に
初物を弁当箱に食べさせる
最終便出して駅長夜食そば
晩ご飯しっかり食べて死にました
春うらら妻はよく食べよく喋る
ビッグパンの次は食糧難だろう
朝ごはんゆっくり食べたことがない
日に三度食べる命をいとおしむ
母さんが余さず食べた残りもの
毒少し食べて言いたい事を言う
食うものも食わずに何ができますか
食べることだけは忘れぬ物忘れ
さくらさくら何より母のにぎり飯
食べてゆくのための飯面が外せない
食べざかり賞味期限を気にしない
カラフルな薬に食事せかされる
取り柄などちつともないがよく食べる
満腹を知らない母の無表情
おしゃべりが静かになった食べている
食べるのが精いっぱい軍手干す
よく食べてよく寝て明日を走り抜く
ルノワールの女を食べてみたくなる
賄賂には無縁しゃぶしゃぶ食べてます
食べ盛りの子が二人いる炊飯器
河豚食べに行こうと妻が言いだした

吉太郎 正子 正義 保州 希久子 柳宏子 富湖 隆盛 美代子 柳宏子 とし子 いわゑ 寿美 千歩 柳弘 英子 鬼遊 寿美 シマ子 勇太 金太 石舟 落児

シヨバン聞く男むしゃむしゃよく食べる
淋しくてひたすら食べる店屋物
ひたすらに食べる無邪気な母の皺
気兼ねして食べてもぼくは太るたち
一人つまずい方から先に食べ
満腹になれば素直になるだろう

佳

母の着物をみながら食べたことがある
援助交際食べるためではありません
飢える子のニュースに夕餉黙り出す
一言居士食べ飲んでから文句言う
青虫の残り安心して食べる

人

飽食へ歩け走れという平和

地

元とる気 割り勘の下戸よく食べる

天

食べて寝るだけの暮しに税がくる

軸

飽食の列島飢餓が待つ予感

兼題「関心」

西出 楓 楽 選

諦めと不信政治に無関心

関心持てばしょうもない事面白い

無関心それが一番こたえます

関心の高き傍聴券の列

関心があるから通せんぼはなくなる

関心をそらす話にある疑問

女性にも関心があるまだ若い

一風 扶美代 みつ子 天笑 度 千里 しげお かすみ たもつ 悟郎 泰子 たもつ 靖巳 鹿太 ダン吉 セツ子 満津子 義 柳宏子 夕花 頂留子 賢子

無関心よそおい鼻毛抜いている
関心のなきが大事な芽を枯らす
それとなく噂が走る春の椅子
リラの花咲いて関心持つサツカー
散り出すともう関心はプロ野球
ビッグパン関心あるが不如意なり
コンピュター関心あるが手が出せぬ
関心の向きが変わった倦怠期
関心をつなぐ女の若作り
痴呆症無関心ではいられない
関心は無いが拍手はしておこう
口喧嘩まだ関心があるらしい
少年の関心未来まで飛んでいる
関心のない話聞くさめたお茶
知らん振りして聞き耳立ててはる
花よりも団子が今の関心事
核の行方あなた関心ないですか
静止画で関心持てるはずがない
関心はもう示さない株の欄
関心の無い振りをする好きだから
髪形を変えて気付かぬ夫と添い
ナイフには無関心ではおれません
関心を見せてもお呼びかからない
無関心の振りライバルの手のダイヤ

佳

萬太 鹿太 正雄 保子 西 昭子 久峰 泰子 大輪 義子 千里 絹子 天笑 鹿太 ダン吉 金太 シマ子 英子 周信 落児 文秋 たす子 みつ子 勇太 希久子 たもつ

ライバルの動きをいつも視野におく

寿美

関心が欲しくて母をこまらせる

朝子

神様に関心がな絶頂期

稚代

関心を持つと地球の呻く声

射月芳

軸

孫つまれ関心もったエコロジ

楓楽

兼題「苦手」

橋高薫風選

苦手だと言つて一曲マイウェイ

周信

芽吹く春少し苦手な自演劇

千梢

数字を見ると頭が痛くなるんです

金太

カタカナ語苦手どころか判らない

久峰

苦手なことは一番先にしてみよう

満津子

苦手から片付けていく几帳面

満津子

避けてると苦手いつまでも苦手

満津子

苦手には呪文となえてから臨む

金太

スピッチは苦手乾杯なら出来る

大輪

苦手には変化球から先ず投げる

周信

苦手だった姑が懐かし三回忌

澄子

あれ以来苦手になって来た彼女

萬的

友達に友に苦手の人がいる

義子

ダンディな男苦手でございます

天笑

にこにこ苦手な人が寄ってくる

靖巳

算盤は苦手 氣つ風で勝負する

恭昌

妻よりも孫のひと言手厳しい

たもつ

苦手だと言う先輩の美人妻

弘一

酒苦手誰も本気にしてくれず

千梢

苦手な人と酒の話題ではずんでる

いわゑ

一番の苦手が酒を注ぎに来る

武庫坊

わけがあり家族の話苦手です

義子

真っ先に苦手なひと手をつなぐ

朝子

優勝の道に苦手のチーム無し

隆盛

綴り方苦手だったという作家

義一

歳月が苦手なことを変えてゆく

義美代子

苦手などないから誰とでも笑う

剛治

真っ白になって苦手な人に会う

柳代

苦手な人の前で仁王立ちする

柳代

自立してみれば苦手が多すぎる

狸村

苦手だが心温もる古い文字

保子

エレベーター苦手とふたり扉がしまる

賢子

奥さんが苦手と嬉しげなおひと

洞庵

正義派といつも付き合う羽目になり

路児

女好きされど女は苦手でず

しげお

喋るのが苦手 大きな弁当箱

楓楽

にんげんが苦手生涯蝶を追う

三男

もう苦手何にもないという白寿

三男

桜満開苦手な人とうち解ける

扶美代

子供らも妻を苦手にしはじめる

薫風

軸

（清記—希久子）

第20回 津山川柳大会

とき 6月7日（日）午前10時開場

午後11時30分投句締切

午後1時開会 4時30分閉会

津山市総合福祉会館（津山駅よりバス）

千円（各題2句・欠席投句拝辞）

久保田 寿界氏

土居 哲秋選

酒谷 愛郷選

西条 真紀選

海地 大破選

吉田 右門選

森本 夷一郎選

橘高 薫風選

森中 恵美子選

京都塔の会 春の吟行句会

とき 5月22日（金）

集合 11時 地下鉄東西線「蹴上」②出口

昼食 南禅寺きんもんど（湯豆腐）

句会 1時 無鄰菴（むりんあん）

国の名勝庭園・山県有朋造営の別荘

兼題 脳・むさぼる・空想（各題三句）

席題 当日雑感

会費 4500円・投句80円切手3枚

申込締切 5月17日

〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下る

弁財天町 都倉求芽まで

氷雨降るトツプニュースは中学生
雨しと斜めの傘で逢いに行く
匂いたつ一雨ことの春の息

癒えぬなら五臓六腑を開けたい
策士さくにおぼれて道は開けず
開眼の風振り返る男たち

金庫開くと溜め息がころげ出た
春の日に心の窓を開けてみる
冷蔵庫開けて今夜の元氣種

紅梅は満開にして風となる
雨傘を開く二人の小さい屋根
押絵離れくせ巡る少女あり

過疎の里棲んでる鬼も見当らず
耳をすませば千匹の蝶出番待つ
失意消してくれる赤い残照

切り口を変えて真実と向き合う
飛び越えて座った椅子にあった刺
シャッターが閉まる始まりの音で

春はそこ同窓会へ返事だす
万事こそこストレス知らぬ暮し振り
蝸牛動きやすいと知る葉っぱ

川柳塔まつえ吟社
恒松 町紅報

夢のよな望みが叶う青い空
ささやかな望みコーヒー挽いて待つ
原稿に少し望みを埋めてみる

望むこと欲ばってます六十路坂
望むこと一杯あって青春譜
いい女と出会いを望む曲がり角

昭三 伊三郎 義芳 三代子 キク子 歌子 夢之助 千恵 節子 年代 比ろ志 正子 一笛 武庫坊 光穂 久子 静 美子 昌子 涉 白溪子

修羅の道越えた無言の鬼瓦
土のひらに無言の重さのせている
手壇場で父の無言が釘をさす

職安の椅子に無言の刻がたつ
事故現場無言のままで立ちつくし
神様は無言で深い傷を見る

良い陽気荒れる紙面に花便り
赤い服陽気な風を連れて来る
陽気だね都大路を鈴が行く

ささやきを蕾もそつと聞く陽気
底抜けに陽気な人とうまが合い
ハーモニカ吹いて陽気な父である

うっかりと言った内緒が逆戻り
うっかりと誘いに乗った身の不覚
正論をうっかり吐いた春の馬

うっかりと子の無い人に子の自慢
うっかりと吐いた言葉が戻らない
搾られてうっかりだったと免許証

湖蕨対峙悩みは燃え尽くす
悩み事抱いて食欲わいて来ぬ
朗らかな人でも悩み抱いていた

悩み事かくして通す苦勞性
コーヒーが冷えて悩みは深くなる
金があればあったで悩む欲の皮

川柳高知 川竹 松風報 孝雄 快風 新年は母屋で祝う三世代
どん尻の当選苦い祝い酒
原稿を忘れ祝辞が右ひだり

房美 茂美 初枝 久枝 アキエ 久子 みえ 早苗 昭二 寿美子 静江 太泡 圭詩朗 米子 桂子 芳枝 多賀子 静恵 長吉 ひふみ 与根一 町紅

花火まで揚げて祝った赤字線
上品な笑顔の裏にある打算
駄馬の子は駄馬上品なはずがない

お上品ですと着物柄をほめ
もう齢の目尻へ無理な貼り薬
再会の齢はたちへ跳んでいる

明日の米研いで自分の時とする
早春を咲くサルビアを霜が焼く
九条に平和の文字が消えていた

福は内鬼も内にひとり者
高齡の鬼が茶髪にして生きる
鬼の外して嫁と丸く住み

福豆と一緒にくれた鬼の面
好々爺鬼軍曹は平和惚け
良妻が鬼一匹を飼いならす

佳句地十選 (4月号から)

白 石 春 嶺

他人さまに決めてもらおうと楽になる
日の出から天の奴隷になつて
天と地の愛できらきら芸をする

情報洪水古い頭が流される
レコードの渦にわたしの青春譜
やさしくなれなれよと竹に節がある

かがり火に大将だけはよく見える
疑えば水の白さまで濁ります
多数決という流水につぶされる

わたくしの噂は高い木に吊るす

愛宏 かす子 佳風 子龍 美々 有佳 竹萌 幸泉 菊野 京子 テルミ 三郎 朱坊 松風

能子 正和 多哥由 秀夫 さち子 蘭幸 きみえ 紅紫朗 季芳 とみ子

川柳ねやがわ

江口

度報

ぶり返す寒さがこわいバカ陽気
雪しんしん母の童話がよみがえる
寒さから逃げて飛び込む縄のれん
寒いまま大人になって世をすねる
早朝のバイトへ弾む白い息
キレ易い寒い心知らぬ親
再起する友は鉄砕す雪だより
針箱からちくりと諭す亡母の声
針とめらなやみを聞いてくれた母
針の穴ほどのことでも他人の口
針持てば器用な父の太い指
待ち針を数えて仕舞う手内職
いいチャンス逃がし仏の手にする
シャッターチャンス前を横切る霊柩車
チャンス到来脳細胞は奮い立つ
一本の葉ほどですが赤い羽根
領海を侵して援助までせびる
失言の蓋に議長が立ちあがる
援助とは名ばかり紐が付いている
無添加の男が援助するという
タイミングいいもすれという援助
奪う神与える神も在るチャンス
少年期みんなもった肥後守
何気なく二人歩いたのが噂
みかんひとつ旅の女と道連れに
瞑想のロダンも伸びをする春だ
眠ろうと努力するから眠れない

英壬子 光子 博泉 ルイ子 小路 勇太朗 一風 洋 頂留子 冬葉 庸佑 かすみ 波留吉 たもつ 時弘 仁清 高栄 とし子 三郎 良知 亜成 あやめ 恵子 一途 三千子 朝子 文秋

熱の子に叱ったことを詫びている
筋書きをいくつもかえて春を待つ
線よりも点の援助が喜ばれ

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

やりくりを神様知っていなさるか
せいつばい生きたつもりがこれっポチ
留守番のわたしへボーナスどうなさる
せいつばい尽して心満ち足りる
せいつばい生きた証の蟬の殻
せいつばい尽したつもりの割烹着
百人一首みんな忘れた味けなさ
せいつばいこの泥舟の舵をとる
ボーナスの味を忘れた老いの鶴
やりくりの傷がだんだん深くなり

ローズ川柳会

山崎

君子報

これしきの事で死ぬだの生きるだの
ほんのチョイ陽ざしがあればそれでよし
何が仕合せ十人十色の答え出す
木洩れ陽に拗ねたスミレも目を覚ます
特注の靴にも馴染み膨らまし延び
生きのびて笑い袋を膨らます
針供養春の陽ざしに誘い合う
陽ざし背にシヨパンと本とコーヒート
国内のうさ蹴ちらした金メダル
生きて生きて長い迷路がまだ抜けぬ
喜怒哀楽生きた証の詩を抱き
生きたため嘘も時々使ってる

真柳 度 柳 是るみ 鈴江 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 英子 博利 清泉 白汀 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子 いわゑ 武庫坊

ばらの芽がつんつん陽ざし追っかける
もう一人の馬鹿なわたしを責められぬ
誰からも好かれ生きよと母の風
誕生日手相どおりに生きるかも
陽ざしのなか忘れ上手になつていく
陽だまりへのんびり猫と日向ぼこ

川柳後楽吟社

從野

健一報

気まぐれな風の記憶の恋でした
貧乏性で地球の心配ばかりする
わたくしを遠い日にへと戻す雨
雪明かりコトコト貨車は詩人だな
死神のノックのような夜半の風
わたしにも通れる道が一本ある
来年も咲くのだろうか庭の花
正直な絵の具を揃えて春を待つ
ダイヤ改正どこまで続くサバイバル
おこぼれにしてはコップが大きい過ぎ
手つかずの原稿用紙に恐怖する
なんの罪過路の脛が痛みだす
余生では乞う御期待の数が減り
日陰でも耐え抜く根性たためて生き
庭に来る鳥と話している孤独
丸腰の戦士が踊るオモチャ箱
切り上げがうまい男の家族愛
居酒屋は男の素顔が並ぶとて
ガンに勝つ子供の笑顔見て生きる
玄関を飾る職場にある疲れ
身を削りけずって出てくる人間味

年代 はつ絵 民平 君子 義子 笑女 まさお 拓治 柳五郎 道博 青銅 敏明 幸子 博友 忠成 浄美 邦季 佐加恵 たけ志 桃風 秋月 正秀 進 哲郎 吉則 信善 美智子

神仏へお供えだけの役を持ち
旅先の情けに触れた無人駅
節ぶしに痛みがはしたる老いていく
曲り角喪服の女奇麗すぎ
前略後略男の意志は揺るがない

照路 健一 金吾 鮫虎狼 草風

八尾市民柳柳會

宮崎シマ子報

決心をつけると晴れた朝の霧
ダイオキシンの霧のベールを剥いでくる
霧雨に香り高めた沈丁花
女待つ男の似合う霧の駅
もめごとよそに地球すんなり回つてる
すんなりと嘘が通つてこわくなる
妻病んですんなりいかぬものと知る
すんなりと就職きまる太いコネ
すんなりと見える鏡はよく磨く
すんなりとできぬバズルでおもしろい
人の輪にすんなり片が入る若い人
鶴の一声すんなり片が付きました
D51の唸りを忘れ得ぬ峠
空唸る風が唸って海荒れる
オカリナがすこし狂つて森唸る
予定にはなかった大に唸られる
素うどんを唸らせたのはこんぶだし
難間に鉢巻しめて唸られ
青春の酒場にうすくまる蹉跎
居酒屋に笑える椅子がちゃんとある
居酒屋の酒にブライド脱がされる
居酒屋の五時からいつもの顔揃う

たもつ 隆盛 春子 美幸 東雲 ますみ 半蔵門 信博 千里 剛治 三男 弘一 賢一 弥生 泰生 哲夫 欣之 一風 とみを 柳宏子

菜の花や今日を名残りの別れ霜
家計簿に別梓すこしゆとりとり
別になんでもにごす言葉のずるい彼
さくら舞う別れの曲をききながら
別々に支払いますお友だち
シヤブシヤブの店が暴いた別の顔
別件で問えば夫の嘘多し

川柳塔鹿野みか月

土橋

彼のひとを見初めて心澄んでくる
あの日から見初めた趣味に無我夢中
かごめかごめで見初めた赤いボンの娘
枯野から見初めた男と茶友だち
私を見初めるなんて迷惑だ
少年の見初めた芸の道けわし
曲がる腰かばう貴女はまだ若い
孫の芽がぐんぐん伸びて遠ざかる
第二釘誰にあげたか孫の胸
釘ひとつ見つけ刑事の眼が光る
豪勢な釘お膳が茶を沸かす
少年の鼓動釘は聞いている
制服の釘きされて過労死か
釘にされてから貝がやべりだす
絶対に押してはならぬ釘抱く
大きさは釘ひとつの持つ役目
窓口の気持ちよい女忙しい
どうしようもない窓口の隙間風
窓口に離婚用紙が置いてある
時の流れに逆らっている岬

弘直 秋子 頂留子 夕花 朝子 柳伸 螢報 房子 茂 野草 きみ子 はるお 公子 菊野 久枝 武子 富恵 智恵子 きみゑ 節子 三千代 和子 八重子 保子 かつ乃 宣子 富久江

十八の春の岬をひと抱え
しあわせな岬で哺乳壺があく
春巡る北の岬はいつ解ける
望郷の岬が荷札から匂う
手枕の孫の寝顔に夢を抱く
篝火に照らされている卒寿坂
大いなる功徳に会えて篝火をたく
うぬばれが少うし匂う梅が咲く
耐えることばかりで老母の軽くなる
気づいていない勝ち負けの一点差

京都塔の会

松川

杜的報

鬼ごっこ句碑の周りも春になり
差別語のない原っぱの鬼ごっこ
あったかい絵を思い出す鬼ごっこ
爪染めて何にもしない娘に育ち
琴の爪同じところでもたとちる
爪切つて逢いたい人が一人いる
サタンのような爪の女と終電車
爪を研ぐ相手が妻の時もある
歌声にしびれ葉のあるうむり
父さんにしびれた昔つらむ母
感激に声がしびれた金メダル
自分史にしびれた真見当らず
同居して心の負担重くする
犬と同居の母叱れないたたみ拭く
よう出来た嫁に同居の灯が温い
子と同居ベットのの方が気が軽い
同居してみるといい嫁だと分かり

孔美子 諷人 睦子 隆風 幸枝 喜与志 汲香 実満 くに子 螢 紫香 京子 豊次 女 庸佑 正坊 福子 英一 克治 武庫坊 杜的 百合子 とみ子 柳宏子 巨詩 飛鳥

焼肉と茶漬けが笑いあう同居
同居して笑いが絶えぬ大家族
同居人名簿にのらぬ人と住む
同居して時に息抜き旅行する
同居して留守番ばかりさせられる
行政へとくにしびれ切らして
後追いの激しい子だった小さい墓
八起き目のチャンス離してなるものか
鈴なりの絵馬の中から運ぬすむ
やどかりがここにも居たりホームレス
騙し舟とは知らず掴んでいた舢舨
四捨五入くらしいの無理でやめておく
雪空へうれしい事を言うてくる

はびきの市民川柳会

芦田

詢子報

欣之 波留吉 芳子 吉之助 白溪子 求芽 高栄 春蘭 年代 水客

麦わら帽もつふる里に母はない
少年の夢が詰った野球帽
帽子にはこだわりを持つ父だった
駅長の帽子陛下に指示をする
星の空眩しく仰ぐ古稀の靴
老いの夢あたため手相ながめてる
湾岸へ模様眺めの日が続く
エリート官僚眺める不整脈
水平線眺めてわたくしを広げ
初恋は胸キュンで眺めてた
うっとり眺めるだけの毛皮ショー
遠くから眺めるだけの好きな人
敵に塩送るエラーを悔いている
できるなら美人のエラーゆるしたい
エラーしてアララと言って笑ってる
口髭がマンガ読んでる通勤車

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

ダン吉 聴 庸佑 重人 吐来 敦子 かつみ 忠宏 みつこ みつえ 志洋 詢子 悦子 専平 一壺 辰子

家内中たらい回しに風邪の神
回転を始めた春の脳細胞
雪解けて水車の送る春の水
一回りして来て元のとこで買う
小商いこまめに回る夫婦独楽
指切りのぬくさでさくら待っている
あたたかさに慣れ無気力な肋骨
暖かいバージンロードの父の腕
温暖化 急ぎきたてられる花前線
留守電へぬくい言葉が伝わらぬ
言訳につまり指輪を買わされる
花時計待ち草臥れた人ばかり
振り向くとそこにあながいてくれる
畳踏む足の裏から春が来る
大津絵の鬼もおどけて春近し
色っぽく猫啼いている春なのか
エスカレーターのきしみにひとときの孤独
五十回忌過ぎた貴方はお友達
出て行かぬ冬へ簪を立ててやる

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

たつぷりの墨つけ虎の目を入れる
鉄を振る私も鉄もまだ若い
寅の刻僕の頭が湧えて来る
神様にも人間臭さ見えかくれ
寅年の妻に頭が上がらない
寅さんの真似して旅に出るつもり
雪折れの梅も健気な蕾付け
騙されて一度は見た雪女

春蘭 能子 涼子 紫香 曙蝶 澄子 比呂志 柳宏子 哲子 白溪子 房子 石舟 諷云児 トミエ 江美子 絹子 鹿太 和歌子 完司 一夫 信子 春恵 あけみ 孝男 輪多朗

四人目の若い娘にはだされる

川柳ささやま

酒井

靖子報

多哥由

たくさん祈りがこもる千羽鶴

終点を知らぬ達者の命燃え

お互いに他人になって消えた虹

攻められる覚悟が座る床柱

木枯しが老女一人を攻めてくる

あり余る贅沢すぎて成人病

頼られて頼って余生攻められる

今日も無事鬼と一緒に掌を合わす

先頭はどちらか長い蟻の列

土壇場の女涙で攻めて来る

成人へ父と息子の詩がある

世話好きの嫁先頭に波立てず

先頭は気配りがいる縄電車

成人の息子と交わす祝い酒

先頭の蟻に勲章などはない

成人へもう軍隊がない平和

ふんざりがつかず昨日が攻めてくる

靖子

はたる川柳同好会

井上

直次報

貧乏を承知の鍋を磨く妻

事故のあとフロントガラスよく磨く

ナイフを磨き心を磨くこと忘れ

総入歯磨いていても精がない

研磨機で削りとりたいたい恥と垢

墓磨く亡夫に愚痴を言いながら

磨かれた鏡に本音見透かされ

明光

博史

善守

正安

よしろう

敵子

昭子

毒古家牙を磨いて今日も来る
うまい物ずっと食べたい歯を磨く
珍しい話に人が寄ってくる
珍しい線画にますます心電図

荒れる場所満員御礼出ぬ悩み

悩むから人には生きたる力出る

年齢よりも若く見られて悩んでる

しがらみに少し悩んで花の下

悩んだ割にはバツとせぬ答

宝石と信じ磨いた子がキレル

付け焼き刃お世辞の言葉出てこない

付き出しを褒めつつそとと盆を出す

生半可知った振りする付け焼き刃

物忘れ付けれる薬が欲しい古稀

嬉しさを一本付けろに込めている

珍しい名前でちゃんと覚えてる

珍味とも言われて物とも言われ

珍しきや今日は汚職の記事がない

珍人類キャリアも金に弱いのか

城北川柳会

神夏磯典子報

慎ましい母にも隠れた底力

お邪魔虫言いつつその場仕切ってる

寒椿老いの生活に彩添えて

焦らずに胸へ囲っておく火種

焦っては負けだこころで深呼吸

バラ一輪入れて自慢の壺床に

期待した色も香りもない器

出すものは出しても遠慮しています

久子

まみ子

英子

喜美子

馬洗

久子

まみ子

英子

喜美子

馬洗

竹二

たけお

保子

桂子

セツ子

直次

清

祥風

キヨ子

雪子

ただし

蛭柳

正三郎

勝

久留美

佐津乃

春蘭

史風

高栄

登美子

とし子

寿美子

いじわるをされればいけい出るファイト

人間の知恵は遅々なり温暖化

地球という器を人が壊し出し

褒め殺しという手があった丸木橋

焦ることない釣書見ない父

遠慮がちに母の胸へ金メダル

いじわるの鉄に枝は強くなる

遠く来て白寿の母をいとおしむ

フラミンゴ茜の色に溶けて啼く

吊り橋の真ん中バトン渡される

預かった孫の遠慮がいじらしい

ガラス器に夏ばて防止盛るサラダ

イラクより恐い女性を持てあまし

保健室身より心の逃避場所

子のくれた銘酒しみじみ夫とのむ

正直もの直ぐに本音を披露する

焦つたらすぐにほどける靴の紐

一億の思い上がりにツケが来る

次世紀を視野に大地へ種を蒔く

新しい夢がひろがるカレンダー

一徹な父を動かす母の鍵

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

出張の度に父さん若がえる

美人だと答える鏡なら買おう

風が吹いたら一度走ることにする

会いに行くサインを風に盗まれる

無職にも出張がある旅心

出張へ妻の祈りがついてゆく

トヨ子

博遊

順三

睦子

千歩

義江

典子

藤子

昭子

あやめ

あい子

一枝

秀夫

政子

あきよ

達子

ただし

倫子

白峰

朝子

公一

君枝

富湖

大輪

度

豊太

めぐみ

ツケンするな美人なんぼの物じやろか

僕よりも落ちる男が美女を連れ

一目惚れ美人にハート盗まれる

まあまあ美人はじやないの何不足

クラス一の美人は行方不明とか

キトラ古墳飛鳥美人にまだ会えぬ

美人ではないというから惚れ直す

愚妻でも心美人で手を打とう

美人湯に逗留したとは言えません

母さんは美人私は父さん似

美人願望灰になるまで女なり

呼び声を風向き次第で変えてみる

生きるものみんな友達四季の風

かりて来た傘が荷になる横なぐり

風に舞う病葉春をうたがわず

自信持つ男追い風待つゆとり

順風満帆見落している小さい穴

頂点の風を悟ってから孤独

風の道開いたように友が逝き

嫁った娘の窓に春風待つっている

背を丸め風に道聞く枯すすき

請求書のサインの束が鬼になる

きっぱりと自信わたしは美人です

うぶみ川柳会

西村

黙光報

純毛の毛布は虫も知っている

カラフルな毛布新婚さんが干す

釈放に月も冴えてる娑婆の風

許し合って今夜の月がよく冴える

呑天 親躋 和重 利治 三男 正博 公子 雅代 紀久子 輝子 二南 重治 淳太郎 あつむ 射月芳 柳宏子 さち子 美子 紀美女 英子 千寿子 克子

葉士人 華子 静生 正和

じんじんと凍てつく空に冴えた月

株式欄冴えた株など見当たらず

秒針と私の目だけ冴える夜半

しこかれた師匠へ返す技の冴え

張り替えた障子に愚痴は聞かせまい

夕暮れの障子に染めるあかね雲

貼り替えた障子に孫が目をつけた

はり替えた障子に春がきてとまる

またのぞいたか障子の穴がまた一つ

子沢山破れ障子が物語る

障子の穴から見る世の中がおぞましい

障子の穴ちらちら覗く癖がつき

価値観が違ふ障子の内と外

瑞雲を映す障子にはり替える

障子にも気品溢れるお家柄

貧富なく無差別にふる寒の雪

川柳東大阪

森下

愛論報

自画像へ一つ添えたい銀の笛

金よりも銀の男へ従いてゆく

銀世界樹を眠らせて雪が抱く

いぶし銀夫婦の祈り深くなる

木枯らしの中に男の修羅が舞う

雪舞う日ぬくもり知った笠地藏

舞う雪に雪の魔性を見てしまふ

求愛へ優雅に鶴は舞い踊る

石仏は野にあるがよし枯れ葉舞う

非常袋中でマツチが湿つてゐる

五時からの足跡を知るマツチ

ユリ子 天雀 登美枝 孝男 一揆 雄人 天人 蛭 健一 雅女 あづま 鬼桜 宣子 黙光 くに お

あや子 柳宏子 度子 朝子 シマ子 賢子 湖風 三重子 雅文 緑 たもつ

数倍も大きい餌を蟻が引く

海亀が涙流して産んでいる

寅年へ頑張るつもり数珠をくる

頑張れよ何や競馬のことかいな

我が社では社長頑張る外はない

地球儀のカルト気になる世紀末

落とし物探すマツチの火の動き

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

名刹の山門守る仁王尊

不器用な二人肩組む縄のれん

オリンピック大和魂まだあつた

戦争か和平か手順多すぎる

捨てるだけ誇大広告売りつくし

理念だけ説いて離さぬ蜜の壺

芽立ちまで待つております母の愛

待ったなしの寿命一日が暮れてゆく

桜待つ人に紅白梅が咲き

貧しくも家に三矢の宝あり

飛行雲五輪の彩は僕の里

結論は手書きになった年度末

規則正しく一日二食で生きている

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

別々に力んでみては蛙の子

ぬれ落葉となれば心別々だ

食事だけ別々同じ屋根の下

別々な性格ですが兄妹

別々な道を歩んで一つ屋根

信治 太郎 真柳 昭二 東雲 頂留子 愛論 幸夫 晴翠 タミ 弘 高明 輝夫 勝視 虹汀 久仁於 あき 四郎 正剣 公美枝 和代 鈴枝 静枝 弘子

別々に一番近い橋を行く
別々にブライド守り家族の輪
別々にとんで纏めた金メダル
双子でも別々の道すすみ行く
気まぐれな白馬の風にたちむかう
ふるりの風に勇氣と知恵もらう
別々に食後の薬老い二人

三幸川柳教室

三宅

保州報

人知れず我慢します楽天家
痩せ我慢いつまで続く木守柿
ヤジロベエ互いに耐えて和を保つ
手の平に我慢と書いて仲直り
九分九厘あとは我慢の処世訓
能面をつけて罵声に耐えている
我慢した涙華燭に彩を添え
満面に笑みを浮かべている我慢
過ぎてゆく日々をヤスリに我慢する
修羅いくつ越えて我慢の石を積み
我慢して思考回路がショートする
頂点の我慢防風林がない
詰めこめば我慢袋が綻びる
満ち足りて我慢が風化する怖さ
平坦な道にもあつた落とし穴
手さぐりで行く道だから面白
どの道も覗いてみたい好奇心
矢印の道を歩いていたら不覚
目のうろこ落としてからの広い道
逃げ道に虎が牙むく尾を立てる

智恵子 久子 正光 信敬 豊枝 康女 雄々 章子 めぐみ 嘉平 正匍 初子 秀男 豊太郎 保州 公子 百合子 三千子 当代 和代 さち子 敏子 昭枝 美子 美寿子 孝子 桂香

近道をしたのにゴール消えている
抜け道はあるともぐらのしり顔
方向音痴へ道を尋ねてくださるか
躓いた石に貰うた道しるべ
六法の裏をあさって道を逸れ
法律が通せんぼする車椅子
袈裟掛けにされそうになる冬の道
待ち伏せる鬼は覚悟の帰り道
私の歩いた跡が道になる
どの道を行ってもきつと明日がある
とつとり川柳会 武田 帆雀報

起世子 正一 正一 町子 鉄治 親路 和子 千秀 朱夏 碧 陸子 一夫 孝男 大漁 多哥由 螢 幸子 帆雀 和歌子 季芳 粗粒 きみ子 よしえ 輪多朗 節子 和枝 舎人

坊ちゃんの戦後は平家物語
坊ちゃんに海の深さがわからない
坊ちゃんて暮らして歳を食いつぶす
産声は五体揃って夢ふくれ
貸した金耳を揃えて持つて来い
女三人揃うと入る隙がない
大三元こいつあ春からついている
足並みが揃うころにはお別れだ
前列に強そうなのが揃つて
幸せは三代揃う渡り初め
条件は揃っているが嫁が来ぬ
談合に役者揃ってキナ臭い
化粧品揃える割に垢抜けぬ
竹原川柳会 時広 一路報

鬼桜 忠良 喬水 悦子 蟹郎 静生 石花菜 主一郎 典子 かつみ 一京 一瑤 美恵子 高史 高千枝 蘭幸 孝枝 栄恵 幸子 力 不朽 菁居 淑子 汎美 比呂子 房子 美佐雄

ふきのとう春一番の味が好き
日本の味見せる長野の土俵入り
いい味だ五〇〇号誌のむかえ酒
運を天になぞとウソぶき何もせず
なにごと運は寝てまて神まかせ
今にしてこれで良かった男運
幸運の女神を信じ生きて行く
運気上昇星占いを信じよう
運を天にまかせて今日も鉄を振る
運命と遊んで母の丸い背よ
小悪魔のような運だな逃げ回す

川柳大阪

坊農

柳弘報

真紀
隆司
須賀夫
まゆ子
照月
信南
河醉
河南子
雅巢
喜楽
本蔭棒
かよこ
しげお
司

遊んでもばれない妻とばれる夫
夜遊びはいかんと父を叱る母
退職金影も写らぬ低金利
シンプルな私を操る妻がいる
工夫して作った料理手をつけず
給料日だけは優しい笑顔みせ
シンプルな女房だから今もある
工夫した手編みに妻の温かみ
優しくと嫉けしめはつける母
孫にだけ優しいですねと子がねたみ
質問をいなし参考人逃げる
合掌の民家工夫の玉手箱
子が飽きて親が育てるタマゴツチ
ゲーム機の孫の視力が気にかかる
良心と神を欺く工夫する
ひと工夫あれば地球も救われる

一枝
正宏
静風
笹舟
夏喜
喜美子
蝸牛
貞子
笑子
一路

趣味一つ遊び心でやってます
シンプルな給元若き溢れ出る
電話する声で遊びとわかります
正直を拳に弱者の列に居る
優しさにふれて女の胸が燃え
母が娘に送る優しい手紙書く
気をつけろ優しい時は罠がある
不覚にも優しい人を邪魔魔とい
遊ばれていたとは僕のことらしい
政治家の工夫は助成金狙い
ミキサーでアロエ人参リンゴ汁
灰皿の山に工夫がまだ続く
寄せ鍋に母の工夫が煮えている

サークル檸檬

小林

一夫報

一つだけ月に誇れることがある
雲行きをひとつとばけて見てやろう
大根の白さ丸さになわれない
針のない時計をもつて夢買いに
花屋までの坂をのぼる春のリズム
蓄えやさしい言葉待っている
不幸アラスマイナスちよつと幸
金のない不幸なら身に染みている
突然の不幸が絆深くする
大けがに不幸というが神を見た

鉄心
柳昌
美花
洛醉
まつお
希久志
柳宏子
一歩
ダン吉
金太
三十四
重人
柳弘

寄りそつて縁起直しと酒を酌み
縁起問う帆先を明日へ向けてみる
歳月の重さにゆれる志
小さくても僕には僕の志
招き猫横向いている縁起棚
志す道にもあった落し穴
志す千里の道も一歩から
子の立志曲げて悲しい親のエゴ
おみくじの縁起の良さに身を任せ
縁起良い話に桜茶よく聞く
新築へ縁起かつぎが笑われる
縁起など気にせず若き突っ走る
裸木も明日の芽を吹く大志だく
今日よりは大波小波どう渡る
少年の大志はばたく始発駅
少年の胸ではじける志
青雲の大志が埋める空の画布

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

法話聞き凍てた心を和ませる
解凍に手間どる僕の知恵袋
軒つらら哀しい色で朝になる
身の凍る思い出した夫の癌
オンドルの外は氷点下の吹雪
今日もまたニュースが心を凍らせる
煮凍りの味も作りも義母に似る
つらから一滴すつの春がくる
すれ違ひざまにひらめくプロの勘
信頼の出来るお方と直感す

あやこ
すみえ
玉恵
辰江
妻子
悦子
敏子
こふゆ
朝代
美佐子
みさえ
たづ子
ひでの
昭子
和子
あすなろ
寿恵子
波留吉
石舟
武庫坊
ふみ
茶の子
求芽
大輔
しげお
泰雄
あやめ

ピンと来たアイデア拍手に迎えられ
直感で話をそらすティールカップ
晩酌は湯豆腐だけで足りる祖父
湯豆腐の薬味は殺し文句かも
湯豆腐の角を潰して差し向かい
湯豆腐の熱気に癒えるわだかまり
おだやかな風にフアイトが出て来ない
おだやかな人で身構えずに会える
おだやかな心が仏の顔になる
退屈というおだやかな日が続く
おだやかに亡母に抱かせる赤い花
掘ごたつ二人静かに七日粥
亡母に似る姉の読経はいい声だ
一線を越えて素顔をのぞかせる
ハンカチで包んで帰る小さい恋
茶碗酒明日のことは考えぬ
正論を世間知らずと笑われる
ホームレス母の港はどそこにある
どん底で鬼と神とが連れ合う
春そこにそろそろ答え探さねば

倉吉川柳会

松本よしえ報

ご先祖を拝むしぐさを子が貰い
学び舎を去っても恩師忘れない
先生のしつけ生徒へ思いやり
お先棒よいしよよいしよとかつぐ人
春来ても去る人ばかり過疎の里
耳底に昨亡父の咳一つ
幸先がよくて重たい腰を上げ

柳宏子 澄子 白溪子 惠美子 高栄 節子 靖巳 ルイ子 杜的 克治 とし子 秀夫 とみ子 重人 芳子 紫香 正坊 一笛 諷云児

バトカーに先導されたことがある
昨今の中学生は恐ろしい
手の皴は尊い過去を知っている
昨今の父権はどこへ行つたやら
先頭を走り加減がわからない
チョコレート高くついたが可愛い娘
故郷を去る日の帽子深くする
白旗を振る先頭に選ばれる
ふる里を去って気になる父と母
先ざきのために小銭を貯めている
先行きに不安はあるが預金する
路地うらも子らの声せぬ昨今だ
先走る癖が治らぬまま老いる
これから先のことは弁当食つてから
昨今は集団下校する教師

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

どうしても母の涙は越えられぬ
化粧せぬ顔二階から下りてくる
死ぬ日までやっぱり女でいたい紅
驚いてならぬ男の子の化粧
化粧した男がはずむ夏祭り
自分史に薄化粧して書き残す
鬼隠す化粧は鬼の眉を描く
どう化粧してもマドンナにはなれぬ

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

人生をふと振りむけば共白髪
見る鏡なければ白髪わすれてる

螢 御前 秋人 和枝 康子 玲子 ゆり子 よしえ 民枝 幸子 智子 紀美子 明美 季芳 次男 清芳 能子 あずき 香住 弘直 シマ子 田実子 欣史子 真由美 富美子

白髪染め社交ダンスの仲間入り
こっち見て白髪増えたと妻なげく
ゆるやかに結んだ帯の品のよき
心配で会に出たけどどうわの子
ごはん時なぞか遊びに来る子供
ゆるやかな規制にあぐらかく政治
ゆるやかな坂も長いと思が切れ
ゆるやかな女の腰にある自信
白髪染め色とりどりの熟女たち
とろろ飯する前からかゆくなり
大空が釣り上げている初日の出
児の頬つべごはん粒とり食べるママ
空は浄土南無阿彌陀仏掌を合わす
仏飯を感謝で食べる夫婦亀
カラオケは好きだが社歌は上の空
ゆるやかな口調にまたも騙された
ごはん粒つけてお代わり言うている

岸和田川柳会

長谷川呂万報

下り坂流行歌手もどき回り
流行を追ってローンに追われてる
流行のブランド女を目を奪う
人生は人それぞれにある歴史
歴史ある言葉地球は青かった
同じ世を生きて異なる歴史観
昭和史の軍歌で酒を酌み交わす
母さんと叫び遺して特攻史
数々の歴史を作り五輪閉す

興次郎 吉昭 好治 永壽 加寿造 喜久造 晴子 久美子 昌三 風琴 満寿蔵 東園 郁子 野鶴 勇次郎 夢之助 紫香 一齋 さよ子 富志子 狸村 敏光 盛之 基 松風 辰郎 ひで

日本酒をライスワインと洒落る父
四月馬鹿ワイングラスに嘘が浮く
ワインでは素面女の二人連れ
ベレー帽ワイングラスがよく似合い

美津江
鹿太郎
白光子
甚一

母さんの料理自慢はワイン煮こみ
ばあちゃんのしわに浪費の化粧代
浪費してストレス消えた軽い足
安いから買ったと浪費気付いてず

けい子
路子
呂万
柳宏子

イエスノー言えぬ日本のあいまいさ
エリートと言語明瞭意味不明
静止画像少しあいまい過ぎないか
あいまいな数字でいつもこまかさ

柳子
蛙城
萬的
一弥

軍配はあいまいだったお母さん
はつきりとせんかい国のお偉方
家庭円満あいまいな嫁が居る
玉虫の答世界に通じない

ダン吉
金太
美智子
吉三

あいまいさ平和と誤解する日本

苑子

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

組板のクボミに溜まる妻のウツ
前向きに生きて暮らした汗を拭く
有難う言え最後であればよい

マツエ
文仙
吟笑
かおり

わだかまり洗い流した終い風呂
何を着てゆこうと八十路でも女
思い出し一緒に生きる流行歌
掲き立てのうまいお餅が入歯食

あきら
よしみ
放任
治延

歌姫の唄より衣装に気を取られ
突然に戦争のよう客が来る
フェリーから鈴の音が湧く初大師

坊太郎
てるお

何よりも楽しく動ける八十路すぎ
目離しの出来ない子供預かって
一枚の写真に秘めた哀恋歌
千鳥足歌に合せて踊り出す

チカエ
いさむ
ひかり
はつ恵

千鳥足歌に合せて踊り出す
千鳥足歌に合せて踊り出す
千鳥足歌に合せて踊り出す
千鳥足歌に合せて踊り出す

貞月
なみ子
正雪
くに子

母の声台所から歌謡曲
凍りつく足が出動引き止める
手応えを握んで策士はくそ笑む
川柳藤井寺

三郎
宗一
みよ子
絹歌

悩むほどお金があつて今日の僕
悩まずにいつておくれと母の声
捨てようか残そうかこの古道具
夜が明ける昨日の悩み流さねば

かつみ
正一
史郎
敦子

たそがれてまだ煩惱が離れない
魚の目に悩むとみえぬ脚線美
飲みたいし命も惜しいと悩む酒
ぐち不満家計簿つけて悩んでる

美房
花梢
大八
和樹

じつくりと聞けば鬼にもある悩み
贅沢な悩み美人に生まれるすぎ
人間のエゴに悩んでいる地球
悩み一つ抱いてあしたの糧にする

美代子
昭子
アキ
一屯

悩むのはやめた大の字に眠る
知らぬふり昨日をまわす洗濯機
決断がついて最後の顔洗う
脳みそを一度ジャブジャブ洗いたし

紅紫朗
鐘造
志洋

感情の起伏を洗う冬の雲
湖を盪洗にして舟遊び
芸人に鬼より恐い大欠伸

志洋

ワンルーム家相も鬼門もない暮らし
どこに何があるかわからぬ鬼の留守
大津絵の鬼なら敵にまわせない
クレジットカードに鬼が隠れてる

婦美枝
六点
悦子
政代

鬼になるほど打ち込んだ芸の道
鬼の面取れば涙のあとがえる
消費税集めて鬼がまき散らす
胸に棲む鬼と静かに老いてゆく

昌子
治子
桂子
扶美代

野遊びの子等 陽炎に見え隠れ
朝起きて今日の私に期待する
翠洋会

修六

さくら散るふと初恋の人よぎる
変化球投げて母の名キヤッチ
不景気で笑い袋はオフのまま
出不精が化粧してくる通り抜け

照子
絹子
宣司
千歩

変化球向い風にはよく曲がる
土壇場で投げた言葉に意地がある
警官が遠巻き袋の鼠なり
投げた石敵に当らず宙に舞う

英千子
周信
千歩
宣司

少年が大人にならず世を投げる
雑学で縫うつぎはぎの知恵袋
ぼつぼつとずつつと前から歩いてる
ローン済みぼつぼつ桜咲き出した

真砂
綾子
英千子
周信

船べりを叩き花束投げる母
明日の夢へ新しくして皮袋
エルニーニョさくら暖あわててる
花見酒桜は知らん顔で咲き

孝子
正坊
叡子
久峰

朝さくら婚の荷が出る晴れた空

正雄

味方にも磯投げたい奴がいる
変化球投げあいながらきた夫婦
さくらさくら孫は十三娘なり

娘の挙式親も門出の袋帯

ぼちぼちと歩きはじめの春の靴

夜桜の誘いに負けたい腰

さくらさくら隣の嫁と比べまい

投げられた謎が解けない胃の痛み

人の世の仔細は知らずさくら咲く

良く動くから標的にされている

さくらさくら殺し文句はいりません

さくらよりすみれが好きで聞き上手

洗濯機ぼつぼつ換えるほど疲れ

富柳会

池

森子報

サヨナラをさくらさくらと舞いながら

敗者復活左遷の町も住み慣れる

置き傘に人の情けも置いてある

笑って昨日と違う今日の川

冬木立温い日差しに喋り出す

たそがれに輝く星を追いかける

黄色に輝いているたそがれの恋

ふるりの川にメダカがいる自慢

年よりのゆとり奪った税低利

合格へ母の心にゆとり出来

かんざしに欲しいと思う沈丁花

懐のゆとりを妻が嗅ぎつける

海になろうと川は毎日を流す

丸洗いで生きざまを変えてみる

佳秋
凡子
千枝子
さと美

志華子

恭昌

希久子

靖巳

喜美子

澄子

義

楓楽

鬼遊

アキ

紅紫朗

久則

冬虹

鐘造

文子

(伊) 勇

昭水

(田) 勇

智久

昭子

扶美代

美代子

花梢

傘哭いてないで雨から起ち上がる
ゆとりには少し足りない薬の屋根

川柳塔みちのく

小寺

花肇報

厚化粧とれた女の側にいる

恋もせず散ってしまった少年兵

垣間見た貧しさ優しい灯がともり

火を焚くと少年の夢弾けだす

マリア観音指の先から匂う愛

迷いから抜けて少年風になる

次世紀へ少年の橋伸びていく

廃校阻止にたぎりに滾る血判書

無農薬地球に優しい鉄といふ

少年の澄んだ瞳にある未来

男性に笑顔絶やさぬ花名刺

使われてない電番のメモをくれ

蟻の死に涙を流す虫もある

どん底で逆転劇を書いている

月を背に新聞少年ひた走る

一耗の誤差に命を賭けている

川柳塔おとり

原 みを報

旗色が悪く辞任で幕を引く

旗じるし何もないので子を見せる

旗色が悪い出なおすことにする

日の丸の旗はタンスの底にある

ビリの子へ大きな旗を振ってやる

配られた旗で万歳して帰る

愚痴を煮て腹一杯になりました

欣之
森子

柳々

生恵子

北歩

慕情

ツネ

銀波

ヒサ子

順風

井蛙

ふさふ

一花

叶

花峯

黙人

しげる

五楽庵

伝住

艶子

孝子

由多香

宏章

幸次郎

以和万津

落のとう煮つめて亡母を想い出す
面白い豆腐を煮ると浮きおどる
ストープで豆が威張って煮られてる
煮ることは待つこと手間をかけること
飲まされた煮え湯のやけどまだ癒えぬ
人格を煮つめて灰汁をとりのぞく
大根が母の笑ったように煮え
古傷を煮詰め眠れぬ夜の床
ほめ言葉さすがと言われやる気出し
鬼検事さすが大蔵省しかり
金メダルこの母にしてこの子あり
山をはり資格試験にうち勝った
動かさる泰山老父の居る強み
山売って故郷の村を遠ざかり
春の山明える青葉に深呼吸吸
古里の山が奏でる童唄
特養という姥捨山にたどりつく

登美
崇
道子
真一
みゆき
雄々
千秋
佳子
庸二
小生
風花
敬之介
野草
舎人
清子
黙光
みさを

川柳塔打吹

米田 幸子報

綱つけて引いて集めた出雲の国

振り上げたかたいこぶしに金メダル

無い袖を振るのが政治家の仕事

てかてかの頭に若さ感じさせ

綺麗だとささやく声に振り向いた

消したはず胸の炎がさくさく

歌いつつ泣きつつ渡る綱渡り

手を振って柵見送るのは無礼

イミテーションでかてか指輪ご満悦

綱引きへ妻が出ないとなまた負ける

しろう

順子

(徹) 信子

弘朗

一夫

芳光

克枝

季芳

和歌子

雄々

炎上の時を合図にした破産

灼熱の炎のような恋したい

綱引きにもってこいだと選ばれる

消防士へっぴり腰で綱渡り

綱が張ってあるナイフが落ちていた

趣味を持ち内に秘めたる闘志炎ゆ

消えかけた炎に油注ぐ人

竹の子がきよろつと顔出しオイ春だ

手鏡に女の炎今朝も描く

噂の芽摘めば摘むほどよくのびる

きつと罰当たる私を振った人

振り出しに戻り靴紐締め直す

綱切って宗谷岬へ流れたや

家計簿が綱渡りする癖がある

香水を振ってほんのり夢を見る

不況風松は百年知っている

命綱信じ糞虫ぶらさがる

自我の旗いつまで振るかオジヤン

綱つけておかぬと妻が翔びたがる

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

役人の切れる頭が踏み外す

うとうとときどき乗り越す通勤車

少年のナイフ良心までも切る

よく切れる男よ喋り過ぎないか

子供の目キレたニュースに光りだす

切れそうで切れぬ絆の夫婦なか

どつしりと重い財布は妻が持つ

どつしりとその一言が胸を刺す

勝見

善江

よしえ

逸子

螢

京子

楨元

セツ子

睦子

孝恵

明美

和枝

石花菜

(小)康子

一京

多哥由

玲子

節子

幸子

いわお

江美

昌子

石舟

弘治

十四郎

勇次郎

正治

絵手紙の稽古夫の得意顔

ときどきは私のために水をやる

ときどきはじっくり見よう妻の顔

ときどきは失業園を思い出す

出不精にときどき疼く土踏ます

岬川柳会

八十田洞庵報

農を継ぐきつかけ父の丸い背な

禁煙の躰に親が先に止め

立ち直るきつかけくれた平手打ち

一言がきつかけとなり仲直り

ナイフなど持つてゐる奴は卑怯者

よく似合うヒゲとベンツとサンクラス

年若く見られ背筋シャンとする

高齢の社会支える若い人

長野五輪若さ世界を駆け巡り

若者は成人病を先取りし

きつかけは傘さしかけた俄か雨

馴れ初めのきつかけ語る旅の宿

ちよつとしたきつかけ悪に走らせる

離婚印きつかけなくてまだ押せず

初音から春の結び目ほどかれて

緑談のきつかけ卒業写真か

雨になり傘がきつかけ友となる

和解するきつかけもなく逝った友

仲直りきつかけになる食事会

久方にメダルグッシユが日の本に

発言がきつかけで役持たされる

逆転のきつかけつかむ三塁打

鈴

澄子

尚利

夢之助

鹿太

倅子

みやこ

浪速子

とみ

昌夫

通江

幸子

鉄男

庄六

ヤエ

年子

みつ子

里子

正美

和美

悦子

令子

ユミ子

孝子

ミチエ

勇

信博

新同人紹介

三好専平
吐米・敏推薦

福田登美
柳宏子・由多香・雄々推薦

近藤佳子
柳宏子・由多香・雄々推薦

岸本宏章
柳宏子・由多香・雄々推薦

岸本孝子
柳宏子・由多香・雄々推薦

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

国会のテレビわたしもやじとはす
乗り越しを通せんぼする集札機
病む夫の寝息たしかめテレビ消す
お茶の間は野球テレビで父一人
テレビ観る自分を莫迦だと思い

朝子
一道
ますみ
トシエ
鬼遊

それぞれのテレビ見ている核家族
弟の散った南の地を訊ね
じわじわと星の終りを知らされる
不景気のボヤキ肴に縄のれん
人生のラストはまだ向こうなり

まさと
明子
けいこ
いつふみ

風受けて私も夢も背伸びする
この命女でいたい春鏡
その事は模様見ながら腹さめる
隙間風模様替えて埋めようか
風向きを考え会話する夫婦
人模様くぐり人生色を付け
春集め家内が膳を整える
笹の葉を音符に見たて風さわぐ
春ですよタンスの底の株を呼ぶ
空模様明るくなって旅に出る
本音まで話してしまひ春うらら
千切り絵の模様に母の声を聞く
風向きで人の道まで踏みはずす
友禪の模様にかけた浮き沈み
陽は味方風のそしりも恐くない
老い残す模様ながめの明日かも

保子
昌子
智恵子
愛子
千鶴子
和子
悦男
良一
正義
英子
重徳
ふみえ
哲雄
春子
アサ
与呂志

うつとりとドラマみてたらオーイお茶
居酒屋ののれんぐぐれば顔馴染み
平目によう似てはったわと娘の見合
居眠った老母へテレビをそつと消し
別姓にしてから愛が蘇る

春江
知佐子
美代子
民子
明

八寿子
宏

剛治
ミツ子
道子
江子
春子
一風
幸枝
隆盛
寿代
信子
司
友甫
逸子
美智子

テレビより仕事のできるラジオ好き
テレビから見てきたように話すひと
ときどきは眠りぐすりになるテレビ
居酒屋にギターの流れ忘れられ
老骨に百歳テレビ鞭を打つ
ホームドラマ遠い自分をふと重ね
チャンネルのどこを押しても詫びている
テレビから老人ホーム買つ話
引つ付いた離れた昼のワイドショ
すんなり入ってゆけぬ輪の中に
冗談にすんなり受けてくれた友
食いつりテレビに出たとカニツア
チャンネル権は文句なし孫のもの
じわじわと責めてもおちぬ夫頑固
鳩一羽ハト語で世間はなしする

八寿子
宏

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

満秋報

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

満秋報

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

満秋報

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

満秋報

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

立ち直るきつかけくれた父の喝
きつかけを忘れられない雨の駅

満秋報

障害を越えた涙の金メダル
ゴールイン一線はもう越えている
山越えるシエルバの肩が頼られる
原因不明の熱が続いて桜散る

満秋報

原 みさを

柳宏子・由多香・雄々推薦

大谷 幸次郎

柳宏子・由多香・雄々推薦

國 武子

螢・盛桜・諷人推薦

吉 田 孔美子

螢・盛桜・諷人推薦

徳 岡 本丸

螢・盛桜・諷人推薦

谷 口 義

薫風・鬼遊・希久子・恭昌推薦

候補者の自信手袋した握手

医学書を読んでなおさら胸騒ぎ

不良品呼ばわりされた電池ぎれ

病室もやま越えはつと笑み洩れる

不況下の桜へ敢えて馬鹿騒ぎ

原因を究めるほどに藪の中

サイレンの走る行方に胸騒ぎ

越えてきたつらさは言わぬ渡り鳥

何時何処で出来たかすねに青いあざ

兄弟の疎遠は遺産分けてから

危機越えて真のカップルでした

印籠で騒ぎおさまる小気味よき

喧噪の中へひとひら散り落す

艶やかな皺で百歳いまを生き

悲しみを越えて人間丸くなる

騒ぐこと知らなくなつて老いはじめ

わけ聞けば別にと答える反抗期

騒ぐだけ騒いだ後の虚脱感

一線を越えると女強くなる

尻馬に乗れば騒ぎも面白い

温かい視線に自信取り戻す

にこやかに騒ぎ静める実力者

合格が自信に満ちた顔にする

二日酔い騒いだことはとばけとく

堺川柳会

河内 月子報

出来る人だから二番に甘んじる
いつか娘の窓叩く人待っている

八重子
芳江
亜希子
徳三
充子
絹子
純子
道子
かづ子
雅子
省子
トヨ子
ふみ
見早子
街湖
達也
為佐子
句多留
広和
潮華
早智
土風
政勝
満秋

百の窓百の暮しの百の彩

味付けは母に頼んで甘えます

いい湯だなつい鼻歌もれてくる

よく曇る心の窓も拭いておく

認め合う中で夫婦の味となる

言い訳が付いて回つてもつれ糸

おふくろの味はもうない実家の鍋

おとなりのクシヤミ聞こえる春の窓

ひとり居の窓に百ワットが六つ

苦勞した味がにじんだお人柄

いつも初心告げる素顔を持つている

貫けぱうそも嘘なり味がある

一番星につらい話はもうしない

七桁をせつせと書いて早春譜

祈る母つぶやく声が洩れてくる

いつからか突つかい棒がもたれだし

留守番の機嫌とつる桜餅

窓口に立つと用心深くなる

亡母さんに及ばぬけれど祭りずし

いい子ぶり続けてきたがもう切れる

この味は母さんだけが出せる味

薄味はあなたと長く生きたくて

しんみりと話せば味がにじみ出る

一面のつくし希望に燃えている

意気投合月仰ぎつつ燃える恋

いきまひよか津軽奥入瀬紅葉狩

春や春心の窓も開けはなそ

ひとくせもふたくせもあり味自慢

泰虹

冬千代

八千代

梓

かりん

ちや子

半銭

菜々

文

寿美

金三郎

勇太

扶美代

美代子

昭子

りつえ

満州

二南

アキ

千代

深雪

磯子

東雲

小雪

健吾

哲平

頂留子

柳宏子

藤田泰子

山川日出子

角野仁清

寺川弘一

見玉蛙

岡本久峰

鬼遊・楓楽・希久子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・一風推薦

鬼遊・希久子・三郎推薦

鬼遊・希久子・朝子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

鬼遊・希久子・みつ子推薦

5 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 1 時から 魚・つぶやく・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	9 日(土)午後 1 時半から 上 品・雑 談・晴 れ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	10 日(日)午後 1 時から 水・良 心・バ ラ ンス	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川 柳 会	10 日(日)午後 6 時から うっとり・休む・橋・古い	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	11 日(月)午後 1 時から 話・計る・嬉しい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 5 分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	12 日(火)午後 1 時から 立 つ ・ 除 く ・ 毒	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市蜷池中町3-10-28 井上直次
堺川柳会	14 日(木)午後 1 時から じろじろ・苦手(共選)・うしろ(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
南 大 阪 川 柳 会	15 日(金)午後 6 時から 知能・茶・注目・挑戦	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩 3 分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
岸 和 田 川 柳 会	16 日(土)午後 1 時半から 冷静・朗報・わき腹・赤字	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地裡村
川 柳 ねやがわ	17 日(日) 正 午 か ら 主婦・残念・戦略・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	18 日(月)午後 1 時から 右・たっぷり・沈む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩 5 分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	21 日(木) 正 午 か ら 低音・外れる・はつらつ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩 7 分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
京 都 塔 の 会	22 日(金)午前 11 時集合 脳・むさぼる・空想	春の吟行句会 本文 P95 参照 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
東大阪市 川 柳 同 好 会	23 日(土)午後 6 時から さわやか・似る・紙・暗い	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	24 日(日)午後 1 時から 顎・捨てる・デスク・「悪い」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
富 柳 会	28 日(木)午後 1 時から 薔 薇・追 う・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

柳界展望

第29回川上三太郎賞作品募集

雑誌

5句・未発表作品

■表彰―川上三太郎賞(大

審査

時実 新子

野風柳半折作品・賞状・副賞3万円) 準賞(大野風柳

■一次審査―全作品を無記名で審査、成績上位10名を一次審査通過者とする。

■二次審査―一次審査通過者10名を対象に5句1組として無記名で審査、審査員

2名の総合成績で川上三太郎賞1名・準賞2名を決定

新津局私書箱15号

柳都川柳社宛

小山紀乃・「効く」阪本高

士・「くちびる」山本希久

子・「消す」樋口仁・「恋

歌」大木晤郎・「豆腐」峯

裕見子・「伏線」板野美子

各題2句(出席者に限る)

締め切り13時30分。会費2

000円。懇親宴6000

円。事前投句・懇親宴の申

込みは7月31日まで。〒6

10-0121城陽市寺田

深谷8-58中林酔虎宛

★八尾市民川柳会は大路美

「華」奥山晴生謝選・「今」

ねんりんピック'98愛知・名古屋川柳大会

―第11回全国健康福祉祭愛知・名古屋大会―

日時 11月1日(日)午前9時30分開場

場所 刈谷市産業振興センター(刈谷駅徒歩3分)

出句締切 午前11時30分

事前投句

「雑詠」(共選) 2句以内

磯野いさむ 大木 俊秀 関 水華

竹内 孤雁 仲川たけし 藤本静港子

細川 聖夜 保地 桂水 山本 八葉

渡辺 和尾

当日投句

「輪」(共選・詠み込み可) 2句以内

會田規世児 浅野 滋子 板橋 柳子

木野由紀子 木原 広志 新海 照弘

鈴木 如仙 田中 信一 野口 初枝

吉原 辰寿

事前投句応募方法

ハガキに未発表の雑詠2句以内

郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・雅号

(ふりがな)・生年月日・年齢・性別・電

話番号・当日の出欠を明記。

応募期間 5月1日―6月30日(当日消印有効)

応募先 〒448-8501

愛知県刈谷市東陽町1-1刈谷市役所内

第11回全国健康福祉祭愛知・名古屋大会

刈谷市実行委員会事務局宛

▽出 版△

■川柳句集『雪歌』（片上英一著・B6判上製本・154ページ・片上久子発行）平成7年12月25日急逝の片上英一氏を偲んで、高杉鬼遊氏は序文に「句集『雪歌』は彼の遺書である」と記す。あとがき濱田良知。

川上富湖さん「第三回 オール川柳大賞」受賞

オール川柳賞記念大会'98は、3月21日午後1時から三井アーバンホテル・ペイタワールホテルで開かれ各受賞者を表彰した。本社同人の川上富湖さん（和歌山市）が大賞（副賞30万円）に輝いた。

準賞には原井典子（富山県）・海地大破（土佐市）和泉香（滋賀県）・田沢恒坊（青森市）の各氏。佳作32名のうち、同人の古久保和子・川上大輪・高田美代子の各氏が入選した。また、当日の記念大会の特選に同人の小池しげお氏を選ばれた。

■エッセー集『出あいの風景』（瀬戸まさよ著・B6判上製本・190ページ・1500円）同人の瀬戸まさよさんが、34編のエッセーの終わりに川柳を一句ずつ入れた川柳作家らしいエッセー集で、大阪梅田の紀伊国屋書店自費出版コーナーに並べられている。

▼訂 正▲

4月号P3（私の句）救世観音↓救世百済▼P10（川柳塔）上段12行目蘇州杭州↓蘇州杭州▼P96（川柳大会入選作品「門」）下段8行目正面↓正門▼P111（参加者）中段最終行の坊農柳弘氏は奈良県でした。お詫びして訂正します。

▼計 報▲

■福浦勝晴氏（岸和田市・元同人）は3月22日、脑梗塞のため死去。85歳
■渡辺独歩氏（倉吉市・元同人）は3月23日、病氣のため死去。79歳

会 費 事前投句・当日投句とも無料
主 催 厚生省ほか 後 援 (社)全日本川柳協会

奈良番傘川柳会

創立50周年記念近畿大会

—合同句集『飛火野』上梓—

日 時 6月28日（日）正午開場

会 場 奈良県新公会堂 能楽ホール（奈良公園内）

奈良交通バス（市内循環）大仏前下車3分

事前投句 「スタート」 杉野 睦朗 謝選

（はがきに2句 5月20日必着）

宿 題 「つなぐ」 中 田 たつお 選

「都」 前 川 千津子 選

「楽しい」 西 出 楓 選

「樹」 中 川 一 選

「塔」 橘 高 薫 風 選

「石段」 森 中 恵美子 選

出 句 各題2句（出席者に限る） 締切13時

会 費 3000円（記念品・句集・発表誌呈）

懇親宴 7000円（申し込み制・5月20日まで）

申し込み先 〒631-0013

奈良市中山町西3-535-12

黒 川 正 之 進

主 催 奈良番傘川柳会

編集後記

★西尾某名譽主幹が亡くなられた五月、今年から五月の本社句会を榮忌とする。

葉先生の御遺徳を偲んで多数の御出席をお待ちします。

★3月29日、「道頓堀の雨に別れて以来なり」(田辺聖子著)出版記念川柳大会が開かれた。副題に「川柳作家・岸本水府とその時代」と記されているように岸本水府の評伝であるが、明治の終りから大正、昭和を生きた多くの川柳作家、井上剣花坊・西田當百・麻生路郎たちが人生をかけて川柳に取り組んでいた姿が描かれている。

★各新聞にも掲載されたように上下二巻、全部で1300ページの大作で、それだけの長さをじっくりと読ませるのに満ちている。一

人でも多くの人々に読んで欲しい。川柳を作っている人にはもちろん、川柳を知らない人に特に読んでもらいたいものである。

★「川柳って単なるだじやわれやごろあわせみたいに見えるでしよ。本来、面白くて品位のある人間詠なのに」という著者の言葉が嬉しい。

★明石海峡大橋が開通した。先年開通の瀬戸大橋、来年開通の尾道・今治ルートと三つの橋が四国と本州を結ぶことになる。便利になるのはいいことだろうが、何かそれ以上に大切なことを忘れていくように思える。

★今、ペランタにチューリップの鉢が並んでいる。新種ばかりで牡丹のような大輪の八重咲きや花弁のとがった花より、昔ながらのコープ状の赤や白のあどけない姿がほほえましい。(み)

身の程を知る

八五〇号記念大会の余興の司会を仰せつかる。いざ百五十名からのましてやほろ酔いで賑やかに歓談している人達の前に立った時は「しまった」と事の重大さを初めて思い知った。第一声をどのように出せばいいのだろうか。とまどいの中でみなさんと声をかけてみた。すると返事が返ってきた。とつごいまた。

打てば響いて下さるのだと心を取

(大内 朝子)

☆背負った母が

すこし重たい春の闇

私の句である。大切な母

(八十九歳)が実家で一人

暮しをしている。骨粗鬆症

の為、時折腰痛堪え難くな

ると寝込むが、トイレだけ

は這ってでもいくので今の

ところ寝たきりというわけ

ではない。掃除、洗濯をお

願っていた人も高齢とな

り辞めたので、公的機関の

ところ、一週間に一度、そ

れも一時間だけと言う。

どうしても仏壇のある住

み慣れた家を離れられない

母の我が儘を通してやるに

は、民間のヘルパーさんを

時折頼みながら、私ができ

るだけ暇をみて、話し相手

と手伝いに訪ねるしか術が

ない。片道一時間半程の距

離である。

兄が一人いるのだが仕事

もあり、男では役に立たず、

冷たい風が吹いている。(希)

☆もう一人夫の母(九十二

歳)は老健施設と、長男の

家を半々に過ごしている。

命永く、核家族化の時代

それは遠からぬ将来の私自

身の姿でもある。

☆介護保険はどれほどの役

に立つのか、一男一女の子

供にあまり負担をかけたか

はない。さて我が身の処し

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

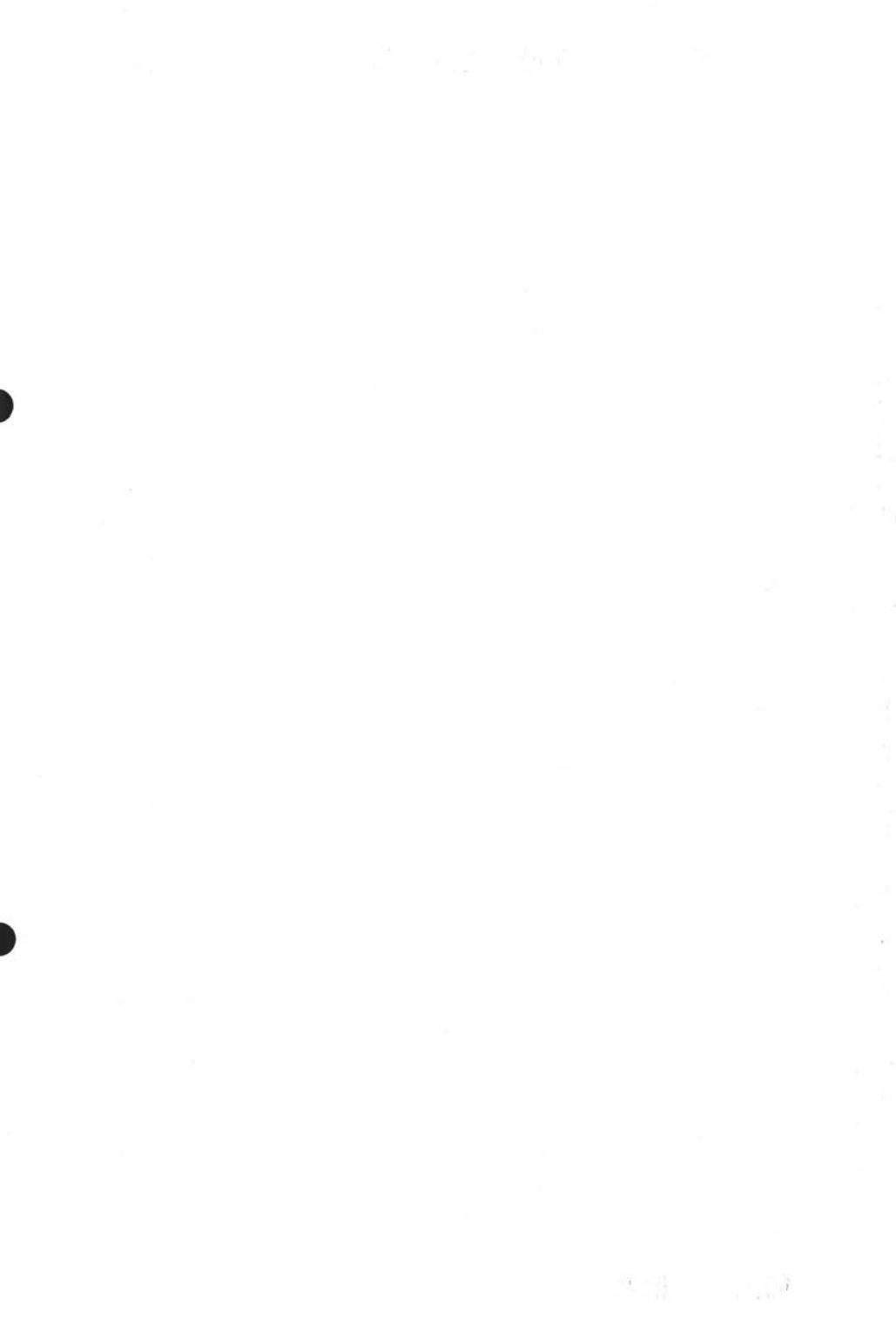
「発表（7月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。



作品募集

初歩教室	課題吟 (3句)	「川」	7月号発表 (5月15日締切)
	「変化」	「ささやか」	
吐田公一担当	西川和子選	古谷節夫選	橋高薫風選
	宮西弥生選	八木千代選	西田柳宏子選
水煙抄 (8句)	荻湖抄 (3句)	荻香の花 (3句)	川柳塔 (8句)
	「うっかり」	「墓」	
席	筋	筋	
	筋	筋	

8月号

課題吟 「うっかり」「墓」
初歩教室 「筋」

本社6月句会 8日(月) 予定

兼題 「短 い」「やさしい」「雷」
「鉄」「おふくろ」

本社句会への投句について

本社句会への投句は、句箋(19×4cm)に一葉一句・二句以内、各葉ごとに裏面に氏名を明記し、投句料(80円切手5枚)を同封、必ず句会の前月末までに本社事務所あて。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第12回「徳」 橋高薫風選
ハガキに3句 5月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限りま。
- (2) 渺湖抄・荻香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし荻香の花欄は女性だけ。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・氏名)を明記してください。
- (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

定価 六百元(送料76円)

半年分 四千元(送料共)

一年分 七千九百円(同)

平成十年 五月一日発行

編集兼 発行人 橋高薫

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (六六六)一六九一四番

振替 〇〇九八〇一五二二二六八番

第22回 全日本川柳山口大会

とき 6月14日(日) 午前10時開場
ところ 萩市民館・大ホール

宿題 第1部(事前投句・5月10日締切)
(萩市江向495-4)

「豊か」 小林 由多香 選
「輝く」 小島 蘭 幸 選
「ほのぼの」 永石 珠子 選
◎3.5×18cmの句箋1枚に1句宛記入、各
題2句、無記名、封筒に住所・氏名を
明記、投句料1000円(定額小為替
現金書留)を同封して左記へ郵送。

投句先 〒530-0041 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
ステッブイン南森町702号

宿題 第2部(当日出句・午前11時半締切)
全日本川柳協会大会係

「仲間」 月原 宵 明 選
「揃う」 黒川 笠子 選
「現役」 猿田 寒坊 選
「大物」 太田 紀伊子 選

会費 3000円(昼食・記念品代共)

観光 6月13日(土)・3000円

前夜祭 同日午後6時半・8000円

◎宿泊・観光・前夜祭の申込は5月10日まで
に左記へ

申込先 〒758-0057 萩市堀内170-5 進藤竹生方

全日本川柳山口大会事務局

第13回国民文化祭・おおいた'98

川柳作品募集要項―燦々と詩歌が光る豊の国―

応募受付期間 4月1日(水)～6月30日(火)(消印有効)

事前投句(各題2句・共選・未発表作品に限る)

「駅」 萩原 柳 繁・佐藤 真砂 延
「半島」 小松原 爽介・野口 初枝
「風」 大木 俊秀・早川 双鳥
「人間」 小嶋 旬月・斎藤 大雄

応募料 1000円

応募方法 大分県実行委員会作製の「募集要項」を御覧
の上、所定の応募用紙を使用のこと。

応募先 〒879-5102 大分郡湯布院町川上37558-1

第13回国民文化祭湯布院町実行委員会
事務局「文芸祭」川柳係

発表川柳大会 10月24日(土)10時～15時

湯布院町立由布院小学校体育館

当日投句 「碑」 外山 あきら・兵頭 まもる
「竹」 坂本 柳 峯・森中 恵美子

賞(予定) 文部大臣奨励賞 他多数

問い合わせ及び募集要項請求先

〒879-5102 大分郡湯布院町川上37558-1

第13回国民文化祭湯布院町実行委員会事務局

(電話)0977-184-12604

主催者 文化庁・大分県・(協)全日本川柳協会・他